公立大学法人
福島県立医科大学

ふくしま子ども・女性医療支援センター
開設から５年の歩み

2016～2020

2016 ～ 2020 Fukushima Medical Center for Children and Women, Fukushima Medical University

目次

ふくしま子ども・女性医療支援センター
開設から５年の歩み

2016～2020
2016 ～ 2020 Fukushima Medical Center for Children and Women, Fukushima Medical University

1. 巻頭言／寄稿

巻頭言　髙橋　俊文　ふくしま子ども・女性医療支援センター　センター長 …… 2

寄　稿　内堀　雅雄　福島県知事 …… 4

竹之下 誠一　福島県立医科大学　理事長兼学長 …… 5

ふくしま子ども・女性医療支援センター　スーパーバイザー
吉村　泰典　福島県立医科大学　副学長 …… 6

一般財団法人脳神経疾患研究所　常任顧問
菊地　臣一　福島県健康医療対策監 …… 7

福島県立医科大学名誉教授
阿部　正文　福島県病院局　病院事業管理者 …… 8

井出　孝利　福島県副知事 …… 10

細矢　光亮　福島県立医科大学　小児科学講座　主任教授 …… 11

藤森　敬也　福島県立医科大学　産科婦人科学講座　主任教授 …… 12

田中　秀明　福島県立医科大学附属病院　小児外科教授 …… 13

2. ふくしま子ども・女性医療支援センターの概要 …… 15

ふくしま子ども・女性医療支援センターとは …… 16

3. ふくしま子ども・女性医療支援センターの沿革 …… 19

4. ふくしま子ども・女性医療支援センター事業と５年間の実績 …… 29

医師招へい事業 …… 30

地域医療支援事業 …… 33

人材育成支援事業（医師スキルアップ事業）…… 34

福島県立医大内医療支援事業 …… 38

広報・啓発事業 …… 43

その他の事業 …… 51

5. センター教員 ……55

常勤教員（過去の在籍者を含む）

水沼　英樹　特命教授／前センター長（産婦人科）……56

髙橋　俊文　教授／センター長（産婦人科）……60

横山　浩之　教授（小児科）……62

西郡　秀和　教授（産婦人科）……63

神保　正利　特任教授（産婦人科）……64

南　洋輔　特任助教（小児外科）……65

鈴木　大輔　特任講師（産婦人科）……66

太田　邦明　講師／特任准教授（産婦人科）……67

非常勤教員

福島　明宗　特任教授（産婦人科）……68

清水　直樹　特任教授（小児科・PICU）……69

新津　健裕　特任講師（小児科・PICU）……70

齊藤　修　特任講師（小児科・PICU）……71

磯部　真倫　特任講師（産婦人科）……72

荻原　重俊　特任助教（小児科・PICU）……73

福井　淳史　特任教授（産婦人科）……74

6. センター教員の研究業績 ……75

7. その他 ……105

ふくしま子ども・女性医療支援センター教員名簿 ……106

ふくしま子ども・女性医療支援センター要綱 ……108

ふくしま子ども・女性医療支援センターのシンボル・ロゴマークとロゴ…109

福島の子どもと女性の生涯にわたる健康サポートを目指して

「福島県の女性が安心して子どもを産み、育み、女性の生涯にわたる健康サポート」をスローガンに、ふくしま子ども・女性医療支援センター（以下センター）が設立されました。センター開設から５年が経過しましたので、これまでの当センターの事業と実績を冊子にまとめました。

本県では東日本大震災前から、産婦人科、小児科医師が不足していましたが、震災をきっかけに状況はさらに悪化しました。これに対して県は、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育て、そして女性が健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことを目的に、2016年４月、福島県立医科大学（以下医大）に本センターを開設しました。

センターの開設には、内堀雅雄県知事、前医大理事長である菊地臣一先生、当センターのスーパーバイザーで副学長の吉村泰典先生、前総括副学長の阿部正文先生、センター開設時事務局長の井出孝利副知事の多大なるご尽力がありました。また、センター開設後には、現医大理事長である竹之下誠一先生の絶大なる支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

センターの為すべき最重要課題は、産婦人科、小児科医療のエキスパートを教員として本県に招き、医療の支援と教育を通じて、産婦人科・小児科医師のスキルアップと県内定着を目指すことです。開設から５年間で、福島県内の産婦人科、小児科医師の増加のために有形・無形のサポートを行ってまいりました。

2016年４月から2021年３月までの５年間で、新たに福島県で産婦人科と小児科医師を志した医師数は、それぞれ33名、28名でした。指導医クラスの産婦人科医師を含めると、５年間で延べ36名の産婦人科医が新たに福島県で診療に従事しました。これは、医大産科婦人科学講座、小児科学講座、そして我々センターの協力体制がうまく機能した結果と確信しております。

開設当初は、センター長を含む３名の医師（産婦人科２名、小児科１名）が常勤でしたが、2021年４月現在では、常勤５名（産婦人科３名、小児科１名、小児外科１名）、非常勤９名（産婦人科５名、小児集中治療医４名）となっています。いずれも産婦人科、小児科医療のエキスパートで、福島の医療復興に熱意を持ち赴任されたので、県内でも高い評価を受けています。

初代センター長であった故水沼英樹先生の後任として、2020年11月から、髙橋が２代目のセンター長を拝命しました。センター長となり、はじめに考えたのが、センターの歩み（記録）を残すことでした。センターの開設に携わった方々およびセンター教員として一緒に仕事をしていただいた方々からも、貴重な文章をいただきました。

本冊子が今後のセンターのさらなる発展と福島県の産婦人科、小児医療の充実に繋がることを祈念して、巻頭言とさせていただきます。

ふくしま子ども・女性医療支援センター
センター長
髙橋 俊文

寄稿

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立５周年に寄せて

福島県知事　内堀雅雄

ふくしま子ども・女性医療支援センターの皆様には、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

また、今般の新型コロナウイルス感染症の影響で、日本中が未曾有の困難に直面している中、現場医療を支えていただいている医療従事者の皆様に改めて深く感謝申し上げます。

本県では東日本大震災を契機に医師の県外流出による医師数減少が深刻な問題となり、従来絶対数が不足していた産婦人科医師及び小児科医師がさらに減少することとなりました。周産期医療に従事する医師の不足から、現場で働く医療従事者の負担が極めて深刻であることに加えて、県内の分娩施設も年々減少していたことから、周産期医療体制の充実が喫緊の課題でした。

貴センターには、本県のこうした厳しい周産期医療体制を充実し、「本県に住む女性が、安心して子どもを産み、育て、そして健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことを目的として、平成28年の設立以来、様々な医療支援を賜りましたことを、改めて厚く御礼申し上げます。

貴センターの設立以降５年の歩みの中で、従来不足していた産婦人科医師、小児科医師の県内医療機関への招へい事業や、医学生や若手医師の人材育成・啓発事業及び地域医療等における支援事業等により、周産期医療に携わる医師の養成や診療応援など、女性が安心して子どもを産み育てるための環境づくりを進めていただいております。

また、産婦人科医療については、助産師外来の設立や普及等の強化事業、小児科医療については県内初の小児集中治療室（PICU）の設立や小児外科医の診療体制強化等の様々な事業を通して、周産期医療提供体制の充実を図り、本県の復興を前に進めていくための大きな役割を果たしていただきました。

県としましても、福島県立医科大学をはじめ、関係機関と協力しながら、産婦人科医師や小児科医師のさらなる養成や、周産期医療提供体制の充実等、県内に住む女性が安心して子どもを産み、健康に暮らしていける環境づくりに一層取り組んでまいりますので、皆様には引き続き、御理解、御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

結びに、貴センターの今後の活動がさらに実り多きものとなりますよう、皆さんの御健勝、御活躍を心からお祈り申し上げ、挨拶といたします。

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立５周年に寄せて

福島県立医科大学
理事長兼学長
竹之下 誠一

この度、ふくしま子ども・女性医療支援センターが開設５周年を迎えたこと、心よりお慶び申し上げます。また、このセンターの構想時から現在に至るまで、多くの学内外、県関係者の皆様の多大なるご支援をいただきましたことを、この場をお借りし、改めて厚く御礼申し上げます。

もともと小児科医、産婦人科医が少ない福島県において、震災、原発事故により、安心して福島で暮らせるのかという住民の不安は大変大きなものでした。そして、安心して福島の地で暮らせること、特に、次世代を担う子どもたちが福島で元気に成長できることは、何よりも復興を着実に進めるために重要かつ不可欠な要素でした。

そのニーズに応えるため取り組んだのが、ふくしま子ども・女性医療支援センターの開設です。「福島の女性が安心して子どもを産み、育み、健康な一生を過ごせることをめざして」をモットーに、思春期から老年期に至る女性の一生の健康を一貫してサポートする体制は国内でも非常に稀なものであり、複数の診療科が緊密に連携する画期的なものでした。さらに、単に医療支援の医師を派遣するのではなく、若手医師へのレクチャー等を通して、県全体の産婦人科医療や小児科医療の質の底上げを図るスキームや、医師のリクルート、教育、育成する体制を確立させるなど、他大学、他院にない特徴が多岐にわたる秀逸なものでした。そしてそのいずれもが小手先の課題対応ではなく、福島県が抱える産婦人科医療、小児医療の課題を根本的に解決することを狙ったものであることは特筆に値します。

このように全国でも稀な組織を立ち上げ、軌道に乗せることができた背景には、特に触れずには通れないお二人のご活躍があります。お一人は、生殖医学の権威で、内閣官房参与（少子化対策・子育て支援担当）を始め、多くの学会の要職を歴任されておられる、吉村泰典先生。もうお一方は、女性医学の権威で、多くの学会の要職を務められてきた故水沼英樹先生です。お二人には広い人脈をフルに活用いただき、このセンター開設のために多方面からの支援を取り付けていただいただけでなく、積極的な企画立案と実施、学内外の交渉をまとめていただきました。そして、最も私の心に刻まれたのは、復興を支える本学の使命を汲み取り、このセンターに懸けるお二人の情熱の熱さでした。

センター開設から５年を経て、多くのプログラムのノウハウを継承することはもちろん大切なことです。しかし、時間の経過とともに、ノウハウだけがその目的や背景も分からず引き継がれていくことが多い中で、このセンターでは、担うべき使命と、そこに懸ける情熱までもが、今、このセンターを支える多くの若手メンバーたちに受け継がれ、ますますその熱量を増しているように感じます。これも、吉村先生、故水沼先生のお人柄と、ご指導の賜物であろうと推察いたします。

これからの５年は、その情熱が次第に組織を超えて県内に広がり、福島で暮らす全ての人々のさらなる安心へとつながっていくことを期待しています。（水沼英樹先生を偲びながら）

女性と子どもに優しく

福島県立医科大学　副学長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　スーパーバイザー
吉村 泰典

2011年３月11日の東日本大震災は、東北地方に未曾有の被害をもたらしました。就中福島県は震災と津波、そして原発事故という三重苦に直面し、県下の周産期医療は、中堅の産婦人科医が離れたこともあり、懸命の努力にも拘らず、危機的な状況に陥りました。このような惨状に対し、日本産科婦人科学会は、福島県の周産期医療を守るため全国の大学に呼びかけ、県内４ケ所の主要基幹病院に医師を派遣するという一大事業を展開いたしました。この支援事業は３年半にも及び、実にのべ200名にも及ぶ各大学の中堅医師が派遣されました。

この医師派遣事業により福島県下の周産期医療も漸く安定し始めた頃、内堀雅雄福島県知事から「恒久的に産婦人科医や小児科医を支援できる体制を整備できないか」との申し出を受け、県や福島県立医科大学の多大な御尽力で2016年４月にふくしま子ども・女性医療支援センターが誕生いたしました。産婦人科・小児科領域のエキスパートが、福島県内医療機関の医療支援を行うとともに、妊娠前から妊娠、出産、子どもの成長、女性の生涯にわたってその健康を支え、さらには子どもと女性医療に携わる医師の育成にいたるまで、全国でも稀代の取り組みです。福島県復興への歩を着実に進めその未来を築いていくのは、女性と子どもたちです。女性が健康で心健やかに産み、安心して子育てができるような社会、若い世代が子どもを作り育てたいと思う社会の形成を目指しています。

センターの開設から５年が経過しました。初代センター長をお願いする予定にしていた故水沼英樹先生に、当センター設立の趣旨をお話ししたところ、時を移さず快諾していただきました。センター長に就任されてからは、福島県下の医療および本センターのあり方について、総合的・俯瞰的な見地からその方向性を示して来られ、水沼先生のご指導ならびに医大の竹之下誠一理事長の絶大なる支援のもと、センターの充実が図られ、わが国でも類を見ない医療支援センターとして発展してきております。現在センターに従事する医師も増え、福島県下の産婦人科医療も拡大されてきています。県の強力な支援を受け、大学と連携して進める本事業は、今後わが国の災害後の支援のモデルケースになると思われます。

少子化は社会を映す鏡です。少子化の危機を突破するためには、福島県においても、妊娠・出産・子育ての経済的不安要因の解消や、子育てしながら就労しやすい環境の整備が必要となります。震災や現下のコロナ禍などの有事の際には、女性と子どもたちにしわ寄せが及びます。未来を創る女性と子どもに優しい県でなければなりません。世界で福島を知らない人はいません。原発で苦しい思いを経験したこの福島の地から、女性や子どもの健康力維持のための支援を始める意義は大きく、当センターの設立５周年にあたり向後のさらなる発展を願ってやみません。

皆様方におかれましては、何とぞ倍旧の御指導と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立５周年に寄せて

福島県健康医療対策監
一般財団法人脳神経疾患研究所　常任顧問（センター開設時：理事長兼学長）
菊地 臣一

ふくしま子ども・女性医療支援センターが開設して５周年、歳月の過ぎる早さにたじろぎます。と同時に、多くのknow-howや人材の蓄積がセンターにできたのではとも思っています。

センター開設のきっかけは、県知事の内堀雅雄氏からの申し出でした。原発事故発生後、福島県の人口は劇的に減少しました。特に、働き手の県外流出が最も目立ちました。医療従事者の流出も例外ではなく、例えば医師は、当時、152名が退職して本県を去りました。次の時代を担う子どもを産み育てる女性の不安は大きく、“福島県では子どもを産めない”との風評も無視できない程大きいものがありました。

このセンターは、“福島県復興の鍵は、女性が、一生、安心して暮らせる社会の実現にある”との思いからの知事の発想でした。当時、私は大学のトップにあり、構想の実現を託されました。

私のこのセンターのコンセプトは、先ず、一流の教職員を招へいすることでした。次に、このセンターに来れば女性の一生に就いての医学を最高のレベルで学べること、としました。その為には、学内で人材を求めるのではなく、全国に声を掛ける必要がありました。その為、日本産科婦人科学会の前理事長で慶應義塾大学名誉教授であった吉村泰典先生と副理事長であった杏林大学医学部産科婦人科学教室教授の岩下光利先生にお会いできるように手配しました。その席上、当時、本学事務局長で、現在副知事である井出孝利君に同席を依頼しました。前もって詳細な説明は通しておきました。この席では、私や知事の熱意を分かってもらう様に思いの丈を両先生にぶつけました。その結果、今は亡き水沼英樹弘前大学大学院産科婦人科学講座教授がセンター長に就任して下さる事になりました。

発足当時は教職員７名でしたが、2021年４月時点で15名と組織は大きくなりました。現在の活躍は、開設の目的を達したと言えます。

これからの５年間、私が望むのは、創設時の理念を忘れないでほしいということです。そして、学内の一ポストという発想は決してとらないでほしいということです。全国、必要なら海外から人材をセンターに招へいし、我が国のこの分野のメッカの一つとして発展し続けて欲しいと願っています。

最後に、改めて故水沼英樹先生に感謝の誠を捧げます。そして、センター設立を決断して下さった内堀雅雄知事には、これからも本センターを見守っていただければ幸いです。

センター立ち上げを振り返って

福島県病院局　病院事業管理者
福島県立医科大学名誉教授(センター開設時：総括副学長)
阿部 正文

ふくしま子ども・女性医療支援センターが2016年４月に開設されて以来５年が経過し、本年度で６年目を迎えられましたこと誠におめでとうございます。心から、お喜び申し上げるとともに、これまでセンターの充実と発展に尽力されてまいりました吉村泰典副学長、故水沼英樹前センター長を始めセンターの教職員の皆様に改めて敬意を表したいと思います。

さて、私は大学の総括副学長・法人経営室長としてセンター立ち上げに関わりましたので、その一端を振り返ってみたいと思います。

福島県は従来から産科医、小児科医の不足による周産期医療に従事する医師の過重労働や分娩施設の減少が深刻な状況にあり、周産期医療体制の確保と強化が大きな課題となっていました。一方、日本産科婦人科学会及び日本産婦人科医会は2014年12月13日に地域における安全な妊娠分娩環境の確保の観点から「わが国の産婦人科医療再建のための緊急提言」を行い、都道府県等に対して、１）産婦人科新規専攻医増加のための施策の実施、２）産婦人科医養成のための体制整備、３）基幹分娩取扱病院の勤務条件の改善を速やかに対応することを求めました。

福島県においてもこの危機的な状況の打開が求められ、周産期医療を担う医師の養成・確保による安全な妊娠分娩環境の確保や周産期医療体制の強化は喫緊の課題としてクローズアップされました。そのため、福島県は福島県立医科大学に委託事業として周産期医療に焦点を合わせたセンターを設置し、周産期医療を担う質の高い医師を養成し、県民が安心して子どもを産み育てることができる環境の整備を図ることとしました。福島県の要請を受け、大学は2015年３月からセンター設立の準備にはいりましたが、センター設立の核になる知名度の高い専門家の招へいが最優先の課題でした。

当時の菊地理事長兼学長の尽力で、吉村泰典先生（慶應義塾大学名誉教授、元日本産科婦人科学会理事長、内閣官房参与）を副学長（非常勤）としてお迎えすることができました。さらに、吉村先生のお力添えにより水沼英樹先生（弘前大学産科婦人科学講座教授、日本女性医学会理事長）をセンター準備室室長（特任教授、非常勤）として招へいすることができました。

2015年７月から私と事務局は吉村先生、水沼先生、藤森先生（本学産科婦人科学講座教授）、細矢先生（本学小児科学講座教授）の先生方とセンターの名称、センター開設までの工程、事業の目的と実施内容、県外医師の招へい等に関して打ち合わせを開始しました。2015年11月１日にふくしま子ども・女性医療支援センター準備室を正式に立ち上げ、公表しました。準備室の構成員は室長として水沼先生、室員として藤森先生、細矢先生、河原田事務局次長、國分企画財務課長、橋本教育研修支援課長、齋野病院経営課長、玉川総務課副課長からなり、

吉村副学長と私はスーパーバイザーとして参画しました。

2016年４月４日のセンター開設に向け、事業内容の検討、学内外の関係機関との調整、県外からの医師の招へい等に邁進し、予定通り2016年４月４日にふくしま子ども・女性医療支援センターの開所式を無事催すことができました。当センターの理念は「妊娠前段階から妊娠・出産、子どもの成長、女性の生涯にわたる健康を一貫して支える」ことであり、福島県に住む女性が安心して子どもを産み育て、健やかな生活を送れるよう、子ども医療と女性医療の両方の視点から医療支援を行うもので、全国的にも例をみないユニークなセンターであります。

小児科部門の事業の柱は、①小児集中治療室（PICU）の開設、②小児発達障害医療の充実・強化、③地域医療支援と人材育成であり、一方産婦人科部門は①生殖医療の充実、②分娩環境の整備と産科救急体制の整備、③女性に特有な疾患に対する予防医学の普及と実施、④地域医療支援と人材育成であります。

開設当時のセンターの教員は吉村副学長兼スーパーバイザー（非常勤）、水沼センター長（常勤）、髙橋俊文教授（常勤、産婦人科部門担当）、横山浩之教授（常勤、小児科部門）、福島明宗特任教授（非常勤、岩手医科大学医学部臨床遺伝学科教授）、清水直樹特任教授（非常勤、東京都立小児総合医療センター救命・集中治療部部門長、現聖マリアンナ医科大学小児科学教室教授）および２名の特任講師（非常勤、東京都立小児総合医療センター救命・集中治療部集中治療科医長）の計８名でした。現在、教員は常勤、非常勤を含めて計15名まで増加し、事業も着実に成果をあげ、福島県の小児科医療、産婦人科医療に多大な貢献をされています。ふくしま子ども・女性医療支援センターの立ち上げに関わった一員として喜ばしい限りです。センターの教職員の皆様の今後ますますのご活躍、ご発展を祈念いたします。

最後になりましたが水沼センター長が2020年７月病気にて亡くなられましたことは誠に残念でなりません。水沼先生には福島県の女性が安心して産み、育み、そして健康な一生を過ごすことができるよう全力で尽力していただきましたことに深く感謝申し上げるとともに、謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

ふくしま子ども・女性医療支援センター教員と（2016年４月４日）（左から、吉村、水沼、阿部、髙橋、横山）

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立５周年に寄せて

福島県副知事
（センター開設時：理事兼事務局長）
井出 孝利

ふくしま子ども・女性医療支援センターの５周年誌の刊行にあたり、貴センターの設立に関わらせていただいた、当時の福島県立医科大学理事兼事務局長として、一言ご挨拶申し上げます。

貴センターの設立にあたっては、本県において、周産期に関連する人材育成が大きな課題であったことから、平成27年度から事業化を進めており、県と福島県立医科大学が議論を重ねる中で、周産期分野の人材育成を進める上で、新たなセンターを立ち上げ、産科婦人科学講座や小児科学講座と連携して当該分野の人材を育成していくことが必要とされました。

また、私がセンター設立に携わらせていただくにあたって、多くの方々の御協力や御指導をいただきました。特に、周産期分野に関わる２人の先生との出会いが大きかったと感じています。１人は吉村泰典先生、もう１人は水沼英樹先生です。

日本産科婦人科学会理事長であり、当時は内閣官房参与でもあった吉村先生には、事業の構築にあたり、様々な御助言や御協力をいただきました。吉村先生は以前から本県の産婦人科の発展に御協力いただいていたこともあり、センター設立後も医大の副学長兼スーパーバイザーとしてセンターの活動に熱心に関わっていただいており、大変感謝しております。また、吉村先生の御協力を得ながら、当時の弘前大学産科婦人科学教授で日本女性医学会理事長として産婦人科学分野で人望の厚かった水沼先生に参画いただき、センターの基本コンセプトを早期に固めることができました。

初代となられた水沼前センター長は、産科婦人科学講座・小児科学講座の全体でしっかりと専門医を集め、育てることが、周産期分野の人材育成につながると考えておられました。

こうした理念に基づき、子どもを産み、また産まれてからの小児診療、その後の思春期ケア等、包括的な範囲で診療・支援を行うセンターとして「ふくしま子ども・女性医療支援センター」は平成28年４月に開設されました。こうした生涯にわたりケアしていくというセンターの取り組みは全国でも他にない唯一無二のものだと思います。

この素晴らしい「ふくしま子ども・女性医療支援センター」の立ち上げに事務局長として関わることができたことを大変ありがたく感じています。

貴センター開設後も、水沼前センター長の下、多くの優秀な人材の確保に努められました。現在のセンター長となる髙橋俊文先生もセンターからの招へいを快諾していただき、内視鏡治療や不妊治療分野の強化にご尽力いただくなど、人材育成に大いに寄与されていらっしゃいます。

水沼先生におかれましては、闘病の末、残念ながら御逝去されましたが、髙橋センター長をはじめ、貴センターの皆様が水沼先生の遺志を継いで、貴センターの発展、産婦人科、小児科分野の人材の更なる育成・強化に貢献いただくことを、改めて県よりお願い申し上げます。

結びに、貴センターの今後ますますの御発展をお祈り申し上げまして、挨拶といたします。

福島県の小児と小児医療を守るために

福島県立医科大学　小児科学講座
主任教授
細矢 光亮

少子高齢化の時代、福島県内のどこでも安心して子どもを産み育てることができるよう、子どもたちがどこでも等しく適切な医療を受けられるようにしなければなりません。しかし、福島県は面積が広く、全国と比較して15歳未満小児人口に対する小児科医数は少なく、その上、医療の発達に伴い一人の小児科医が広範な小児科分野を担うのが難しくなってきています。県内の小児と小児医療を守るためには、身近な疾患は最寄りのかかりつけ医が診療し、入院治療が必要な中等症の患者さんは地域の二次医療機関（総合病院）小児科に入院し、高度な治療が必要な重症のお子さんは三次医療機関に搬送してもらうという、医療機関の役割分担と連携が必要です。2017年４月に、福島県立医科大学附属病院に小児集中治療室（PICU）を持つこども医療センターと新生児集中治療室（NICU）が拡充された総合周産期母子医療センターが整備され、県内全域で、すべての子どもたちが、疾患の重症度に合わせて適切な医療を受けられるという理想の形に近付いています。

ここに至るまでには、ふくしま子ども・女性医療支援センターの支援が不可欠でした。PICUが稼働するためには、そのスタッフの育成が必要です。まず、東京都立小児総合医療センター集中治療科の清水直樹部長（現 聖マリアンナ医科大学小児科学教室教授）にふくしま子ども・女性医療支援センターの特任教授に就任いただき、PICUの整備計画の段階から幅広く指導いただきました。特に、当科の医師３名が同センターで研修を受け、診療経験を積んで、現在は彼らがPICUの中心メンバーとして活躍しています。また、同センターのスタッフを、ふくしま子ども・女性医療支援センターの非常勤職員として招へいし、医師、看護師、および学生への指導をお願いし、常に診療レベルの向上を図っています。

近年の小児医療のもう一つの問題に、発達障害を持つ子どもの増加があります。その数はてんかん患者さんの10倍にもなります。そのような多数のお子さんを一か所に集約して診療することはできませんので、地域の医療機関で診察を受け、その地域で子育て支援を受けられるシステムの構築が必要になりました。そこで、発達障害診療のエキスパートである横山浩之先生を、ふくしま子ども・女性医療支援センターの教授として招へいし、発達障害に苦しむ子どもとご家族を地域で支える仕組み作りをお願いしました。地域医療機関の医師に発達障害診療の指導をいただくとともに、地域の保健師、保育士、教師などが発達障害を持つ子の特性を理解した上で、児が生活しやすい環境を整える取り組みを進めていただいています。

福島県の子どもたちが、どこでも等しく適切な医療を受けられるよう、ふくしま子ども・女性医療支援センターの支援をいただきながら、引き続き努めてまいります。

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立5周年おめでとうございます！

福島県立医科大学　産科婦人科学講座
主任教授
藤森 敬也

ふくしま子ども・女性医療支援センター開設５周年、誠におめでとうございます！ センターの先生方にはいつも大変お世話になっております。

さて、ふくしま子ども・女性医療支援センターの開設に関してですが、東日本大震災後の平成27年（2015年）に、福島県が県内の産婦人科医・小児科医の医師不足の解消を目的に、「福島県周産期医療支援センター」構想を立ち上げました。有難い構想ではありましたが、正直なところ、その時はいったいどなたがセンター長としていらっしゃるのか、第２産婦人科講座ができないかなど、とても心配しておりました。この構想に伴い、吉村泰典先生が福島県立医科大学・副学長にご就任され、吉村先生のご尽力により、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育み、そして健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことを目的とする「ふくしま子ども・女性医療支援センター」構想へと発展し、平成28年（2016年）に水沼英樹先生をセンター長にお迎えして無事に開設される運びとなりました。実は、水沼先生には、弘前大学をご退官される数年前から、ご退官後は福島に来ていただけないかとお願いしておりました。その度に、その温和な笑顔で「ありがとうね、考えておきますね」とおっしゃっていただいておりました。水沼先生とは弘前大学教授でいらっしゃるときから、研究分野は異なるものの、そのお人柄、指導力は十分に認識させていただいておりました。また、誕生日が同じ３月31日（13歳違いで、特にこの日には年度末という特別な日という認識が、我々にはあります）ということで、妙な親近感がありました。水沼先生がいらっしゃって下さったと思っておりましたところ、センター長に決まってホッとしたことをつい先日のように覚えております。さらに、山形大学から髙橋俊文先生がご着任されました。

しかしながら、水沼英樹前センター長におかれましては昨年７月にご逝去されました。短い期間ではございましたが、水沼先生からたくさん学ばせていただいたこと、学問と教育へのその熱意は医局員ともども引き継いでまいりたいと思います。改めて御礼を申し上げるとともに、再度、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

現在、センターの先生方には、定期的な県内病院のサポートとともに、髙橋俊文センター長には、私の専門外である、生殖・内分泌、鏡視下手術を臨床面、研究面のサポートをしていただいており、また、神保正利特任教授には産科を中心とした臨床サポートと助産師教育を、西郡秀和教授にはエコチル福島県ユニット副センター長として、さらに妊産婦メンタルヘルス（これまた、私の不得意とする妊娠合併症です。私は、妊娠合併症は何でも診ますが、精神科疾患だけはダメ、と教室員には話しております）を中心とした臨床、研究のサポートをお願いしており、大変助かっております。また、鈴木大輔先生には、白河厚生総合病院、太田西ノ内病院と、県内の基幹病院を支えていただいております。

今後とも、福島県内の産婦人科医療のみならず、我々の教室をサポートしていただければと存じます。よろしくお願いいたします。

ふくしま子ども・女性医療支援センター設立５周年に寄せて

福島県立医科大学附属病院　小児外科教授
田中 秀明

この度は、ふくしま子ども・女性医療支援センターが開設５周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私は2017年１月に附属病院小児外科にまいりました。当センターの様子を伺い知る中で、小児科と産婦人科が一体となり、県の支援の元に女性医療そして周産期・小児医療を盛り上げていこうとの理念は斬新で、センターの諸先生方の気概と大きなエネルギーを感じたのを覚えています。県唯一のPICU（小児集中治療室）は私の赴任後程なく稼働しましたが、この実現にはセンターの強力な後押しがあったことも分かりました。PICUに現在も定期的に診療支援にお越しいただいている清水直樹先生（聖マリアンナ医科大学小児科学教室教授）、齊藤修先生（東京都立小児総合医療センター集中治療科部長）は、私が国立成育医療研究センター外科で修練を積んでいた際にそちらのPICUにおられ、この福島の地で再会できたことは大変な喜びでありました。センターの支援のもと小児医療の最後の砦ともいえるPICUがさらに発展していくことを願ってやみません。

産婦人科の藤森教授のご尽力により、胎児に異常が見つかった妊婦さんは全て医大へ集まります。小児科の細矢教授や教室の先生方、また関連の施設からも多くの外科疾患の患者さんを紹介いただいております。赴任当時は当科のスタッフが２人のみという、マンパワーの点で大変な困難な状況でした。そのような中センターに初めて2020年度より小児外科医を受け入れていただけるようになったことはこの上ない喜びです。竹之下理事長、吉村副学長、阿部前総括副学長の後押しをいただき、水沼前センター長中心に交渉いただいたお陰で、内堀県知事はじめ県の担当の方々に小児外科医の必要性を理解いただけました。この職を筑波大学小児外科所属の南洋輔がいただくことができ、現在当科の柱として頑張ってくれています。改めましてお力添えいただきました諸先生方に心から御礼申し上げます。

福島県の子どもの人口は震災以降も減少が続いています。私一人がこれを変えることはできませんが、子どもの病気に対する高水準の医療体制を維持し、県民の皆様からの信頼を得ることが、「安心して子どもを産み育てられる福島県へ」というセンターの理念の実現につながるものと思います。当小児外科がその一助となるよう、医局員一同全力を尽くしたいと思います。

末筆ながら、センターの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

ふくしま子ども・女性医療支援センターの概要

ふくしま子ども・女性医療支援センターとは

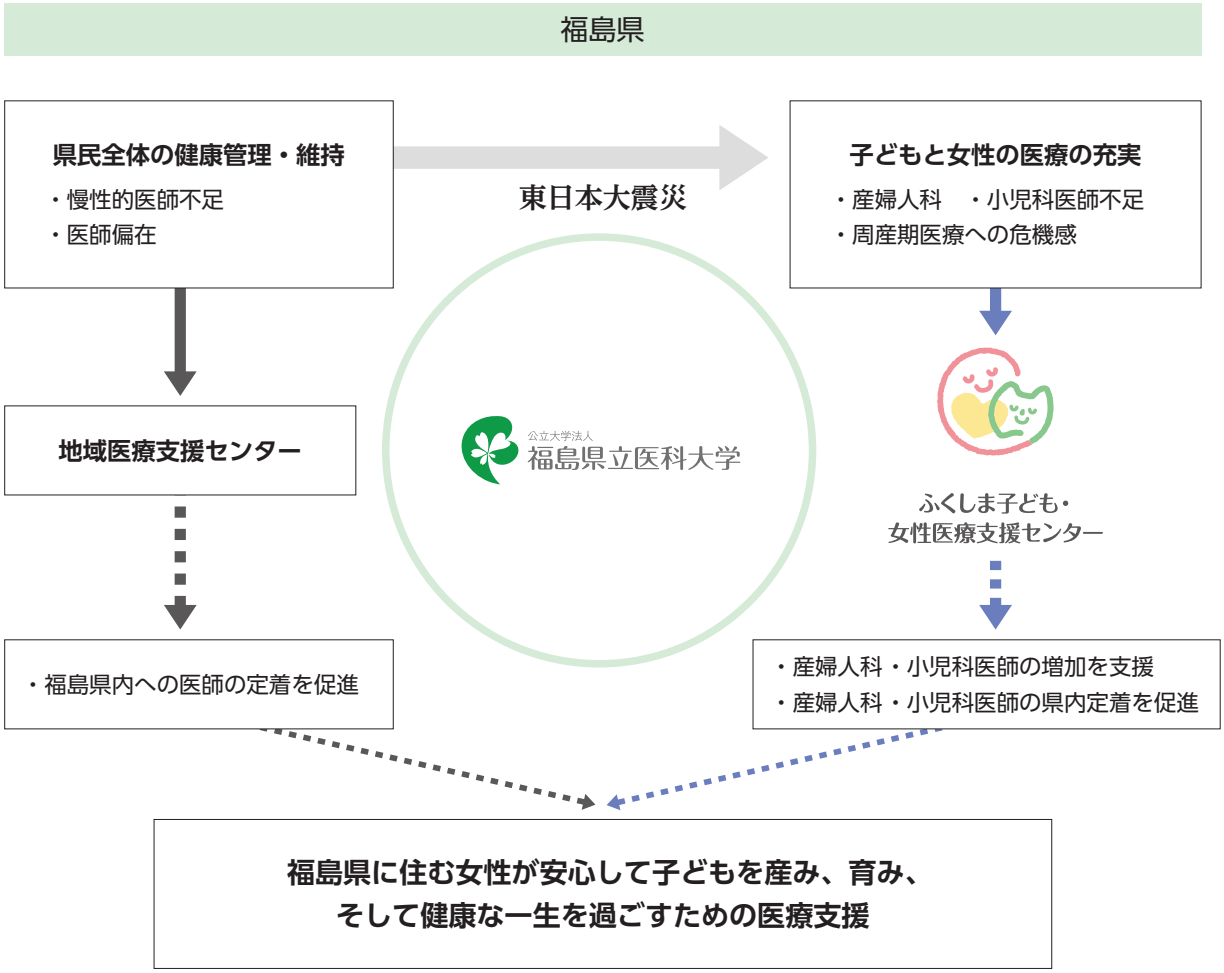
＜ふくしま子ども・女性医療支援センター設立の背景と目的＞

福島県は、慢性的な医師不足や医師の偏在を解消するために、福島県立医科大学内に福島県地域医療支援センターを設置し、県内への医師定着を促進する事業を展開してまいりました。

特に周産期医療に関わる、産婦人科、小児科医師が不足していましたが、2011年の東日本大震災をきっかけに状況はさらに悪化しました。このような状況を打破するため、県の委託を受け、2016年４月、福島県立医科大学に「ふくしま子ども・女性医療支援センター」が開設されました。

ふくしま子ども・女性医療支援センターは、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育み、そして健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことを目的に設立された、全国的にも例をみない only one の施設です。

小児科医、産婦人科医のエキスパートが県内医療機関の小児科・産婦人科の医療支援を行うとともに、妊娠の前段階から妊娠、出産、子どもの成長、女性の生涯にわたる健康を一貫して支え、子どもと女性の医療に携わる医師の養成を支援することを目標としています。



＜ふくしま子ども・女性医療支援センターの特徴＞

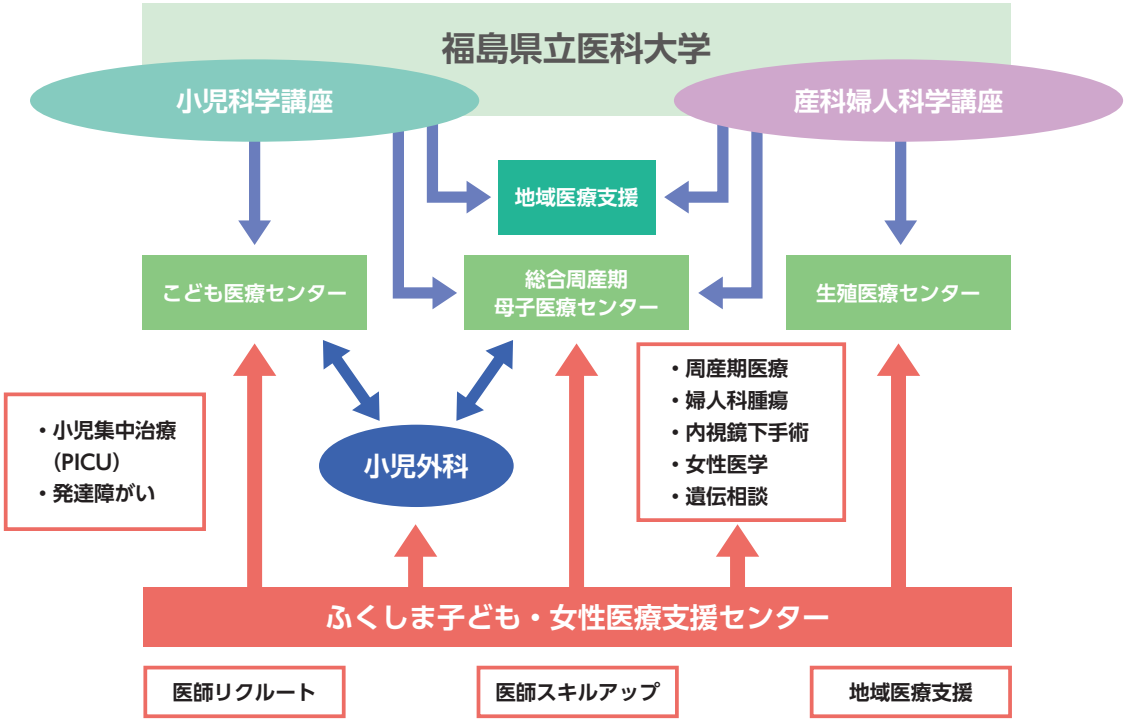
ふくしま子ども・女性医療支援センターは、“女性と子どもの健康に関する医療”を充実させるセンターです。当センターでは、妊娠前からの女性の健康（プレコンセプションケア）、不妊症治療などを行う生殖医療、妊娠・出産を取り扱う周産期医療、未熟児や疾患を持った子どもの治療とケア、子どもの発達段階での異常、さらには、女性のライフスタイルの変化（エイジング）に伴う諸問題など、これらのすべての医療に関わる医師の支援を行います。

＜ふくしま子ども・女性医療支援センターの役割＞

ふくしま子ども・女性医療支援センターは、主に以下の３つの役割を担っています。

1. 医師招へい：福島県内への産婦人科、小児科医師のリクルート。
2. 地域医療支援：県内の産婦人科、小児科診療の支援。
3. 人材育成支援：県内の産婦人科、小児科医師のスキルアップ。

この３つの役割を達成するために、センター教員は、産科婦人科学講座、小児科学講座、小児外科と連携・協力しながら、教員各々の専門性を活かして活動を行います。



細矢　光亮 教授
小児科学講座

藤森　敬也 教授
産科婦人科学講座

田中　秀明 教授
小児外科

小児科医・産婦人科医の招へいと定着とともに、小児科、小児外科、産婦人科が連携し、女性の一生を通じた診療体系を構築します。

医師リクルート

全国から小児科、小児外科、産婦人科のエキスパートをリクルートします。

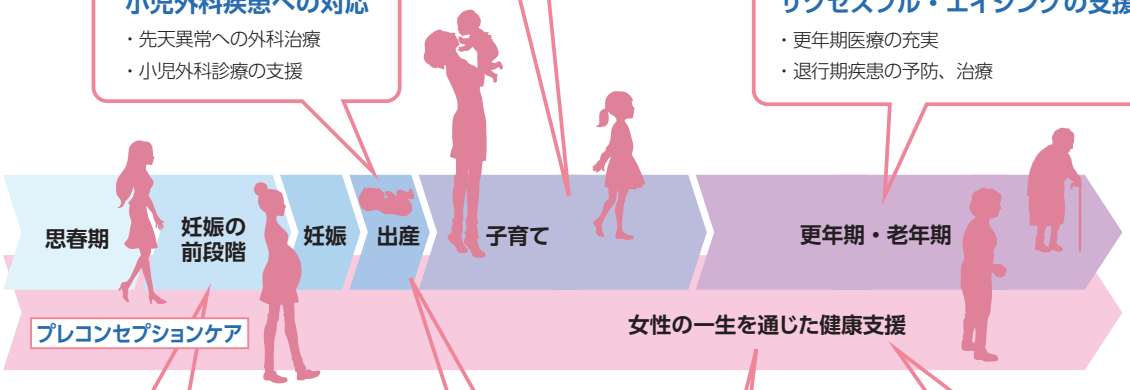
地域医療支援

県内拠点病院への医師派遣を通じて診療、支援を行うことで、県内の子ども・女性医療水準の向上を図ります。

育児環境の整備
- 発達障がい児の早期発見、保護者や支援者への支援
- PICU における高度診療

小児外科疾患への対応
- 先天異常への外科治療
- 小児外科診療の支援

サクセスフル・エイジングの支援
- 更年期医療の充実
- 退行期疾患の予防、治療



遺伝医療と生殖医療の充実
- 不妊症の診断、治療
- がん、生殖医療体制の整備
- 臨床遺伝専門医、指導医などの育成支援

分娩環境と産科救急体制の整備
- 母子医療センター等への医療支援
- MFICU、NICU の体制強化

女性に特有な疾患の予防と治療
- 女性のヘルスケア
- がん予防、高度診療

内視鏡下手術の普及
- 技術認定医の育成支援
- 腹腔鏡下悪性腫瘍手術の技術指導

医師スキルアップ支援（人材育成）

小児科・産婦人科と連携し、子どもと女性医療に携わる医師のスキルアップを支援します。

卒前教育・学内医療支援

県立医大の学生教育をサポートします。学内の小児科、小児外科、産婦人科の診療支援を行います。

ふくしま子ども・女性医療支援センターの沿革

年	月	内　容
2015年	1月	福島県は、福島県立医科大学内に産婦人科医の人材養成などを図るための「周産期医療人材養成支援センター」を整備する予算案を作成
	6月	福島県は、福島県立医科大学内に新設する「県周産期医療支援センター（仮称）」の整備概要を公表
	7月	福島県周産期医療支援センター（仮称）開設準備のため、吉村 泰典内閣官房参与（当時）を理事長付特命教授兼副学長（業務担当）に、水沼 英樹弘前大学産科婦人科学講座教授（当時）を特任教授に任命 東京都小児総合医療センターとPICU医師の派遣協議を開始
	8月	センター準備室設置 センター名称を「ふくしま子ども・女性医療支援センター」と内定
	9月	水沼特任教授、ふくしま子ども・女性医療支援センター準備室長就任 内堀 雅雄知事、ふくしま子ども・女性医療支援センターの概要を議会で発表
	10月	ふくしま子ども・女性医療支援センターに名称が正式決定 ふくしま子ども・女性医療支援センター準備室設立記者会見 内堀知事を表敬訪問
	11月	ふくしま子ども・女性医療支援センター準備室開設 吉村副学長、ふくしま子ども・女性医療支援センタースーパーバイザーに就任 内堀知事を表敬訪問、センターの体制や事業概要について報告 ふくしま子ども・女性医療支援センター設立記者会見
	12月	非常勤指導医３名が就任し、PICUの指導を開始
2016年	1月	センター教員（産婦人科医師、小児科医師各１名）の確保が固まる ４月からの人員体制確定（常勤医師３名、非常勤医師５名）
	3月	内堀知事を表敬訪問、センターの体制と事業概要を説明 ふくしま子ども・女性医療支援センター設立記者会見
	4月	ふくしま子ども・女性医療支援センター設立開所式（４月４日） スーパーバイザー：吉村 泰典 センター長（特命教授）：水沼 英樹（常勤） 小 児 科：教授　横山 浩之（常勤） 産婦人科：教授　髙橋 俊文（常勤）、特任教授　福島 明宗（非常勤） 小 児 科（PICU）：特任教授　清水 直樹（非常勤）、特任講師　新津 健裕（非常勤）、特任講師　齊藤 修（非常勤）

2016年	4月	**ふくしま子ども・女性医療支援センター開設**（4月4日） 福島民報「子どもと女性の健康相談室」掲載開始（4月18日）
	5月	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー①（5月17日、福島、コラッセふくしま）
	6月	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念祝賀会（6月9日、福島、ザ・セレクトン福島） 医大性差医療センター内に女性ホルモン外来を設置（6月14日） 会津若松市、相馬市をモデル地域として発達障害児の早期発見、早期介入に関するシステム作りの検討会を開始
	7月	ふくしま子ども・女性医療支援センター特別セミナー（7月20日、福島、杉妻会館）
	8月	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー②in 郡山（8月23日、郡山、福島県看護会館みらい） 2016年度ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成・配布
	9月	ふくしま子ども・女性医療支援センター第1回学内セミナー（9月14日）
	10月	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー③in 会津（10月26日、会津若松、会津稽古堂）
	11月	公開講座「女性」を取り巻く医療（11月12日、福島、ホテル福島グリーンパレス） ふくしま子ども・女性医療支援センター第2回学内セミナー（11月21日）
	12月	ふくしま子ども・女性医療支援センター第3回学内セミナー（12月14日）
2017年	1月	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー④in いわき（1月31日、いわき、いわき産業創造館）
	4月	鈴木 大輔特任講師（産婦人科）が着任 医大こども医療センターに小児集中治療室（PICU）開設 東京都立小児総合医療センターとPICU医師の派遣契約
	7月	腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮体がん）開始（7月24日） ふくしま子ども・女性医療支援センター医学生・研修医ガイダンス①（7月31日～8月1日）
	8月	2017年度ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成・配布
	9月	福島産婦人科医療復興支援セミナー（9月16日、福島、ザ・セレクトン福島） 磯部 真倫特任講師（産婦人科）非常勤登録
	10月	第7回ふくしま産婦人科内視鏡研究会後援（10月7～8日、郡山、寿泉堂病院、ジョンソン・エンド・ジョンソン　アニマルラボ）
2018年	1月	太田 邦明講師（産婦人科）が着任
	4月	鈴木 大輔特任講師が白河厚生総合病院へ転出 2018年度ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成・配布
	7月	ふくしま子ども・女性医療支援センター医学生・研修医ガイダンス②（7月23～24日）
	9月	神保 正利特任教授（産婦人科）が着任 内堀知事にセンター事業の進捗を報告（9月28日）
	12月	市民公開講座　女性が輝く社会の実現を考えるセミナー（12月2日、福島、ウェディングエルティ）

2019年	3月	民間医局　レジナビフェアスプリング2019東京～臨床研修プログラム～ふくしま子ども・女性医療支援センターのブース設置（3月10日）
	4月	西郡 秀和教授（産婦人科）が着任 生殖医療センター開設、福島県生殖医療センター強化事業開始
	6月	民間医局　レジナビフェア2019東京～専門研修プログラム～に参加、ふくしま子ども・女性医療支援センターのブース設置（6月9日） 2019年度ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット／後期研修プログラム　小児科専門医コース、産婦人科専門医コースパンフレットを作成・配布 腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮頸がん）開始（6月11日）
	7月	ふくしま子ども・女性医療支援センター医学生・研修医ガイダンス③（7月22～23日）
	8月	内堀知事にセンター事業の進捗を報告（8月26日）
	10月	髙橋 俊文教授、副センター長に任命 県外産婦人科専攻医の福島県内での研修支援事業開始（昭和大学）：白河厚生総合病院1名
	11月	市民公開講座　若い女性で増えているがんを予防するためには（11月17日、福島、ザ・セレクトン福島）
2020年	2月	福島県助産師外来拡充に向けた研修会（2月15日、福島、コラッセふくしま） 医大での助産師外来が開始
	3月	ふくしま子ども・女性医療支援センター医学生・研修医ガイダンス④（3月17～18日開催予定するも、コロナ感染症の蔓延により中止）
	4月	南 洋輔（小児外科）が着任 第72回日本産科婦人科学会学術講演会ランチョンセミナー（4月25日開催予定するも、コロナ感染症の蔓延により中止）
	5月	水沼 英樹センター長、福島医大医学部同窓会賞「地域医療貢献特別賞」受賞
	7月	水沼 英樹センター長逝去（7月9日）
	9月	2020年度ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット／後期研修プログラム　小児科専門医コース、産婦人科専門医コースパンフレットを作成・配布
	10月	県外産婦人科専攻医の福島県内での研修支援事業2年目（昭和大学）：白河厚生総合病院、竹田綜合病院各1名
	11月	髙橋 俊文副センター長、センター長に任命 太田 邦明講師が東邦大学医療センター大森病院へ転出 ふくしま子ども・女性医療支援センターのシンボル・ロゴマーク作成
2021年	1月	第1回ふくしま産婦人科医スキルアップセミナー（1月19日、webセミナー）
	2月	第2回ふくしま産婦人科医スキルアップセミナー（2月9日、webセミナー）
	3月	ふくしま子ども・女性医療支援センター産婦人科・小児科・小児外科ハンズオントレーニングガイダンス（3月1日） 第3回ふくしま産婦人科医スキルアップセミナー（3月4日、webセミナー）

〈ふくしま子ども・女性医療支援センター開設まで〉

県の当初予算

産科医 人材養成へ

医大にセンター整備

県の2015（平成27）年度当初予算がほぼ固まり県は30日、県議会に内示した。内堀雅雄知事就任後初の当初予算編成となり、医療体制の充実のほか、産業復興の柱として掲げるロボット関連産業などに幅広く配分したとみられる。

福島医大には、産婦人科医の人材養成などを図るため「周産期医療人材養成支援センター」を整備する。センター長を1人置くほか、産婦人科、小児科の医師各2人を配置し、医師養成を通じて県内の医療支援を図る。

県によると、県内の産科医は120人（12年12月末現在）。

県は30日、新たな産業の柱とするロボット産業の振興に向け、会津大を開発支援の拠点とする方針を固めた。会津大と浜通りのロボット関連企業が共同研究を進める方向で検討する。

ロボット産業の県内集積を図る「ふくしまロボットバレー」を形成するため県は新年度、総合戦略を本格化させる方針を示しており、各部局を横断する形でロボット関連予算を重点配分する見通しとなった。具体的には、体にかかる負担を軽くする仕組みのロボット「アシストスーツ」の普及拡大を図り、医療福祉施設、企業などに補助する制度をつくる。

ロボ開発支援 会津大拠点化

楢葉郡の診療所「大野病院付属」に

双葉郡の課題である医療、もり力を入れる。郡内の帰還体制の確立に向けた施策に

を促し、楢葉町に設ける診療所は、県立大野病院付属として整備する。関連予算として約3億円を盛り込む考え。また、いわき市内に2カ所設ける郡立診療所の整備費などを含め約1300万円を計上する方針。

福島民友新聞（2015 年 1 月 31 日）

県周産期医療支援センター

教員に国内トップ5人

今年度一部開所 未熟児診療へ 派遣

専門医を育成

独自課程 実施へ

一投一打 県民沸かす

都山・開成山野球場 楽天―オリックス戦

10月の内閣改造

首相 自民役員・

福島民報新聞（2015 年 6 月 24 日）

ふくしま子ども・女性医療支援センター準備室開設の打ち合わせ会議（2015 年 10 月 20 日）
（左前から水沼、吉村、右前から、阿部、藤森、菊地）

内堀知事を表敬訪問（2016 年３月１日）

ふくしま子ども・女性医療支援センター開設（2016 年４月４日）
（左から、吉村、水沼、菊地、阿部）

ふくしま子ども・女性医療支援センター教員（開設時）（2016 年４月４日）
（左から、吉村、水沼、阿部、髙橋、横山）

〈ふくしま子ども・女性医療支援センター開設祝賀会〉

（2016 年 6 月 9 日 於 ザ・セレクトン福島）

〈内堀知事にセンター事業の進捗を報告〉

（2018 年 9 月 28 日）

〈ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー〉
福島、郡山、会津、いわきの４か所で開催

水沼英樹前センター長

吉村泰典スーパーバイザー

高橋俊文教授

横山浩之教授

〈福島産婦人科医療復興支援セミナー〉

（2017 年 9 月 16 日、ザ・セレクトン福島）

内堀雅雄　福島県知事　挨拶

竹之下誠一　福島県立医科大学理事長　挨拶

藤井知行　日本産科婦人科学会理事長（当時）　挨拶

吉村泰典　福島県立医科大学副学長　挨拶

水沼英樹　ふくしま子ども・女性医療支援センター前センター長　挨拶

ふくしま子ども・女性医療支援センター事業と５年間の実績

医師招へい事業

1. 事業内容

1）センターへの医師リクルート事業および新規産婦人科・小児科医師リクルート支援事業

全国から産婦人科、小児科（PICU、小児外科を含む）のエキスパートをセンターにリクルートおよび県内の産婦人科、小児科専門医コースへのリクルートを支援しています。

2）県外産婦人科専攻医の福島県内での研修支援事業

福島県外の産婦人科医療機関と連携した若手医師の育成と県内医療支援を目的に、昭和大学産婦人科の専攻医の県内病院での研修を2019年より支援しています（表３）。

2. ５年間の実績

1）エキスパート医師のリクルート事業（表１）
および新規産婦人科・小児科医師リクルート支援事業（表２）

2）県外産婦人科専攻医の福島県内での研修支援事業（表３）

表 1. ふくしま子ども・女性医療支援センターへの医師のリクルート状況の推移

年度	産婦人科	小児科	小児外科**	医師数*（常勤）
2016	４（常勤２、非常勤２）	４（常勤１、非常勤３ PICU）		８（３）
2017	５（常勤３、非常勤２）	５（常勤１、非常勤４ PICU）		10（４）
2018	７（常勤４、非常勤３）	５（常勤１、非常勤４ PICU）		12（５）
2019	９（常勤５、非常勤４）	６（常勤１、非常勤５ PICU）		15（６）
2020	10（常勤５、非常勤５）	６（常勤１、非常勤５ PICU）	１（常勤）	17（７）

*医師数は４月１日時点の数を記載
**小児外科は2020年度からセンターに加入

表 2. 福島県立医科大学産婦人科・小児科学講座への入局者数の推移

年度	産婦人科入局者数（医大-他大学）	小児科入局者数（医大-他大学）
2016	７（６-１）	５（２-３）
2017	５（４-１）	６（４-２）
2018	３（１-２）	８（７-１）
2019	２（１-１）	５（４-１）
2020	９（８-１）	５（３-２）
合計	26（21-５）	29（20-９）

表 3. 県外産婦人科専攻医の福島県内病院での研修支援事業

研修期間	医師数（専攻医年）	研修病院
2019年10月～ 2020年９月	１名（２年目）	白河厚生総合病院
2020年10月～ 2021年９月	１名（２年目）	竹田綜合病院
2020年10月～ 2021年９月	１名（２年目）	白河厚生総合病院

〈県外産婦人科専攻医の福島県内での研修支援事業〉
昭和大学産婦人科

県内基幹病院産婦人科への専攻医受入れをアシストしています

中尾　紗由美
専攻医２年目

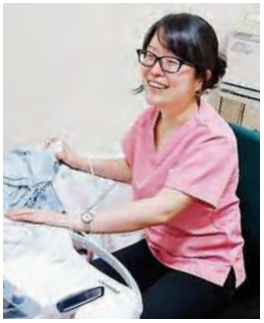
私は昨年の10月から白河厚生総合病院の産婦人科に専攻医として勤務しています。産婦人科医は私を含めて4名で、3名の産婦人科専門医の御指導の下、多くの症例について学ばせて頂いております。例えば、腹腔鏡下子宮全摘術を数例執刀しました。手術のように手技に関しては1回の執刀で多くのことを学べます。また外来診療も行っており術後など気になる患者さんのその後を自分でフォローしています。

産婦人科の特徴は分娩管理です。分娩は施設の規模や体制によって治療方針が変わります。いろいろな施設で研修を行うことで、その施設にあった管理方法を学ぶことができます。携わった分娩で元気な赤ちゃんが生まれる瞬間は、何回経験しても嬉しいです。

産婦人科は忙しく急変もあり大変なイメージがあるかもしれません。そのため、特にスタッフのフットワークが軽く、助け合っている科であると思います。それは、医局が違っても感じます。はじめは知り合いが全くいない中での研修で不安もありましたが、白河厚生総合病院の先生方も、福島県立医大の先生方も同じ医局のメンバーのように接し、指導して頂き毎日楽しく過ごしています。

聞くところによると、福島県の研修病院は、お産から婦人科の疾患に至るまで、多くの症例に遭遇することができ、研修を受けるにはピッタリの病院が数多く存在するそうです。

ほかにもまだまだ魅力はありますが、福島での研修に興味がある方はぜひ見学にいらしてください。



令和元年 10 月より
白河厚生総合病院で研修

様々な症例を経験でき、できることが増えていると実感

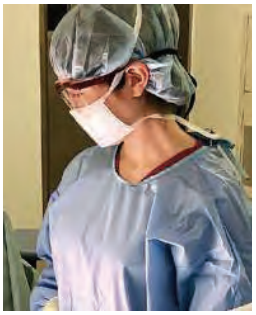
栗木　あかね
専攻医２年目

こんにちは。私は会津若松市にある竹田綜合病院の産婦人科に勤務させていただいています。この度初めて福島県に住みましたが、すでに居心地の良さを感じています。病院のスタッフはみなさん親切で、仕事もしやすいです。見知らぬ土地で不安を抱えていましたが、当院や福島医大の先生方も、馴染みのない私のことを快く招き入れてくださり、医局員同様に接してくださるため、非常に心強く、不安はすぐに薄れました。

こちらに来て初めて自分の外来を持たせていただいたり、手術の計画から術後フォローまでさせていただいたりするようになりました。指導医の先生方にご指導いただきながら、少しずつではありますが、できることが増えてきていることを実感しています。当院は分娩数が福島県の中でも多いことが特徴ですが、それと並行して悪性疾患も含めた婦人科疾患の診療、手術も行っているため多様な症例を経験できます。

また、同時に周りに病院が少ない環境でのマネジメントの難しさも感じています。自宅が遠方で通院が難しい、当院で受け入れが難しい妊婦さんの搬送先が遠いなど、医療以外の社会的要素を考慮する必要がでてきます。また、一番痛感したのは雪の中での生活が非常に大変ということです。雪が降ると交通に不便が出てきて通勤や通院も一苦労です。毎年この雪とうまく付き合ってきている会津の皆さんの強さを感じました（それでも例年より積雪量は少なかった様ですが）。

そんな会津は、日本酒や馬刺しが有名で、食の楽しみもあります。福島県、また会津若松での研修に興味がある方はぜひ見学にいらしてください。



令和２年 10 月より
竹田綜合病院で研修

産婦人科医療の全ての分野で学びを深めることができる

柴野　芳影
専攻医２年目

私は 2020 年 10 月より、昭和大学産婦人科の専攻医地域研修として白河厚生総合病院産婦人科に勤務させていただいております。前任の専攻医より、当院は症例が豊富で経験をたくさん積むことができると聞いていたので、赴任するのがとても楽しみであり、実際勤務が始まってからは想像以上に多くの症例を経験させて頂いております。

当院の特徴として産婦人科は福島県立医科大学、東北大学、昭和大学から派遣されているため、同じ症例でも様々なアプローチ方法があることを学ぶことができます。例えば帝王切開術の場合、昭和大学では電気メスを用いて行いますが、当院では基本的に電気メスを用いないので、赴任した頃はメスやクーパーの使い方に四苦八苦した覚えがあります。また、腟式子宮全摘術や腟閉鎖術など当院に特徴的な手術もあり、今後の産婦人科医師人生に向けて貴重な経験を積ませて頂いております。更に、細分化の進む産婦人科医療において周産期・腫瘍・生殖医療全ての分野を学びつつ、地域の皆様の人生に寄り添えるよう日々過ごしています。

白河は、美味しい野菜や果物、お肉が豊富にあり自然にも恵まれており、高速道路や新幹線などが充実して交通の便がとてもよいところです。また、思っていたより雪が少なくて住みやすく、那須高原などの観光地も近いため休日は家族で出かけることができます。公私共に充実した研修に興味ある方は、是非一度見学にいらしてください。

令和２年 10 月より
白河厚生総合病院で研修

地域医療支援事業

1. 事業内容

1）地域医療支援事業

センターでは2016年の開設以来、福島県内の中核病院で産婦人科、小児科診療に関する医療支援を行ってきました。

2. 5年間の実績

1）福島県内の主な医療支援病院（表1）と5年間の医療支援回数（表2）

表 1. 福島県内の主な医療支援病院

地域	病院
県北	大原綜合病院、公立藤田総合病院、済生会福島総合病院、福島赤十字病院、南東北福島病院、福島市夜間急病診療所、保原中央クリニック
県中	国立福島病院、公立岩瀬病院、公立小野町地方綜合病院、太田西ノ内病院、総合南東北病院、星総合病院、寿泉堂綜合病院、坪井病院
県南	白河厚生総合病院、会田病院
会津	会津中央病院、竹田綜合病院
相双	公立相馬総合病院、南相馬市立総合病院
いわき	いわき市医療センター

表 2. 福島県内への医療支援回数

年度	医療支援回数（県北-県中-県南-会津-相双-いわき）
2016	158（48-34-18-19-29-10）
2017	255（62-79-62-26-14-12）
2018	221（68-58-52-24-10- 9）
2019	409（117-131-93-43-13-12）
2020	452（200-99-80-46-15-12）
合計	1,495（495-401-305-158-81-55）

人材育成支援事業（医師スキルアップ事業）

1. 事業内容

1）産婦人科医師スキルアップ事業

（1）遠隔会議システムを用いた医局勉強会および症例検討会の支援事業

遠隔会議システム（WebEXまたはZoom）を用いた産婦人科医局勉強会（研究報告を含む）および症例検討会の支援を実施しています。会議の内容は、県内の基幹病院勤務の専攻医にも配信しています。

（2）産婦人科内視鏡下手術の普及支援事業

県内の産婦人科医師の内視鏡下手術（腹腔鏡および子宮鏡下手術）の普及を目的とした研究会および講習会の支援および内視鏡下手術教育に必要な機器の整備を行っています。

（3）産婦人科医師スキルアップセミナーの開催

県内の産婦人科専攻医を対象としたスキルアップセミナーを開催し、専攻医教育の支援を行っています。

（4）研究指導

産婦人科専攻医および産婦人科大学院生に対して、学会発表、学術論文作成の支援、研究に関する相談などを実施しています。

2）卒前教育支援事業

（1）医大学生への講義

医学部４年生～６年生のベッドサイドラーニング（BSL）において、センター教員による講義を実施しています。

3）出前講座

県内臨床研修病院からの求めに応じてセンター教員または産科婦人科学講座教員が出向き、講義をする出前講座を行っています。

4）助成事業

（1）病院見学経費助成事業

附属病院または県内の医療機関見学に必要となる経費を助成しています。

（2）学会参加費助成事業

医学部学生、初期研修医に対して、産婦人科・小児科に対する関心を高める機会を与えるために、学会参加費を助成しています。

2. ５年間の実績

１）産婦人科医師スキルアップ事業

（１）遠隔会議システムを用いた医局勉強会および症例検討会の支援事業

2017年９月から、毎週火曜日に産婦人科医局勉強会を専攻医が遠隔で参加できるように支援してきました。

（２）産婦人科内視鏡下手術の普及支援事業

以下の内容で内視鏡下手術の普及支援を実施しました。

開催日	会の名称	支援内容
2016年５月７～８日	第５回ふくしま産婦人科内視鏡研究会	講義・実技指導（髙橋教授）
2016年10月２日	第６回ふくしま産婦人科内視鏡研究会	講義・実技指導（髙橋教授）
2017年10月７～８日	第７回ふくしま産婦人科内視鏡研究会	実技指導・助成（髙橋教授）
2018年３月３日	第８回ふくしま産婦人科内視鏡研究会	実技指導（髙橋教授）

2015年の日本産科婦人科内視鏡学会認定　腹腔鏡技術認定医：２名
2020年の日本産科婦人科内視鏡学会認定　腹腔鏡技術認定医：10名（センター教員３名を含む）

（３）産婦人科医師スキルアップセミナー

2020年度から外部講師による専攻医向けの講義をZoomによるオンラインセミナー形式で計３回実施しました。

開催日	講師（所属）	タイトル	参加者
2021年１月19日	福井 淳史　特任教授 （兵庫医大産婦人科）	不育症の診断と治療	12名
2021年２月９日	福井 淳史　特任教授 （兵庫医大産婦人科）	卵管性不妊の診断とポイント	20名
2021年３月４日	堤 誠司　病院教授 （山形大産婦人科）	症例から掘り下げる、先天性疾患の遺伝子解析と疾患のメカニズムについて	20名

（４）研究指導

産科婦人科学講座の専攻医および大学院生への論文指導をこれまで５編行いました（下線は責任著者であるセンター教員です）。

１）加茂 矩士, 髙橋 俊文, 鈴木 聡, 菅沼 亮太, 大原 美希, 小宮 ひろみ, 水沼 英樹, 藤森 敬也. ラトケ嚢胞が原因と考えられる低ゴナドトロピン性性腺機能低下症および成人成長ホルモン分泌低下症を合併した不妊症女性に対して凍結融解胚移植治療を行い妊娠・出産した１例. 福島医学. 2018; 68（２）：97-104.

２）Furukawa Y., Takahashi T., Suganuma R., Ohara M., Ota K., Kyozuka H., Yamaguchi A., Soeda S., Watanabe T., Komiya H., Mizunuma H., Fujimori K. Successful Planned Pregnancy through Vitrified-Warmed Embryo Transfer in a Woman with Chronic Myeloid Leukemia: Case Report

and Literature Review. Mediterr J Hematol Infect Dis. 2020; 12（1）: e2020005.
3）Endo Y., Takahashi T., Matsumiya T., Fukuda K., Ueda M., Owada A., Nomura S., Ota K., Hashimoto S., Soeda S., Nomura Y., Fujimori K., Tanaka M. Successful management of preoperatively diagnosed torsion of a subserosal uterine fibroid by pneumoperitoneum laparoscopic single-port surgery. Fukushima J Med Sci. 2020; 65（3）: 128-132.
4）Toba N., Takahashi T., Ota K., Takanashi A., Iizawa Y., Endo Y., Furukawa S., Soeda S., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K., Takeichi K. Malignant transformation arising from mature cystic teratoma of the ovary presenting as ovarian torsion: a case report and literature review. Fukushima J Med Sci. 2020; 22; 66（1）: 44-52.
5）Omoto T., Takahashi T., Fujimori K., Kin S. Prenatal diagnosis of fetal microhydranencephaly: a case report and literature review. BMC Pregnancy Childbirth. 2020; 20（1）: 668.

2）卒前教育支援事業

（1）医大学生への講義

2016年よりBSL実習中の医学部生に対して常勤センター教員および非常勤、福島特任教授、鈴木特任講師が講義を実施しています。

3）出前講座

2018年５月から2021年３月までに計11回の出前講座を実施しました。

開催日	講師	病院名	タイトル
2018年５月23日	水沼 英樹	星総合病院	周産期医療・女性医学・小児医療に関する最新の知見、ふくしま子ども・女性医療支援センターについて
2018年６月６日	髙橋 俊文	南相馬市立総合病院	人工授精、体外授精、不妊治療の最近の知見
2018年６月18日	髙橋 俊文	公立藤田総合病院	救急外来で役立つ産婦人科疾患のツボ
2018年６月25日	水沼 英樹	公立藤田総合病院	ホルモン補充療法について
2018年７月13日	水沼 英樹	会津中央病院	骨粗鬆症とホルモン補充療法
2018年８月21日	鈴木 大輔	福島県立医科大学	救急外来で役立つ産婦人科疾患
2019年１月23日	横山 浩之	南相馬市立総合病院	乳幼児健診とメンタルヘルス
2019年３月28日	髙橋 俊文	大原綜合病院	救急外来で役立つ産婦人科疾患のツボ

2019年10月30日	髙橋 俊文	会津中央病院	救急外来で役立つ産婦人科疾患のツボ
2020年2月27日	髙橋 俊文	大原綜合病院	救急外来で役立つ産婦人科疾患のツボ
2021年2月25日	髙橋 俊文	大原綜合病院	救急外来で役立つ産婦人科疾患のツボ

福島県立医大内医療支援事業

1. 事業内容

1）診療支援事業

産科婦人科学講座、小児科学講座、小児集中治療室(PICU)、小児外科と協力して診療を実施しています。

2）高難度新規医療技術およびがん・生殖医療の実施に関する支援事業

（1）婦人科悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術の技術支援

高難度新規医療技術に相当する、婦人科悪性腫瘍（子宮体がんと子宮頸がん）に対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術の技術支援と保険診療申請までの支援を行います。

（2）がん・生殖医療の実施に対する環境整備支援

がん治療を受ける女性の妊孕性低下に対して、将来の妊孕性温存を目的とした、未受精卵子、受精卵、卵巣組織凍結が行われます。そのための倫理審査および日本産科婦人科学会への申請を支援しています。

2. ５年間の実績

1）診療支援事業

（1）産婦人科診療支援

髙橋センター長：新患外来、手術（2016年～現在）
鈴木特任講師：産科外来、病棟、手術（2017年～2018年）
太田講師：病棟、外来、手術（2018年～2020年）
神保特任教授：産科外来、助産師外来、病棟、手術（2018年～現在）
西郡教授：助産師外来（2019年～現在）

（2）生殖医療センター診療支援

髙橋センター長：外来（2016年～現在）
太田講師：外来（2018年～ 2020年）

生殖医療センターの生殖補助医療の診療実績

年（1 ～ 12月）	採卵件数	胚移植件数
2018	204	265
2019	299	415
2020	309	506

（3）助産師外来の開設・運営支援

2020年２月15日　福島県助産師外来拡充に向けた研修会を実施（コラッセふくしま、福島市）
講演会と座談会形式で開催しました。
講演会
演　　者：北里大学看護学部生涯発達看護学　准教授　新井 陽子
タイトル：「助産師外来における周産期メンタルヘルスケア実践」
座 談 会：医大附属病院産科病棟助産師長　服部 桜、古川産婦人科　看護部長　本田 友美
「今、助産師外来に求められること～これからの医師との協働を考える～」

2020年２月～　医大での助産師外来を開始しました。

（4）小児科診療支援

横山教授：小児発達障害専門外来（2016年～現在）

（5）PICU診療支援（PICU開設支援を含む）

＜PICU開設支援＞

年月	内容
2015年７月	東京都小児総合医療センターとPICU医師の派遣協議を開始
2016年４月	東京都自治法派遣の手続きにより東京都立小児総合医療センターからPICU医師派遣 PICU医師はセンターの非常勤として称号付与
2017年４月	医大こども医療センター内にPICU開設（４床） センター教員（PICU）が小児科学講座の医師を指導
2018年６月～	PICU病床が６床へ

＜PICU診療支援＞
清水 直樹 特任教授：PICU医師の指導および患者管理（2016年～現在）
新津 健裕 特任講師：PICU医師の指導および患者管理（2016年～現在）
齊藤　 修 特任講師：PICU医師の指導および患者管理（2016年～現在）
本村　 誠 特任助教：PICU患者管理（2017年～ 2019年）
秋山　 類 特任助教：PICU患者管理（2019年～ 2021年）
荻原 重俊 特任助教：PICU患者管理（2019年～現在）

＜PICUの開設からの実績＞
2017年４月～ 2021年３月まで670名の入院実績

（6）小児外科診療支援

南 洋輔 特任助教：外来、病棟、手術（2020年～現在）

診療支援開始前後の小児外科の手術件数を以下に示します。コロナ感染症のため手術枠が減少したにもかかわらず、2019年と比べ大幅な手術件数の減少を認めませんでした。

期間	手術件数（新生児の手術件数）
2019年４～12月	191（17）
2020年４～12月	175（14）

*2020年５月はコロナ感染症のため手術自粛、2020年12月は手術室工事により手術ができない時期がありました。

2）高難度医療およびがん・生殖医療の実施に関する支援事業

（1）婦人科悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術の技術支援

高難度新規医療技術である腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮体がんと子宮頸がん）の技術支援を行いました。その結果、施設基準をクリアし保険診療ができるようになりました。

＜腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮体がん）＞

年月日	内容
2017年７月10日	保険診療に必要な５症例を、医大内の高難度新規医療技術評価委員会に申請
2017年７月24日	１例目の子宮体がんに対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術を実施（磯部特任講師を新潟大学から招へい、髙橋教授に技術指導）
2018年４月	保険診療開始（東北で２施設目）
2018年５月14日	保険診療開始後１例目の手術実施

＜腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮頸がん）＞

年月日	内容
2018年６月１日	保険診療に必要な３症例を、医大内の高難度新規医療技術評価委員会に申請
2019年６月11日	１例目の子宮頸がんに対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術を実施（磯部特任講師を新潟大学から招へい、髙橋教授に技術指導）
2019年10月	保険診療開始（東北で２施設目）
2020年３月23日	保険診療開始後１例目の手術実施

（2）がん・生殖医療の実施に対する環境整備支援

2017年10月、医学的適応による未受精卵子、胚（受精卵）および卵巣組織の凍結・保存に関する登録申請を日本産科婦人科学会へ提出しました。医大では、未受精卵子、胚（受精卵）の凍結・保存までが可能となりました。卵巣組織凍結保存に関しては準備中です。

〈PICU 診療支援〉

〈小児外科診療支援〉

小児外科チーム（清水裕史先生、角田圭一先生、田中秀明教授、南洋輔先生 ほか）

〈婦人科悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術の技術支援〉

子宮体がんで腹腔鏡手術

福島医大病院 保険診療認定後初めて

福島医大は24日、同大病院が4月に子宮体がん（子宮内膜がん）の腹腔鏡下手術を保険診療で行える認定施設となって初めての手術を14日に実施したと発表した。

同大によると、東北では2例目の認定施設。子宮体がんの開腹手術では15～20㌢の傷痕が残るが、腹腔鏡下手術では腹部に5～12㍉ほどの穴を4～5カ所開け、小型カメラや手術器具を入れて映像モニターを見ながら病巣などを切除するため小さな傷痕で済む。

出血量や痛みが少ないだけでなく、腸の癒着や感染などの合併症が少なく、入院期間が開腹手術より短く、術後の回復も早いといった利点がある。

2014（平成26）年から一部の子宮体がんの腹腔鏡下手術が保険適用になり、福島医大病院が東北大病院に続き東北2例目の認定施設となった。福島医大のふくしま子ども・女性医療支援センターと産科婦人科学講座が中心となって準備を進めてきた。

（福島民友新聞　2018年5月25日）

子宮体がん手術（磯部特任講師、髙橋教授）

広報・啓発事業

1. 事業内容

1）ふくしま子ども・女性医療支援センターのホームページおよび facebook ページ作成

2）ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成

ふくしま子ども・女性医療支援センターのパンフレットを作成、全国の医育機関と臨床研修指定病院にパンフレットを配布し、福島県内への医師招へいを促進する広報活動を継続して行っています。

3）産婦人科・小児科後期研修プログラムパンフレット作成

医大の産婦人科・小児科後期研修プログラムについてのパンフレットを作成、全国の医育機関と臨床研修指定病院に配布し、福島県内での産婦人科、小児科の専攻医の増加を促進する広報活動を継続して行っています。

4）学生・研修医向け広報活動

県内外の医学生、初期研修医を対象とした初期臨床研修説明会、後期研修説明会でふくしま子ども・女性医療支援センターのブースを開設し、県内での初期・後期研修の勧誘を行いました。

県外医学生を対象とした福島県内の周産期医療を見学するガイダンスを開催しました。コロナ禍の2020年は、医大学生を対象としたハンズオントレーニングガイダンスを実施しました。

5）社会啓発活動

公開講座などの開催およびセンター教員を中心として、県民向けの子どもと女性に関する健康コラムを執筆し新聞に連載しています。

2. 5年間の実績

1）ふくしま子ども・女性医療支援センターのホームページおよび Facebook ページ作成

2016年からホームページ（https://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/）を作成し、センター事業内容および講演・セミナーのお知らせを掲示しています。2020年からFacebookページ（福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センターで登録）を開設しました。

2）ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成

2016年、2017年、2018年、2019年、2020年版のふくしま子ども・女性医療支援センターのパンフレットを作成し、全国の医育機関と臨床研修指定病院に配布しています（2016年は500部、2017年～ 2019年は1,000部、2020年は900部）。

3）産婦人科・小児科研修プログラムパンフレット作成

2019年、2020年版の医大産婦人科、小児科後期研修プログラムパンフレットを作成し、全国の医育機関と臨床研修指定病院に配布しています（2019年はそれぞれ500部、2020年はそれぞれ600部）。

４）学生・研修医向け広報活動

＜学生・研修医向け説明会へのブース開設＞

開催年月日	説明会（開催場所）	対象、その他
2017年６月24日	福島県臨床研修病院ネットワークガイダンスin東京2017（ステーションコンファレンス万世橋）	県外在住の医学生
2018年４月14日	ふくしま子ども・女性医療支援センター初期臨床研修医ガイダンス（医大）	県内外の初期臨床研修医、産婦人科・小児科関連病院を見学
2019年３月10日	民間医局　レジナビフェアスプリング2019東京～臨床研修プログラム～（東京ビッグサイト）	県外医学生、ブース訪問者52名
2019年６月９日	民間医局　レジナビフェア2019東京～専門研修プログラム～（東京ビッグサイト）	県外初期臨床研修医、ブース訪問者６名

＜ふくしま子ども・女性医療支援センター医学生・研修医ガイダンス＞

開催年月日	見学場所	参加者
2017年７月31日～８月１日	医大附属病院、南相馬市立総合病院、公立相馬総合病院	県外医学生７名
2018年７月23～24日	医大附属病院、南相馬市立総合病院、公立相馬総合病院	県外医学生６名
2019年７月22～23日	医大附属病院、南相馬市立総合病院、公立相馬総合病院	県外医学生４名・医大学生１名
2020年３月17～18日	コロナ感染症の蔓延により中止	コロナ感染症の蔓延により中止

＜ふくしま子ども・女性医療支援センター　産婦人科・小児科・小児外科ハンズオントレーニングガイダンス＞

開催年月日：2020年３月１日、対象：医学部１年～３年生、参加者：16名

講師：センター教員（神保特任教授、髙橋センター長）、小児科PICU（齋藤康助手）、小児外科（田中教授）、産婦人科、看護学部母性看護助産部門（篠原教授、他教員）

内容：糸結び・縫合結紮実習、内視鏡下縫合結紮実習、分娩シミュレーターを用いた分娩実習・妊婦体験、新生児蘇生実習、胎児ファントムを用いた超音波診断実習

５）社会啓発活動

＜公開講座など＞

開催年月日	講座名（開催場所）	講師*	対象（参加者）
2016年５月17日	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー①（福島、コラッセふくしま）	吉村副学長 水沼センター長 横山教授 髙橋教授	医療関係者（79名）
2016年７月20日	ふくしま子ども・女性医療支援センター特別セミナー（福島、杉妻会館）	吉村副学長 水沼センター長 横山教授 髙橋教授	県職員関係者（91名）

2016年8月23日	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー②in 郡山（郡山、福島県看護会館みらい）	吉村副学長 水沼センター長 横山教授 髙橋教授	医療関係者、教育関係者、自治体保健福祉関係者、その他（約40名）
2016年9月14日	ふくしま子ども・女性医療支援センター第1回学内セミナー（医大）	水沼センター長	医大関係者：学生、教員、他
2016年10月26日	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー③in 会津（会津若松、会津稽古堂）	吉村副学長 水沼センター長 横山教授 髙橋教授	医療関係者、教育関係者、自治体保健福祉関係者、その他
2016年11月12日	公開講座 「女性」を取り巻く医療（11月12日、福島、ホテル福島グリーンパレス）	水沼センター長 髙橋教授	一般住民
2016年11月21日	ふくしま子ども・女性医療支援センター第2回学内セミナー（医大）	横山教授	医大関係者：学生、教員、他
2016年12月14日	ふくしま子ども・女性医療支援センター第3回学内セミナー（医大）	髙橋教授	医大関係者：学生、教員、他
2017年1月31日	ふくしま子ども・女性医療支援センター開設記念セミナー④in いわき（いわき、いわき産業創造館）	吉村副学長 水沼センター長 横山教授 髙橋教授	医療関係者、教育関係者、自治体保健福祉関係者、その他
2018年12月2日	市民公開講座　女性が輝く社会の実現を考えるセミナー（福島、ウェディングエルティ）	吉村副学長	一般住民（152名）
2019年11月17日	市民公開講座　若い女性で増えているがんを予防するためには（福島、ザ・セレクトン福島）	吉村副学長 水沼センター長	一般住民（74名）

*講師はセンター教員のみ記載

＜子どもと女性の健康相談室（福島民報連載）＞

掲載回数	掲載日	執筆者	タイトル
1	2016年４月18日	水沼 英樹	骨粗しょう症と卵巣機能
2	2016年５月16日	横山 浩之	子どもの行動異常
3	2016年６月20日	髙橋 俊文	女性の妊娠のしやすさと卵子の老化
4	2016年７月18日	吉村 泰典	高齢妊娠・出産のリスク
5	2016年８月15日	渡辺 尚文	遺伝診療部を新設
6	2016年９月19日	水沼 英樹	ホルモン補充療法
7	2016年10月17日	横山 浩之	子どもとメディア
8	2016年11月21日	髙橋 俊文	月経前症候群（PMS）
9	2016年12月19日	福島 明宗	出生前診断
10	2017年１月16日	水沼 英樹	女性医学
11	2017年２月20日	横山 浩之	お手伝い
12	2017年３月20日	髙橋 俊文	原発性月経困難症
13	2017年４月17日	水沼 英樹	女性アスリートの健康問題
14	2017年５月15日	横山 浩之	絵本の読み聞かせ
15	2017年６月19日	髙橋 俊文	月経の異常　子宮内膜症
16	2017年７月17日	水沼 英樹	無月経　上
17	2017年８月21日	水沼 英樹	無月経　下
18	2017年９月18日	横山 浩之	子育ての知恵　上
19	2017年10月16日	横山 浩之	子育ての知恵　下
20	2017年11月20日	髙橋 俊文	過多月経　上
21	2017年12月18日	髙橋 俊文	過多月経　下
22	2018年１月15日	水沼 英樹	子宮頸癌　上
23	2018年２月19日	水沼 英樹	子宮頸癌　下
24	2018年３月19日	横山 浩之	子どもの生活習慣
25	2018年４月16日	横山 浩之	子どものしつけ
26	2018年５月21日	髙橋 俊文	不妊症　上
27	2018年６月18日	髙橋 俊文	不妊症　下
28	2018年７月16日	水沼 英樹	子宮筋腫　上
29	2018年８月20日	水沼 英樹	子宮筋腫　下
30	2018年９月17日	横山 浩之	行動異常と薬物療法
31	2018年10月15日	横山 浩之	ゲーム依存症
32	2018年11月19日	髙橋 俊文	妊婦と風疹感染
33	2018年12月17日	髙橋 俊文	二分脊椎症と葉酸接種

34	2019年1月21日	神保 正利	妊婦とスギ花粉
35	2019年2月18日	神保 正利	サイトメガロウィルス
36	2019年3月18日	水沼 英樹	はしかの流行
37	2019年4月8日	水沼 英樹	経口避妊薬
38	2019年5月20日	横山 浩之	ペアレントトレーニング
39	2019年6月17日	横山 浩之	PTのポイント
40	2019年7月15日	髙橋 俊文	肥満と不妊症
41	2019年8月19日	髙橋 俊文	喫煙と不妊症
42	2019年9月16日	神保 正利	妊婦とインフルエンザ
43	2019年10月21日	神保 正利	妊婦のインフル発症
44	2019年11月18日	水沼 英樹	過活動膀胱（OAB）
45	2019年12月16日	水沼 英樹	骨盤臓器脱
46	2020年1月20日	横山 浩之	メディアでひとり遊び
47	2020年2月17日	横山 浩之	メディアと家庭教育
48	2020年3月23日	髙橋 俊文	不妊症とストレス
49	2020年4月20日	髙橋 俊文	運動と不妊症
50	2020年5月18日	神保 正利	妊娠中の足のむくみ
51	2020年6月8日	神保 正利	妊娠中のこむら返り
52	2020年7月20日	田中 秀明	こども医療センター
53	2020年8月10日	田中 秀明	子どもの手術
54	2020年9月21日	横山 浩之	生活習慣と就労
55	2020年10月19日	横山 浩之	就労に必要なことを小学生のうちに
56	2020年11月16日	髙橋 俊文	不妊症の治療（一般不妊治療）
57	2020年12月21日	髙橋 俊文	不妊症の治療（生殖補助医療）
58	2021年1月18日	神保 正利	助産師の仕事
59	2021年2月8日	神保 正利	助産師外来
60	2021年3月8日	西郡 秀和	親子の愛着形成

広報・啓発事業
〈ふくしま子ども・女性医療支援センターパンフレット作成〉

（2021年度版）

〈産婦人科・小児科後期研修プログラムパンフレット作成〉

（2021年度版）

（2021年度版）

〈学生・研修医向け広報活動①〉

医学生・研修医ガイダンス
2017 年、2018 年、2019 年に
実施

〈学生・研修医向け広報活動②〉

レジナビフェアスプリング 2019 東京
（2019 年３月 10 日）

産婦人科・小児科・小児外科
ハンズオントレーニングガイダンス
医大スキルラボにて（2021 年３月１日）

その他の事業

1. 事業内容

1）福島産婦人科医療復興支援セミナー

2）発達障がい児支援環境の整備事業

センターの横山教授が担当している事業であり、福島県内の発達障害児の早期発見と早期介入による治療を行うための支援を目的としています。

2. 5年間の実績

1）福島産婦人科医療復興支援セミナー

2017年9月16日、ザ・セレクトン福島（福島市）で開催しました。

主催：日本産科婦人科学会、福島県立医科大学、福島県
共催：福島県産科婦人科学会、福島県産婦人科医会
主旨：東日本大震災後に原子力災害が発生した福島県では、周産期医療が危機的な状況となりました。日本産科婦人科学会は、2013年5月から福島県内に産婦人科医師を派遣する前代未聞の事業を実施。以後3年半にわたって医師派遣を継続していただきました。これまでの支援をいただいた学会、産婦人科医師の皆様に対して、福島県からの謝意の場として、福島産婦人科医療復興支援セミナーを開催する運びになりました。
内容：内堀 雅雄　福島県知事、竹之下 誠一　福島医科大学理事長、藤井 知行　日本産科婦人科学会理事長の主催者挨拶の後、セミナーが行われました。福島産婦人科医療復興支援セミナーの報告書は、ふくしま子ども・女性医療支援センターのホームページからダウンロードできます（https://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/data/0916seminar.pdf）。

セミナー

発表（所属・役職*）	タイトル
藤森 敬也（福島県立医科大学医学部　産科婦人科学講座　教授）	東日本大震災後の福島県産婦人科医療の現状 －福島県の産婦人科医療再生に向けて－
西ヶ谷 順子（日本産科婦人科学会　震災対策・復興委員会　主務幹事）	大震災後における学会の取り組み
津田 尚武（日本産科婦人科学会　震災対策・復興委員会　委員）	大震災後における学会の取り組み
小谷 聡司（厚生労働省医政局地域医療計画課　救急・周産期医療等対策室　災害時医師等派遣調整専門官）	我が国における東日本大震災後の災害医療の概要
長谷川 清志（獨協医科大学医学部　産科婦人科学教室教授）	応援医師による体験講演
長谷川 ゆり（長崎大学医学部　産婦人科　講師）	応援医師による体験講演
金杉 優（立川病院　産婦人科　部長）	応援医師による体験講演

*役職は開催当時

２）発達障がい児支援環境の整備事業

本事業は以下の２つを実施しています。①県内の基幹病院にて発達支援外来を行い、それを地域の小児科医が見学することによって発達障害がある子どもの診療を地域でも可能にすること、②行政とタイアップして、発達障害の早期発見・早期介入のシステム作りをすることです。

これまでの実績

2016年度～　発達障がい児等研修会（会津若松市、相馬市）
※相馬市では2018年度～ペアレントトレーニング研修と一緒に実施
2016年度～　自立支援協議会 療育部会 アドバイザー（会津若松市）
2017年度～　幼稚園・保育園・学校等訪問指導（相馬市、白河市）
2018年度～　ペアレントトレーニング（伊達市、郡山市、白河市、会津若松市）
2018年度～　個別ケース会議（伊達市）
2019年度～　子ども未来局へのアドバイザー（白河市）

その他にも行政とタイアップし支援環境の整備を進めています。

講演会等（伊達市）
教育委員会等への研修会講師等　（福島市）
研修会（郡山市、白河市）
庁内連携会議（白河市）
乳幼児健診の改善に関する協力、支援会議（白河市）
県南小児科医会勉強会（郡山市）
県北小児科医会勉強会（福島市）

〈発達障がい児支援環境の整備事業〉
保護者向け支援資料作成

センター教員

水沼　英樹（みずぬま ひでき）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特命教授／前センター長
産婦人科(2016年4月～2020年7月　常勤)

来たれ私達の産婦人科
福島県立医科大学
ふくしま子ども・女性医療支援センター

＜センターの紹介＞

ふくしま子ども・女性医療支援センターは福島県の厳しい周産期医療事情を打開するために、県の委託事業として2016年４月、福島県立医科大学（以下、県立医大）内に新しく開設された部門で、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育み、そして健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことをコンセプトとして県立医科大学の産科婦人科学講座、小児科学講座と密接な連携を取りながら活動している、全国でも例のないonly oneの施設です。センターは小児科部門と産婦人科部門に分かれていますが、産婦人科部門には2018年１月現在、４名の常勤医と２名の非常勤医が所属し、院内、院外の産婦人科医療の支援を行っております（センターホームページ：http://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/、および連絡先：fmccw@fmu.ac.jp）。

＜福島県の地勢・産婦人科医療の現状と研修環境＞

2016年10月１日の福島県の人口は190万253人であり、47都道府県中22位にランキングされています。しかし、面積が北海道、岩手県に次いで３番目に広いため、人口密度は40位と低くなっています。県の中央には奥羽山脈が縦走し、また白河市、郡山市、福島市の東側には阿武隈高地がやはり縦に走るために、地勢上は浜通り、中通り、会津地区の３地域に分割されていますが、東北自動車道路や磐越自動車道路などの高速道路の整備により、福島市から浜通りのいわき市までの所要時間は約90分、会津地区の会津若松市までは約70分程度で到達できます。昨年11月には福島市と山形県米沢市を結ぶ東北中央道路も開通し、山形県との交流もますます活発になっています。また、東北新幹線は白河市、郡山市、福島市に停車しますので、最北端の福島駅から東京駅までの所要時間も約90分に短縮されています。福島県立医科大学は福島駅から約10 km南方、緑に囲まれた丘の上に存在します。

2016年の県の女性人口は97万人弱で、また同年の出生数は13,753名でした。また、子宮頸・体癌の発生数（DPC対象病院等で本病名で入院した患者数）は約1,200名であり、その大半が大学病院とその関連病院で治療を受けています。医療圏的には７圏に分けられますが、南会津地区を除く６医療圏には中核病院が配臨され、いずれも県立医科大と密接に連携を組み、圏内の産婦人科医療を支えています。

周産期医療に関しては県立医大が総合周産期母子医療センターとして、また、大原綜合病院（福島市）、太田西ノ内病院（郡山市）、竹田綜合病院（会津若松市）、白河厚生総合病院（白河市）、総合磐城共立病院（いわき市）が地域周産期母子医療センターに指定されています。これらの施設は、いずれも県立医大の連携専門医療型専攻指導施設として位置づけられています（総合磐城共立病院は総合型専攻医指導施設）。また、地域周産期母子医療センターの指定は受けていませんが、寿泉堂綜合病院（郡山市）、星総合病院（郡山市）、会津中央病院（会津若松市）、公立岩瀬病院（須賀川市）、福島赤十字病院（福島市）など複数の中規模施設が産科婦人科学講座の関連病院として位置づけられています。

県立医大での産婦人科専攻医はこれらの中～大規模施設と大学間をローテートすることで専門医取得に必要な症例数はいうまでもなく、それ以上の技術や知識の涵養が可能となっています。

＜センター所属医師の業務と県立医大産科婦人科学講座との関係＞

センターに所属する医師は地域医療支援として月に５日、前述の関連病院での医療支援（外来や手術）を行うことが義務づけられますが、それ以外は、県立医大の産科婦人科学講座の教室員と一体となって医大の外来および病棟勤務、さらには手術に加わっています。センターでは自前の病棟は持っていませんので、院内での臨床は産科婦人科学講座の臨床業務の枠内で診療を行うことになりますが、産科婦人科学講座との関係は極めて良好であり、自己の臨床技術の維持や向上には何ら支障はありません。

センター長の水沼英樹は漢方医学を専門とする小宮ひろみ教授と共同でホルモン補充療法（HRT）外来を新設し、一緒に同一患者を診ています。センター教授の髙橋俊文は生殖医学と内視鏡手術を専門とし、生殖医療センターの菅沼亮太講師と一緒にART外来を担当しながら、内視鏡手術にも参加して若手医師の指導に当たっており、また鈴木大輔特任講師は専門の救急医学を活かして周産期医療の支援に当たり、同時に内視鏡手術にも参加し、その技術認定を目指しています。今年から太田邦明講師が参加しましたが、生殖医学や内視鏡手術の分野で福島県の産婦人科医療を支援してくれることになっています。さらに、岩手医科大学の福島明宗先生は特任教授として県立医科大で臨床遺伝学の分野を介して、また新潟大学の磯部真倫先生は特任講師として県立医大での内視鏡下悪性腫瘍手術の施設認定獲得を目指して支援を行っています。

以上は現教員による支援状況であり、センターでは周産期医学や婦人科腫瘍学を専門とする産婦人科医の応募も歓迎しています。このように、我々のセンターは従来の医局とは異なり、一定以上の臨床能力や研究能力を備えた産婦人科専門医で構成されますので、自己の専門領域での支援はもちろん、若手医師（産科婦人科学講座や関連病院に所属する）の臨床指導や研究指導を通じて福島県の医療支援に貢献しています。センターでは福島の産婦人科医療の復興を目指して一緒に汗を流してくれる熱意ある産婦人科専門医を募集しています。

当センターの常勤職員は以下の恩恵が得られます。

１）産婦人科専門医取得後の先生のキャリアアップへの多方面からの応援
２）臨床に忙殺されず研究に専念する時間の確保
３）県外から転入し、県内の医療機関で産科、小児科、麻酔科医として勤務する医師に対する研究費の支援

（https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21045d/tokutei-kenkyuushikin.htmlをご参照下さい）

福島県立医科大学には多くの疫学関連の専門家や臨床研究をサポートする部署が揃っており、臨床研究するには大変よい環境が整っています。ぜひ、一緒に産婦人科のエビデンスを変える研究も行いましょう。

＜産婦人科専門医をめざす若手医師へのメッセージ＞

センターに所属する医師は、県外の施設で十分な臨床経験や教育経験を積んで福島に赴任しています。それぞれの専門も女性医学、生殖医学、内視鏡手術学、産科救急、臨床遺伝学と多彩です。一方、県立医科大産科婦人科学講座の藤森敬也教授はわが国の周産期医学のトップリーダーの一人であり、また県立医大はわが国の顕微授精の発祥の地であり、もともと生殖医学のさかんな大学です。また、渡邊尚文准教授、添田周講師（医局長）を中心に婦人科悪性腫瘍の手術もさかんに行われています。さらには、附属病院の性差医療センター長で産婦人科医の小宮ひろみ教授は、漢方を武器に様々な産婦人科疾患の治療に当たっています。今年からは、朝の検討会の模様をネットカンファレス形式で関連病院にも流し始めました。遠隔の勤務先からもアクセス可能であり、双方向性の会議も可能ですので、産婦人科専攻医や若手医師にとっては最高の研修環境にあります。

若手の医師にとって、十分な症例数に恵まれること、科学に立脚した指導を受けられること、多くの先達との出会いがあることが重要です。県立医大産婦人科での研修システムはこれらを余すことなく具備しており、さらには仲間として支え合う人間関係も整っています。専門研修を考えている若手の医師の皆さん、ぜひ福島での研修を考えてください。

＜若手に伝えたいメッセージ＞

- 鉄は熱いうちに打てといいます。柔軟で吸収力がある若いうちにできるだけ多くの機会に触れ、自己形成に努めてください。
- 臨床技術は経験で獲得できます。しかし、技術をさらに伸ばすためには理論的思考力と洞察力が求められます。日々、考える臨床を行ってください。
- 医師は一生の仕事です。たとえ、短くてもよいですから、研究心を養える場面に身を置くとよいと思います。

水沼 英樹先生は、2020年７月９日にご逝去。文章は、水沼英樹, 髙橋 俊文.【来たれ私達の産婦人科】第17回　福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター .産科と婦人科. 2018; 5 (83)：586-590.より一部改変し転載。文章中の職名は2018年当時。

HRT 外来を行っている様子
（写真奥から、小宮、鳥羽（専攻医）、水沼）

開設記念セミナー in いわきの後の食事会
（2017 年 1 月 31 日）

(7)　2020年（令和2年）5月16日（土曜日）　福島

医療発展に寄与

福島医大 医学部 同窓会

地域医療貢献特別賞

水沼　英樹さん 69

産婦人科医の確保に尽力している水沼さん

福島医大医学部同窓会は二〇二〇（令和二）年度の同窓会賞「地域医療貢献特別賞」に福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター（福島市）の水沼英樹さん（六九）、「地域学術振興賞」に福島赤十字病院（福島市）の富田昌之さん（六〇）と大和田尊之さん（六〇）を選んだ。

二〇一六（平成二十八）年四月に開設され、産婦人科医の魅力を伝えながら、県内でのさらなる定着を目指す。

栃木県芳賀町出身。真岡高を経て一九七五（昭和五十）年三月に群馬大医学部を卒業した。群馬大助教授、弘前大医学部産科婦人科教授、同大付属病院副病院長などを歴任。内分泌疾患や不妊治療、婦人科がん治療などに精通している。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故が発生の後、本県の産婦人科医が不足している現状を知り、「定年後は福島で働きたい」と申し出た。

県内病院での勤務七人、非常勤八人の体制になった。福島医大産婦人科学講座と連携し、県内病院での産婦人科が治療などに掛けるなど人材確保に奔走する。センター開設に向けて医師二人で始まったが、現在は常勤七人、非常勤八人の人科医が不足している。

「定年後は福島で働きたい」と申し出た。

県内病院での産婦人科が治療などに掛けるなど人材確保に奔走する。センター開設に向けて医師二人で始まったが、現在は常勤七人、非常勤八人の人科医が不足している。

県外の病院に勤める産婦人科医の情報を収集し、県内病院での産婦人科が治療などに掛けるなど人材確保に奔走する。センター開設に向けて医師二人で始まったが、現在は常勤七人、非常勤八人の人科医が不足している。

県内の産婦人科医は三十人以上増えた。「全国唯一のセンターをさらに発展させる。福島ブランドを高め、県全体の医師の増加につながってほしい」と願っている。

産婦人科医確保に尽力

規模縮小し表彰式

同窓会賞の受賞式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため規模を縮小して行った。福島市の福島医大光が丘会館で、受賞者三人に表彰状と副賞を手渡した。例年は六月の定期総会の席で表彰していた。

準備委員長として携わった県内病院での産婦人科医確保に尽力した。昨年秋からは昭和大の研修医を県内で受け入れる取り組みも始めた。

床指導や学生教育にも当たる。

地域医療貢献特別賞（2020 年 5 月 16 日、福島民報）

子どもと女性の健康相談室 ①

福島大ふくしま子ども・女性医療支援センター長
水沼　英樹氏

女性ホルモンが関係

骨粗しょう症と卵巣機能

福島医大は「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育み、そして健康な一生を過ごせるための医療と援護を行う」ことをコンセプトに産婦人科医、小児科医のエキスパートが集う「ふくしま子ども・女性医療支援センター」を設置した。センターの医師たちが中心となって子どもと女性に身近な健康問題を取り上げ執筆する。

骨量が減少しその強度が低下して骨折しやすくなった状態を骨粗しょう症と呼んでいます。高齢女性に多い疾患で、わが国では三百万人もの患者さんがいると推計されています。骨粗しょう症のために骨折を起こした高齢者は、日常生活が著しく制限され、あるいは生命を脅かされることになりますので、骨粗しょう症は大問（だいもん）題です。

骨粗しょう症は、骨折を予防していくことが高齢社会を迎えたわが国では、未治療の患者さんが少なくないお話しです。骨粗しょう症の予備軍が骨粗しょう症の予備軍に相当してきますので、骨粗しょう症が女性に多く見られる理由は、女性の骨量が卵巣から分泌されるエストロゲンと呼ばれる女性ホルモンにより維持されていることと、閉経前後時期からの予防策を行いの程度の骨密度検査をそうなる前に、骨密度検度と呼んでいますが、骨粗しょう症の予防には、この最大骨密度を高くしておくことが重要です。それには、じゅうぶんな栄養、特にカルシウムを摂ることと適度の運動を行うことが必要なのですが、最近の若い女性のダイエット志向の影響もあってか、女子高生のカルシウム摂取量は推奨量に比べて二百ミリグラム（およそ牛乳一本分）も少ないことが問題視されています。

また、若年女子の無月経も骨量低下のリスク因子となっています。本来運動は骨量を増やす効果があるのですが、過度の運動は卵巣機能を低下させ無月経を起こしますので注意が必要です。最近では女子のアスリートの無月経が問題になってきました。若年女性の無月経は骨の成熟ばかりでなく、正常な身体発育においても負の影響を及ぼすことを本人はもちろん指導者も理解していただきたいと思います。

深い関係があります。閉経を迎えた女性では卵巣機能が低下し、エストロゲン分泌が低くなるため、急激な骨量低下が起こってきますが、閉経後の十年の間に平均で20％もの骨量減少が見られます。このため、六十歳代の女性では約半数が骨粗しょう症の予備軍となった骨密度を最大骨密度と呼んでいますが、骨粗しょう症の予防は、この最大骨密度を高くしておくことが重要です。それには、じゅうぶんな栄養、特にカルシウムを摂ることと適度の運動を行うことが必要なのですが、最近の若い女性のダイエット志向の影響もあってか、女子高生のカルシウム摂取量は推奨量に比べて二百ミリグラム（およそ牛乳一本分）も少ないことが問題視されています。

また、若年女子の無月経も骨量低下のリスク因子となっています。本来運動は骨量を増やす効果があるのですが、過度の運動は卵巣機能を低下させ無月経を起こしますので注意が必要です。最近では女子のアスリートの無月経が問題になってきました。若年女性の無月経は骨の成熟ばかりでなく、正常な身体発育においても負の影響を及ぼすことを本人はもちろん指導者も理解していただきたいと思います。

骨粗しょう症は、骨折を予防していくことが高齢社会を迎えたわが国では、未治療の患者さんが少なくないお話しです。骨粗しょう症の予備軍が骨粗しょう症の予備軍に相当してきますので、骨粗しょう症が女性に多く見られる理由は、女性の骨量が卵巣から分泌されるエストロゲンと呼ばれる女性ホルモンにより維持されていることと、閉経前後時期からの予防策を行いの程度の骨密度検査をそうなる前に、骨密度検度と呼んでいますが、骨粗しょう症の予防には、この最大骨密度を高くしておくことが重要です。それには、じゅうぶんな栄養、特にカルシウムを摂ることと適度の運動を行うことが必要なのですが、最近の若い女性のダイエット志向の影響もあってか、女子高生のカルシウム摂取量は推奨量に比べて二百ミリグラム（およそ牛乳一本分）も少ないことが問題視されています。

また、若年女子の無月経も骨量低下のリスク因子となっています。本来運動は骨量を増やす効果があるのですが、過度の運動は卵巣機能を低下させ無月経を起こしますので注意が必要です。最近では女子のアスリートの無月経が問題になってきました。若年女性の無月経は骨の成熟ばかりでなく、正常な身体発育においても負の影響を及ぼすことを本人はもちろん指導者も理解していただきたいと思います。

＝次回は6月16日掲載＝

子どもと女性の健康相談室　第 1 回
（2016 年から福島民報で連載開始）

福島県立医科大学医学部同窓会　令和 2 年度同窓会賞表彰式（2020 年 5 月 9 日）

髙橋　俊文（たかはし としふみ）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　教授／センター長
産婦人科(2016年4月～　常勤)

ふくしま子ども・女性医療支援センター教員の紹介

私は、2020年11月にセンター長を拝命しました。2016年４月のセンター開設当初からの教員です。診療科は産婦人科で、専門は生殖医学、生殖内分泌、内視鏡下手術です。

当センターの最優先課題は、周産期医療に関わる産婦人科、小児科医師の福島県内への定着です。ここでは、当センターの設立の背景、センター教員の紹介、そしてセンター教員の強みについて紹介させていただきます。

＜センター設立の背景＞

医師の偏在化と医師不足は、地方では大きな問題となっています。特に、東北地方はその傾向が顕著です。各自治体は医師確保のため様々な方策を行っており、福島県も例外ではありません。福島県では、これまで、福島医大の学生に対する奨学金、県外から移動してきた特定診療科（産婦人科、小児科、麻酔科）医師に対する研究助成などを実施してきました。

我々のセンターは、産婦人科と小児科医師不足に特化し、これまでとは異なるコンセプトで設立されました。このセンターは、周産期医療の担い手確保の政策として、当初「周産期医療人材養成支援センター（仮）」構想として着想されました。周産期医療の担い手である、産婦人科・小児科医師が学ぶべき領域は広く・深くなっています。また、高度な周産期医療を行うセンターだけに人材を集中しても、福島県内全体の周産期医療の担い手は増加しません。そのような理由から、「子どもと女性の生涯にわたる健康管理」が可能な、産婦人科・小児科医の育成を支援することをセンターの役割の中心に据えました。

＜センター教員の紹介＞

2021年４月現在のセンター教員は、産婦人科医３名、小児科医１名、小児集中治療医４名（非常勤）、小児外科医１名と多彩です。

センター設立時は、産婦人科２名（センター長水沼、髙橋）、小児科（横山）の常勤３名でスタートしました。その後、産婦人科医の増減があり、2021年度は産婦人科３名、小児科１名、小児外科１名体制です。小児集中治療医は非常勤医師４名で、医大PICUの診療支援に当たっています。また、産婦人科の非常勤医師は５名です。遺伝医療の専門医（福島特任教授）、生殖医療の専門医（福井特任教授）、婦人科悪性腫瘍の内視鏡手術の専門医（磯部特任講師）と専門性の高い教員が揃っています。

小児科の横山教授は、小児の発達障害が専門です。地方自治体と協力し、発達障害児の早期発見システムの構築に奔走しています。産婦人科の西郡教授の専門は、周産期医療、遺伝カウンセリングです。コメディカルの教育にも力を入れており、助産師外来の立ち上げに尽力されました。産婦人科の神保特任教授は、周産期医療が専門です。医大の産科外来を担当、学生講義では分娩シミュレーターを用いた体験型教育を実践しています。昭和大学産婦人科の専攻医が福島県内病院で研修する支援事業の要として活躍中です。小児外科医の南特任助教は、我々センターで最も若い教員です。医大附属病院小児外

科の田中教授のご指導の下、日夜診療に従事しております。非常勤の小児集中治療医３名、清水特任教授、新津特任講師、齊藤特任講師には、医大のPICUの立ち上げから現在まできめ細かいご指導をいただいております。

＜センター教員の強み＞

当センターの教員になる資格は、産婦人科、小児科、小児集中治療（PICU）医、小児外科医で、現在福島県外に在住の医師です。

当センターの教員は医大附属病院に勤務することになりますが、同時に医大でのアカデミックポジションを得ることができます。医大での診療は、産婦人科、小児科、小児外科と連携して行いますので、センター独自にベッドを持つことはありません。センター教員は、そのキャリアに応じて、アカデミックポジション（教授、准教授、講師、助教など）が付与されます。

当センターに所属する強み３つほどを紹介します。１つ目の強みは、臨床を行いながらでも研究時間を充分とることが可能です。２つ目の強みは、センター設立の趣旨を踏まえた上で、各教員が専門性を活かして自主的に行動目標を考えることが可能です。３つ目の強みは、我々のセンター教員（産婦人科、小児科に限る）は、福島県の特定診療科の研究助成対象となっており、３年間の研究費を申請することが可能です。これまでも、センター教員はこの研究助成を獲得しています。センター教員の義務として、毎月の地域医療支援があります。地域の病院への医療支援は、研修中の専攻医や若手医師と一緒に診療をする機会が得られます。また、福島県は、中通り、浜通り、会津地方と３つの地域に分けられますが、それぞれの地域の病院へ出向く道すがら、四季折々の自然を満喫できる事も、福島県で働く強みと言えます。

＜センター長からのメッセージ＞

最後に、このセンターは、福島県の子どもと女性の生涯にわたる健康管理を目指しています。女性が安心して妊娠、出産し、子どもが地域で安全に暮らせることは、地域を元気にします。そのような福島県にするため、我々センターの教員となってくれる仲間を求めています。

横山　浩之（よこやま ひろゆき）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　教授
小児科(2016年4月～　常勤)

行政と連携した発達障害の早期発見・介入のシステム作り

ふくしま子ども・女性医療支援センターに赴任するにあたり、小児科の細矢光亮教授からいただいたミッションは、①県内の基幹病院にて発達支援外来を行い、それを地域の小児科医が見学することによって発達障害がある子どもの診療を地域でも可能にすること、②行政とタイアップして、発達障害の早期発見・早期介入のシステム作りをすることでした。

地域の小児科医による診療は少しずつ進んでいます。会津若松の竹田綜合病院では、長澤克俊先生、有賀裕道先生が発達支援外来を行い、難治例を私がお手伝いする体制ができました。最近は木下英俊先生も診療を開始しています。郡山の星総合病院では、佐久間弘子先生が発達支援外来を行うのみならず、竹田悠佳先生が経過観察児の診療を行えるようになりました。また、桑野協立病院の小沼俊一先生が、星総合病院にて隔週で発達障害外来を行うに至っています。星総合病院の私の外来を、鈴木奈緒子先生、城田淳先生、増山郁先生、髙野峻也先生が見学し、さまざま助けてくださっています。いわき市医療センターでは、根本照子先生（現在あおぞらキッズクリニックを開業）や鈴木潤先生が外来をなさっています。白河厚生総合病院の村井弘通先生、菅野修人先生も発達の問題を抱えた子どもを診療なさっています。同様に、公立相馬病院の伊藤正樹先生、武山彩先生も発達の問題を抱えた子どもを診療なさるなど、多方面にわたってお助けいただいています。

行政とのタイアップにより、発達障害の早期発見・早期介入のシステム作りは、当初、会津若松、相馬にてスタートしました。会津若松では長澤克俊先生とともにアドバイザーとして療育部会に参加しました。竹田綜合病院、星総合病院ではペアレントトレーニング（PT）の勉強会も行ってきました。相馬では地元の医師会の主導で、山口英夫先生が教育委員会を始めとした関係者を招いて、PTや愛着障害等の講習会を定期的に開催しています。また、福島県小児科医会の先生方のご助力で、白河市の渡辺憲史先生を通して、子ども未来局との協力体制ができました。保育園・幼稚園の先生方や保護者への啓蒙事業、乳幼児健診の改善、メディアの問題への対応など、さまざまな事業を展開しつつあります。また、佐久間弘子先生を中心として県南小児科医会での勉強会や赤間英典先生を中心として、福島市医師会・小児科医会の勉強会を開催し、福島市や伊達市の保健師、保育士、教育委員会との関係もできてきました。特に、伊達市教育委員会の佐々木義通先生のご尽力で、学校関係者とのパイプができつつあります。

このほか、大学の加藤朝子先生、鈴木雄一先生をはじめとして県下の小児神経科医のみなさまや橋本浩一先生のお力で、エコチル通信にて発達障害の連載を取り上げていただくなど、多方面の方々の御協力を得ています。

細矢教授からいただいたミッションの実現にはまだまだ道半ばではありますが、お世話いただいている先生方に心から感謝申し上げて、本稿を閉じたいと思います。

西郡　秀和（にしごおり ひでかず）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　教授
産婦人科(2019年4月～　常勤)

福島県周産期医療の臨床・教育・研究の充実に向けて

2019年４月１日に着任しました。故水沼英樹先生：初代センター長は、私の出身大学および部活の先輩であり、産婦人科医としての恩師でした。

私は周産期医学が主な専門であり、福島県周産期医療の臨床・教育・研究分野のさらなる充実に向けて、主に以下の活動を行っています。

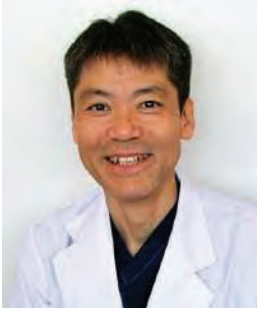
助産師外来の機能拡充に向けた支援を行っています。福島県立医科大学附属病院に勤務する助産師を対象に模擬妊婦人形（ファントム）を用いた超音波検査実習をマンツーマン指導で行っています。白河厚生総合病院と大原綜合病院においても講習を行いました。コロナ禍が収まれば、県内の他の産科施設にも出張講習を行う予定です。また、当センター主催で、2020年２月15日に福島県助産師外来拡充に向けた研修会を開催しました。

福島県立医科大学大学院医学研究科発達環境医学分野（医学博士課程）を2019年10月に新設しました。本名称は「子どもの発達障害予防や軽減のために、より良い環境要因を明らかにして環境改善とその啓発を諮りたい」という願いを込めています。周産期環境（周産期メンタルヘルス、妊婦の食生活など）と子どもの神経発達を主なテーマとしています。2020年度に大学院生２名が入学しました。

環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」（英語名Japan Environment and Children's Study）の福島ユニットセンター・副センター長を兼務しています。学術ワーキンググループ勉強会の活動などを通じて、エコチル調査を通じた産婦人科・小児科関係者等の研究支援に参画しています。

福島県立医科大学医学部BSL、福島県立医科大学看護学部母性看護学、および福島県立総合衛生学院助産科において、授業を担当しています。福島市こども未来部こども家庭課主催：プレママ＆プレパパ教室の講師を担当しています。

神保　正利（じんぼ まさとし）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任教授
産婦人科(2018年9月～　常勤)



ふくしま子ども・女性医療支援センター赴任後の３年を振り返って

私は産婦人科医師として2018年９月よりふくしま子ども・女性医療支援センターに勤務しております。当センターの開設に尽力された前センター長の水沼英樹先生より当センターにおける地域医療支援と人材育成業務についてのお話を伺い、とても魅力を感じましてお世話になることとなりました。

当センターに所属する産婦人科医師は、福島県立医大産科婦人科学講座と連携協力して大学内外の臨床業務を分担して行う他、専門領域を中心に若手医師への臨床や研究の指導、医学生や研修医の教育を個々の裁量によって行います。赴任当初は勝手がわからず自分の役割や立ち位置に困惑するところもありましたが、大学のシステムや県内医療機関の実情を少しずつ把握して自分なりの働き方を構築できるようになりました。

私の赴任に伴う新たなセンター事業として、県外産婦人科医療機関と連携した若手医師の育成と県内医療支援が行われております。具体的には、私の出身である昭和大学産婦人科の専攻医に地域医療の場で臨床経験を積ませること、そして産婦人科医師が不足している福島県に県外より医師を受け入れるという、出す側と受ける側の思惑が一致して2019年10月より昭和大学産婦人科専攻医が白河厚生総合病院で研修を開始しました。赴任した専攻医は分娩や手術を含め多くの症例を学び、また、一人の患者さんを外来から入院、治療（手術）、退院後まで継続して診療するという分業体制になりがちな大学病院ではできないような医療を経験することができて充実した日々を送っています。福島県立医大の医局の先生方の丁寧な御指導もあって、福島県内における研修は高く評価されて2020年から新たに竹田綜合病院も連携施設に加わることとなりました。現在も継続して２つの医療機関で専攻医が１年交代で研修を行っております。

センターが開設されて５年が経過し、県内産婦人科医師は徐々に増えておりますがまだまだ充足しているとは言えません。今後産婦人科医師を増やし、定着を促進するためには研修医のリクルート活動だけではなく、学生のうちから産婦人科に少しでも興味を持ってもらうための教育サポートが必要です。2019年まで毎年２日間の日程で県外医学生を対象としたガイダンスを実施しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で県外より医学生を受け入れることができなくなったために、2021年は福島県立医大の医学部低学年を対象にハンズオントレーニングガイダンスを開催しました。これは臨床を学ぶ前の医学部１～３年生に臨床手技を体験してもらうことで早い段階から興味を持ってもらうことを意図しており、参加した学生からは高い評価を受けております。

私には県内の産婦人科医療を即座に好転させるような爆発的な力はありませんが、産婦人科医師だけでなく、医学生、研修医、助産師、看護師への教育を通じて地道に土台を築き、福島県内の産婦人科医療の発展に寄与できればと考えております。

南　洋輔（みなみ ようすけ）
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任助教
小児外科(2020年4月～　常勤)

小児外科医としてやれること

2020年度より当センターでお世話になっております、医師９年目の南洋輔と申します。小児外科を専門としており、生まれたばかりの新生児から思春期までの外科疾患を診療しています。当科教授の田中先生には私が医師３年目の時に筑波大学でご指導いただき、その縁もあって２年先輩の先生と交代する形で福島医大に赴任いたしました。これまで当センターは産婦人科医および小児科医を中心に構成されていましたが、前センター長の水沼先生を中心としたご高配により、はじめて小児外科医としてメンバーに加えていただきました。県全体における周産期医療への取り組みに関わることが出来る立場をいただき、改めて感謝申し上げます。

胎児診断や新生児医療の発展に伴い、小児外科医の周産期への関わりも重要になっています。例えば、胎児に横隔膜ヘルニアや消化管閉鎖症などの外科疾患が疑われた場合には、産婦人科医や小児科医とともに分娩時期や出生後の治療方針を検討し、胎児胸水によって出生後に呼吸障害を来す可能性がある場合には、出生直後に胸腔穿刺が行えるよう出生に立ち会います。先天性疾患以外にも外傷や固形悪性腫瘍の治療、臓器移植などに携わっており、小児集中治療医とともに診療に当たることもあります。

当院の総合周産期母子医療センターは県内の周産期医療システムの中核を成しており、高度な医療を必要とする低出生体重児を中心に受け入れています。極・超低出生体重児では特に様々な未熟性があり、壊死性腸炎や胎便関連腸閉塞に伴って小腸穿孔を発症することがあります。その際には小腸ストーマを造設することが多いですが、それに関連した合併症を後々生じることがあります。新生児期に造設した小腸ストーマに関連した合併症について、そのリスク因子を検討した臨床研究は少なく、当院の総合周産期母子医療センターの協力の下、そのリスク因子解析を行っています。

福島県内で小児外科医療に従事している医師は少なく、福島という広大な地域を十分にカバーするにはやはりマンパワー不足を感じる時があります。１人の小児外科医としてこのお役に立てるよう日々の診療を行うとともに、これまでの先生方のご尽力により若手小児外科医が少しずつ育ってきていますので、その育成に少しでも貢献出来るよう努めてまいります。

センター設立５周年を迎え、福島県の小児・周産期医療のさらなる発展に貢献できるよう邁進してまいりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

鈴木　大輔（すずき だいすけ）
太田西ノ内病院　産婦人科　部長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任講師
産婦人科(2017年4月～2018年3月　常勤)

福島・富山・群馬、そして、ふくしま子ども・女性医療支援センターへ

ふくしま子ども・女性医療支援センター５周年おめでとうございます。私は元々福島県出身ですが、大学は富山県の富山医科薬科大学（現富山大学医学部）を卒業しました。卒業後は富山大学の産科婦人科教室に入局し専門医を取得しました。産婦人科専門医取得後、群馬県の前橋赤十字病院で救急・集中治療医として勤務し、救急・全身管理について学びました。その後、同病院の産婦人科に勤務し腹腔鏡手術を学びました。前橋赤十字病院には６年以上お世話になりました。

その後は済生会宇都宮病院産婦人科で２年、多数の症例を経験し、東京ベイ・浦安市川医療センターの立ち上げのサポートを行っていました。そのころ、水沼英樹前センター長から、ふくしま子ども・女性医療支援センターへのお誘いがありました。水沼先生は群馬大学出身で、私が群馬にいた頃お世話になった先生方が水沼先生とともに仕事をされていたことがある方々でしたので、私を紹介してくださったようです。

私もそろそろ地元に戻りたいと思っていたところでしたので、東京ベイ・浦安市川医療センターが軌道に乗ってきたところで、福島県に戻ることにしました。群馬で働いたことが縁で、良い形で福島県に戻ってこられたことをとてもうれしく思います。

最初の１年目は大学病院の医師として勤務を開始して、学生の指導なども行うようになりました。10年間ぐらい医局に所属していない状態での大学病院勤務開始でしたので最初は緊張・不安もたくさんありましたが、産婦人科の先生がたは皆さんとてもやさしく温かく接してくださり、１年間過ごすことができました。

２年目からは福島県のなかでも地元である白河厚生総合病院で勤務しましたが、２週間に１度、ふくしま子ども・女性医療支援センターの非常勤医師として、臨床実習に回ってきている学生に１時間ほどレクチャーを行うのを現在まで継続しています。

白河厚生総合病院では後期研修医が１名在籍しており、合計３名の指導を行いました。この間、私をもっとも気遣ってくださった水沼先生が亡くなられてしまったことは非常に残念でなりません。

２年間白河厚生総合病院で勤務し、昨年から太田西ノ内病院勤務となっており、腹腔鏡技術認定医を取得し、腹腔鏡手術を主に行っております。太田西ノ内病院は福島県内では大学病院に次ぐ規模の産婦人科機能を有し、幅広い診療を行っています。産婦人科の救急疾患、症例数も多く、後期研修医の研修病院として大変よい環境です。

今後とも、福島県内の基幹病院で勤務しながら、後期研修医の指導・育成とセンターでの学生教育を継続していきたいと思います。

太田　邦明（おおた くにあき）
東京労災病院　産婦人科　部長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　講師(常勤時)、特任准教授(現在)
産婦人科(2018年1月～2020年10月　常勤)

福島県への想いを寄せて「会津の三泣き」を経験して

ふくしま子ども・女性医療支援センター５周年おめでとうございます。2016年中頃、水沼先生より、ふくしま子ども・女性医療支援センターへの勧誘の手紙が、当時勤務していた那須赤十字病院に届きました。当時の私は研究留学から帰国した直後であり、臨床医としての鍛錬に夢中で励んでいたことと、北関東の内視鏡手術の普及と不妊治療の底上げという使命を課せられていたため、福島県での勤務をお断りしたのを覚えています。

その後、自身の大学での研究への想いが再燃した時に留学先の先輩と旧友から、水沼先生と髙橋先生のもとで学ぶことについて「自分が君の立場なら、行かない選択肢はない、とても羨ましい」という後押しがあり、最初の勧誘からおおよそ１年後に福島県立医科大学の門戸を叩くことを決めました。

いざ、福島へ飛び込んだものの新しい環境で自分の求めることと、福島県で一人の産婦人科医として要求されることの違いがあり、適応するのに時間を要しました。そんな中、水沼先生から、どのように振舞うべきかを、笑顔でご指導していただきました。時には、「太田！！」と本気で叱っていただきました。まさに「ならぬことはなりませぬ」を教えていただきました。今も迷うことがあった時に、水沼先生に「太田、頑張ったな」って言われるように振舞うようにしています。

時間が経つにつれ、徐々に壁のようなものが取れていき、気が付いた時には福島県立医科大学で働くこと・福島県民のために働くことにとても幸福を感じるようになりました。

センター在任中、2019年に名古屋で開催された日本産科婦人科学会学術講演会のシンポジストを担当する栄誉に浴すことができました。多くの先生方から高い評価を得る発表を行うことができ、水沼先生、吉村先生のご指導の賜と感謝しております。髙橋先生からは臨床研究について手厚く指導を受け、論文執筆に対する姿勢を学ぶことができました。

福島に来る前には想像していなかったような素晴らしい人たちとの出会いがあり、福島に来なければ得られなかった財産を得ることができました。気づいてみれば、２年10か月の期間を福島県で過ごすことになっていました。

母校である東邦大学に戻ることとなり、離れると決まった日から大きな穴が開いたような寂しさを感じ、東京で過ごす中、「福島」というキーワードを見かけると立ち止まるほど、自分の中で福島への想いが強くなっていました。そして今でも福島の土地や人々を想い続けています。

先日、「会津の三泣き」という言葉があることを知りました。福島での日々はまさに「会津の三泣き」を実体験しました。またいつの日か福島の素晴らしい仲間と再会し、四度目の涙を流す日を楽しみにしています。微力ではありますが、今後とも、センターの発展に寄与していく所存でありますので、よろしくお願いいたします。

福島　明宗（ふくしま あきむね）
岩手医科大学医学部　臨床遺伝学科　教授
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任教授
産婦人科(2016年4月～　非常勤)

遺伝医療の普及と啓発を目指して

この度は開設５周年、誠におめでとうございます。最初に初代センター長である故・水沼先生との思い出を述べたいと思います。水沼先生がまだ弘前大学の現職教授でおられたある日、本センターの構想およびスタッフとして小生を招へいしたい旨の突然のお電話が事の始まりだったと記憶しております。大変ありがたいお申し出ではありましたが、私こと、未だ自分の講座を開設して間もない頃でもあり、その時は僭越ながら固辞申し上げました。しかし先生とのご縁はそこで切れておらず、同年福島市で開催された東北連合産科婦人科学会の期間中（これも今思えば不思議なことです）、偶然に遭遇したホテルのレストランにて朝食をご一緒しながら、再度先生から、本センター開設についての熱き思いを拝聴することとなりました。ただ先生には私の置かれた状況をよくご理解をいただき、当面は非常勤の特任教授ということで現在に至っております。

月二回の来福ですので、先生とはなかなか深いところまでのお付き合いは叶いませんでしたが、お昼休みのセンター医局での懇談の場はとても楽しいものでした。先生は確か甘党だった（？）と思いますが、テーブル一杯の菓子類を前にして、微笑みを絶やさずお話しされる先生のお姿が今でも鮮明によみがえってまいります。私自身、福島医科大学には浅からぬご縁がございますが、岩手にて自分のキャリアを重ねるうちにすっかり縁遠くなっておりました。しかしながら水沼先生のおかげさまを持ちまして、再度この様なご縁を得ることができました。もう感謝の言葉もございません。

さて私に与えられた任務ですが、当初より外勤を含めた診療応援については限界がございましたので、遺伝外来診療とBSLを担当させていただいております。遺伝医療に関してですが、現・遺伝診療部部長である渡邉尚文先生のサポート役として、同・診療部の立ち上げとNIPT実施体制の確立をお手伝いさせていただきました。関係各位のご尽力により、現在では認定遺伝カウンセラーの複数配置を含め、福島県立医科大学における遺伝医療体制はかなり充実してきております。BSLについては、貴学の学生さんたちと直接触れ合う良い機会であり、わずか１時間と限られた枠内ではありますが、毎回とても楽しく行わせていただいております。自校の学生との比較もできて、自分としても大変勉強になっております。産婦人科や遺伝医療の分野における人材育成に少しでもお力になれればとの思いで、今後もできる限り継続させていただければと思っております。対外的活動としては、2016年に「出生前診断とどう向き合うか？　身近になってきた遺伝医療」、（福島県産婦人科医会特別講演）および2017年に「がん家系って本当にあるの？　がんと遺伝　がん関連遺伝子検査で分かること」（福島医科大学公開講座）を担当させていただきました。今後も機会をいただければ、遺伝医療に関する情報発信をさせていただければと考えております。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

清水　直樹（しみず なおき）
聖マリアンナ医科大学　小児科学教室　教授
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任教授
小児科・PICU（2016年4月～　非常勤）

大学発PICUモデルを目指して

ふくしま子ども・女性医療支援センターにおける小児医療関連事業として、みらい棟に小児集中治療室（paediatric intensive care unit; PICU）を開設するにあたり、日本小児科学会災害対策委員会の場で2011年の東日本大震災以来お世話になっていた細矢光亮教授から、たいへん有難いお声かけをいただいたのが2015年末でした。

福島県議会議員の先生方に前任の東京都立小児総合医療センターPICUまでお運びいただき、その後に福島県と東京都の間で医師派遣契約が締結されました。これにより、双方向での医師派遣・医師研修体制に加え、看護師・臨床工学技士の短期研修体制も整えられました。数週・数か月交代で、四季折々の美しい福島県へ出向していた時期を懐かしく思い返します。

福島県立医科大学の小児科内各診療グループの先生方はじめ、小児科以外の各診療科の先生方との打ち合わせを重ね、2017年春にPICU開設となりました。初めてお会いする先生方ばかりでしたが、福島県ならではの優しい人間関係のなかで温かく迎え入れて下さり、ひとつの新たな目標に向かって一緒に尽力させていただけたのは貴重な経験でした。

またセンターにおいては、当時センター長でした故水沼英樹先生はじめ、スーパーバイザーの吉村泰典先生、髙橋俊文現センター長はじめ教員の皆様にはたいへん多くの御指導をいただきましたこと、感謝しております。

PICU始動後は、多くの小児重症患者が県内全域から空路・陸路で大学・センターへ集約されるようになりました。また、小児救急・集中治療の卒前・卒後教育に加え、大学PICUならではの研究活動も盛んにされ始めております。

小児救急・集中治療は、わが国では小児病院における臨床を中心として発展してきましたが、医育機関での教育体制は、これまで全く不十分でした。小児科卒前・卒後教育において小児救急・集中治療の教育をすることは、その医学的文脈を伝えることだけが目的なのではなく、それらをとおしてアドボカシーや医療安全等の態度教育をすることにこそ、意義があると考えています。

当センターのPICUは、こうした医学教育的な意義を示す国内でも有数のモデル施設となっております。今後はこうした臨床・教育・研究にわたる大学PICUのモデルを、福島発で、わが国全体に普及啓発してゆくことが重要な使命になってくるものと考えています。ひきつづき御指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新津　健裕（にいつ たけひろ）
埼玉県立小児医療センター　集中治療科　科長兼副部長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任講師
小児科・PICU（2016年4月～　非常勤）

PICUの発展を今後も支援します

この度は、ふくしま子ども・女性医療支援センターが開設５周年を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。私は、当センターに小児集中治療室（PICU）が新設されるのに伴い、前任地である東京都立小児総合医療センター勤務時からPICUの立ち上げと、開設後にはPICUの診療支援に関わらせていただいております。

PICU立ち上げの際には、開設前の打合せのために、小児科の各診療グループの先生方や関連診療科の先生方とお話しする機会をいただきましたが、いつも皆様に温かく迎えていただいたことが懐かしく思い出されます。また、診療支援で出張した際には、初代センター長の水沼英樹先生と医局でお会いすると、毎回、“何かお困りのことはないですか？”と、いつも優しい笑顔とともに温かくお声掛けいただき、とても心強く感じておりました。

また、東京都立小児総合医療センターでPICU研修されたPICUグループの渡部真裕先生、齋藤康先生、柳沼和史先生は、PICU開設時から現場の中心として活躍されており、福島で勤務する際には今でも一緒に働かせていただいていますが、その度に彼らが成長していく姿を拝見してとても頼もしく感じております。

近年、我が国においても少しずつPICUが整備されてきておりますが、本学PICUの特徴として、大学病院附属の施設であるが故、研究・教育機関としての役割が挙げられます。

研究については、すでに小児科PICUグループの先生方が学会発表や論文発表にて成果を上げられています。また教育についても、小児科専攻医の先生方のPICU研修や医学生の病院実習が行われ、まだ比較的新しい分野である小児集中治療という領域の啓蒙にも寄与されています。

今後も大学病院附属のPICUとして、我が国の小児集中治療分野をアカデミックにリードされることを期待するとともに、私も微力ながら、スタッフ教育や臨床研究を通して、これからも当センターPICUの発展に貢献できたらと思っております。

今後少子化が進み、子どもの取り巻く環境が厳しくなることが予想されますが、当センターPICUが福島県の小児救急診療における重症小児患者の最後の砦として機能することは、当センターの役割の一つとして期待されることと思っております。

これまでPICUでの診療に関わる機会をいただいたことに感謝申し上げるとともに、今後の当センターの益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

齊藤　修（さいとう おさむ）
東京都立小児総合医療センター　救命・集中治療部　部長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任講師
小児科・PICU（2016年4月～　非常勤）

おおきなきがほしい

もうじき中学生になる次女の本棚の奥にある古びた絵本、「おおきなきがほしい」。背表紙やページの間は焦げ茶に染まったセロハンテープで補強され、全文ひらがなの文章は所々、漢字練習のように鉛筆で漢字が書き込まれたり、文章の区切りだろうか、線が引かれたり、ひどく子どもの落書きで汚れている。

中をみると、かおるという男の子が、お母さんにおおきなきがほしい、と伝えたところからかおるの空想の世界が広がるお話である。かおるのおおきなきは、かおるとおかあさん、おとうさん、3歳の妹かよちゃん、みんなで抱えても抱えきれないくらい太く、そして町を一望できる程、高い木で、何本ものはしごをくくりつけて登る。

木の幹、中程にはかおるが生活できる程の小屋があり、その先の木のてっぺんには見晴台まである。四季折々の色をなす、そのおおきなきには、りすや、かけす、やまがらなどいろいろな仲間が集う。夏には小屋で蝉の声を聞きながらかおるはホットケーキを焼く。秋には、葉っぱや小屋の床に落ちたかおるのビー玉、鉛筆、ボタンなどかけすにとっては珍しいものを集めてはもっていく。雪降る冬にはストーブを焚いた小屋にりすがクルミを持って暖をとりにくる。春になれば木に花が咲き、また多くの仲間がやってくる。花の色は空想では何色かまで分からない。そしてかおるのお父さんも小さい頃、同じ想いをもち、おおきなきとなるように、マテバシイの木を庭に一緒に植えて絵本はおしまいとなる。

かおるの空想の世界のおおきなきには、望郷の想いか、大きな夢か、はたまた豊かな自然の恵みか、自分でも何を重ね合わせているのか、漠然としていてその魅力を上手く説明できないが、その世界に強く強く引き込まれてしまう。

このおおきなきのように、地域を支える病院は、時季を重ねその魅力を湛えていくのであろう。大きな災害が起きても、本センターにPICUができて、病院の枠を超えて多くの仲間が集う。院内中の専門家が知識と経験を集めて、重い病の子どもを救う。そこで守るもの、育むものは、将来を担う子どもだけでなく、故郷そのものかも知れない。

集う仲間は様々でも、本センターの幹がさらに太く確かなものに、さらに高く、遠くまで子どもの未来を見据え、故郷を見渡せるおおきなきになってほしい。そしてほそくともながくその成長の一助に私も携わらせていただければ、この上ない喜びである。

本棚の古びた絵本の落書きは、わたしが子どもの頃にしたものだ。

（おおきなきがほしい　偕成社1974年発行　ぶん・さとうさとる／え・むらかみつとむ）

磯部　真倫（いそべ まさのり）

新潟大学医歯学総合病院　総合研修部・医師研修センター　副部長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任講師
産婦人科(2017年9月～　非常勤)

福島県立医大で私がやってきたこと

ふくしま子ども・女性医療支援センター５周年、まことにおめでとうございます。私がセンターで仕事をすることになったのは、現センター長である髙橋俊文先生がふくしま子ども・女性支援センターの教授に就任したことがきっかけです。

髙橋先生は、山形東高校、山形大学医学部の大先輩であり、産婦人科医としても多くのことを教えていただきました。その後、私は大阪へ異動したために一緒に働くことは、しばらくありませんでしたが、人の縁とはわからないものです。私は2013年に新潟大学に着任し、その後腹腔がん手術の立ち上げを行っていました。そのことを髙橋先生に評価していただき、福島医大でも同様に、腹腔鏡下子宮体がん手術の立ち上げを主たる目的として、ふくしま子ども・女性支援センターのスタッフとして関わらせていただくことになりました。

初めて福島医大で手術を行ったのは2017年７月24日でした。藤森教授をはじめとした福島医大の先生方、当時センター長であった水沼先生にも温かく迎え入れていただき、無事に初症例をトラブルなく完投することができました。その日の夜に水沼センター長や髙橋先生と居酒屋で飲んだことが懐かしく思い出されます。

その後、自分が執刀するだけでなく、福島医大で術者を養成し、無事10例の実施をもって、東北地方の大学病院で２番目に腹腔鏡下子宮体がん手術を保険診療で実施できる施設になることができました。現在は、腹腔鏡下子宮体がん手術は福島医大の先生方のみで実施できるようになっております。

次のタスクは腹腔鏡下子宮頸がん手術を保険適応で実施できるようにすることでした。こちらについても３例の実施をもって東北地方の大学病院で２番目に腹腔鏡下子宮頸がん手術を保険診療で実施できる施設にすることができました。福島県の腹腔鏡手術の発展に少しは貢献できたのではないかと思っております。今後、福島県にも腫瘍専門医と内視鏡技術認定医のダブルライセンスを持つ医師も生まれ、益々の発展が期待されます。

現在も、センター事業を通じて、腹腔鏡下子宮頸がん手術の前立ちや、オンラインでの腹腔鏡手術の指導に福島県で関わらせていただいています。今後は、腹腔鏡手術のみならず医学教育においても貢献できればと思っております。私自身、現在は医学教育を学んでおり、そのノウハウを福島医大の学生や医師教育に生かせればと思っております。その結果、福島県内の医師数の増加につながれば幸いです。

最後になりますが、福島医大の中で教育する機会を与えていただいた、藤森教授をはじめとした福島医大の先生方、センター長の髙橋俊文先生に感謝申し上げます。今後も微力ではありますが、福島県の医療の発展のために貢献していきたいと思います。

荻原　重俊（おぎわら しげとし）
手稲渓仁会病院　小児科・小児集中治療科　医長
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任助教
小児科・PICU（2019年4月～　非常勤）

PICU医師としてできること

この度は、ふくしま子ども・女性医療支援センターが６年目を迎えたこと、誠に御喜び申し上げます。これもセンターの諸先生方のご尽力と、そして福島県立医大の小児科学講座、産科婦人科学講座をはじめとした関係各所の御援助の賜物と思います。

私自身は福島県立医大附属病院に県内初の小児集中治療室（PICU）が新設されるのに伴い、当センターの所属となり主にPICUの立ち上げおよび開設後の診療支援に従事させていただきました。この間、当初は東京都立小児総合医療センターから、その後は異動に伴い北海道札幌の手稲渓仁会病院から出向し、最重症の小児患者の診療のかたわら看護師や若手小児科医へのレクチャーなどもさせていただく機会に恵まれました。

本学のPICUは2017年に全国の大学病院に先駆けて開設されましたが、その後の数年間で関東圏を中心に多くの大学病院で次々とPICUが開設され、小児の救急・集中治療に対する国内需要の高まりが感じられました。大学病院の小児科においてはこれまで"新生児"集中治療室（NICU）を中心に集中治療学が培われてきましたが、“小児”集中治療がそれとは異なる独立した専門分野として認知され、求められてきたのだと思います。

これまで重症小児の急性期管理は主に小児病棟や成人ICUの中で行われてきました。PICUで治療することの有効性が国際的な共通認識になってからは、日本では国立小児病院（現：成育医療研究センター）を先駆けとした全国の小児専門施設においてPICUが開設され成果をあげてきました。一方で、海外の大規模な小児病院であるトロントやフィラデルフィア、メルボルンなどは大学附属の病院としてアカデミアにおいても小児集中治療分野をリードしています。この点においても当大学をはじめとした大学病院でPICUが運用されることの意味は大きいと考えられます。

このように福島県下の重症小児の救命医療を支えるとともに、この分野における啓蒙、教育、研究とますますの発展が期待されているものと思います。私としましても微力ながらお役に立てればと思います。

福井　淳史（ふくい あつし）
兵庫医科大学　産科婦人科学講座　准教授
ふくしま子ども・女性医療支援センター　特任教授
産婦人科(2020年4月～　非常勤)

生殖医療の仲間とともに

ふくしま子ども・女性医療支援センター５周年、誠におめでとうございます。水沼英樹前センター長、髙橋俊文センター長に「福島にきて研究の事でも話してくれよ」とお声がけいただき、特任教授にさせていただいてから１年４ヶ月が経過いたしました。東北（宮城県仙台市）出身ながら遠く兵庫県で暮らす私に東北で仕事をする機会を提供してくださった水沼先生・髙橋先生の温かいお心に胸が熱くなりました。

昨年、水沼先生とあまりにも早すぎるお別れとなってしまいましたが、昨年７月に福島県立医大へお伺いし、水沼先生にお目にかかることができたのは髙橋センター長、太田先生のおかげです。本当にありがとうございました。

私は、以前在籍した弘前大学時代から、水沼先生の御指導の下、生殖医学、特に生殖免疫学について研究をしてまいりました。体外受精・胚移植（IVF－ET）においてなかなか着床が成立しない反復着床不全や妊娠が成立したとしても流産に終わってしまう不育症を子宮内や末梢血の免疫担当細胞の状態から解明・改善できないかということに取り組んでおります。子宮内には妊娠成立時、多くの免疫担当細胞が存在します。その中には胎児にとって有益な細胞も有害な細胞も存在します。それらの働きを主としてNK細胞を中心になんとか制御し、治療成績向上に貢献できればと思い、兵庫県に移った今も研究を続けております。

本年１月には、コロナ禍のためお伺いすることはできませんでしたがその研究の一端をWebセミナーで紹介させていただきました。コロナが落ち着きましたら是非とも福島県立医大の先生方と研究や治療について対面でディスカッションさせていただければと思っております。

また私は、子宮筋腫や子宮内膜症、卵管性不妊の加療を中心に内視鏡治療に取り組んでまいりました。現在の不妊治療はIVF－ET全盛ではありますが、卵管性不妊や子宮内膜症を有しているものの可能であれば自然妊娠をしたい方、IVF－ETを行う前後あるいは将来の妊娠に向けて外科的介入が必要な方も多くおられます。そのような方々の妊娠する能力を少しでも高めて差し上げたい。それをかなえることを目標に日々の診療にあたっております。

私のこれまで行ってきたことを微力ながらセンターの発展に協力させていただけることは、この上ない喜びです。益々のセンターの発展をお祈り申し上げます。

センター教員の研究業績

教員の研究業績（2016年4月～2021年3月）

水沼　英樹（2016年4月～）

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

1）水沼 英樹.更年期医療から女性医学へ：その歩みと今後の展望（特別講演）. 第32回日本女性医学学会, 大阪; 2019年11月4-5日

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

該当無し

Ⅰ-2. 国内の地方学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

該当無し

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

該当無し

II. 海外学会

1) Suzuki D., Suzuki S., Soeda S., Endo Y., Kojima M., Nomura S., Takahashi T., Mizunuma H., Fujimori K. Three cases of total laparoscopic hysterectomy due to late-onset complications of uterine artery embolization. 18th Annual Congress of the Asia pacific Association for Gynecologic Endoscopy and Minimally Invasive Therapy, Okayama, Japan, 7-9 Sept 2017
2) Takahashi T., Takehara I., Ota K., Mizunuma H., Nagase S. Predictive factors for dizygotic twin pregnancies after single embryo transfer：a retrospective analysis of a large-scale nationwide database study. 35th Annual Meeting ESHRE, Vienna, Austria, 23-26 June 2019
3) Ota K., Takahashi T., Muzunuma H., Kawk-Kim J. Impact of MTHFR C677T polymorphism on the levels of vitamin D and homocysteine and NK cell cytotoxicity in women with recurrent pregnancy losses. 35th Annual Meeting ESHRE, Vienna, Austria, 23-26 June 2019
4) Takahashi T., Ota K., Mizunuma H. Prevalence and predictive factors for complete fertilization failure in in vitro fertilization treatment cycles：a retrospective analysis of a large-scale nationwide database study. 36th Virtual Annual Meeting ESHRE, 5-8 July 2020

論　文

Ⅰ. 英文

1．原著

1) Kagabu M., Shoji T., Murakami K., Omi H., Honda T., Miura F., Yokoyama Y., Tokunaga H., Takano T., Ohta T., Shimizu D., Sato N., Soeda S., Watanabe T., Yamada H., Mizunuma H., Yaegashi N., Nagase S., Tase T., Sugiyama T. Clinical efficacy of nedaplatin-based concurrent chemoradiotherapy for uterine cervical cancer：a Tohoku Gynecologic Cancer Unit Study. Int J Clin Oncol. 2016; 21（4）：735-740.
2) Katanoda K., Noda M., Goto A., Mizunuma H., Lee J.S., Hayashi K. Impact of birth weight on adult-onset diabetes mellitus in relation to current body mass index：The Japan Nurses' Health Study. J Epidemiol. 2017; 27（9）：428-434.
3) Mishra G.D., Pandeya N., Dobson A.J., Chung H.F., Anderson D., Kuh D., Sandin S., Giles G.G., Bruinsma F., Hayashi K., Lee J.S., Mizunuma H., Cade J.E., Burley V., Greenwood D.C., Goodman A., Simonsen M.K., Adami H.O., Demakakos P., and Weiderpass E. Early menarche, nulliparity and the risk for premature and early natural menopause. Hum Reprod. 2017; 32（3）：679-686.
4) Oishi M., Iino K., Tanaka K., Ishihara K., Yokoyama Y., Takahashi I., Mizunuma H. Hypertensive disorders of pregnancy increase the risk for chronic kidney disease：A population-based retrospective study. Clin Exp Hypertens. 2017; 39（4）：361-365.
5) Hagino H., Ito M., Hashimoto J., Yamamoto M., Endo K., Katsumata K., Asao Y., Matsumoto R., Nakano T., Mizunuma H., Nakamura T. Monthly oral ibandronate 100 mg is as effective as monthly intravenous ibandronate 1 mg in patients with various pathologies in the MOVEST study. J Bone Miner Metab. 2018; 36（3）：336-343.
6) Okano H., Higuchi T., Kurabayashi T., Makita K., Mizunuma H., Mochizuki Y., Obayashi S., Yasui T., Takamatsu K., Subcommittee for Revising the Japanese Guidelines for Hormone Replacement Therapy in the Women's Health Care Committee JSoO, Gynecology. Japan Society of Obstetrics and Gynecology and Japan Society for Menopause and Women's Health 2017 guidelines for hormone replacement therapy. J Obstet Gynaecol Res. 2018; 44（8）：1355-1368.
7) Yasui T., Hayashi K., Okano H., Kamio M., Mizunuma H., Kubota T., Lee J.S., Suzuki S. Uterine leiomyomata：a retrospective study of correlations with hypertension and diabetes mellitus from the Japan Nurses' Health Study. J Obstet Gynaecol. 2018; 38（8）：1128-1134.
8) Ota K., Takahashi T., Shiraishi S., and Mizunuma H. Combination of microwave endometrial ablation and postoperative dienogest administration is effective for treating symptomatic adenomyosis. J Obstet Gynaecol Res. 2018; 44（9）：1787-1792.
9) Zhu D., Chung H.F., Pandeya N., Dobson A.J., Cade J.E., Greenwood D.C., Crawford S.L., Avis N.E., Gold E.B., Mitchell E.S., Woods N.F., Anderson D., Brown D.E., Sievert L.L., Brunner E.J., Kuh D., Hardy R., Hayashi K., Lee J.S., Mizunuma H., Giles G.G., Bruinsma F., Tillin

T., Simonsen M.K., Adami H.O., Weiderpass E., Canonico M., Ancelin M.L., Demakakos P., and Mishra G.D. Relationships between intensity, duration, cumulative dose, and timing of smoking with age at menopause：A pooled analysis of individual data from 17 observational studies. PLoS Med. 2018; 15（11）：e1002704.

10) Soeda S., Kyozuka H., Kato A., Fukuda T., Isogami H., Wada M., Murata T., Hiraiwa T., Yasuda S., Suzuki D., Yamaguchi A., Hasegawa O., Nomura Y., Jimbo M., Takahashi T., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K. Establishing a Treatment Algorithm for Puerperal Genital Hematoma Based on the Clinical Findings. Tohoku J Exp Med. 2019; 249（2）：135-142.

11) Katanoda K., Noda M., Goto A., Mizunuma H., Lee J.S., Hayashi K. Being underweight in adolescence is independently associated with adult-onset diabetes among women：The Japan Nurses' Health Study. J Diabetes Investig. 2019; 10（3）：827-836.

12) Ota K., Sato K., Ogasawara J., Takahashi T., Mizunuma H., Tanaka M. Safe and easy technique for the laparoscopic application of Seprafilm（R）in gynecologic surgery. Asian J Endosc Surg. 2019; 12（2）：242-245.

13) Zhu D., Chung H.F., Dobson A.J., Pandeya N., Giles G.G., Bruinsma F. Brunner E.J., Kuh D., Hardy R., Avis N.E., Gold E.B., Derby C.A., Matthews K.A., Cade J.E., Greenwood D.C., Demakakos P., Brown D.E., Sievert L.L., Anderson D., Hayashi K., Lee J.S., Mizunuma H., Tillin T., Simonsen M.K., Adami H.O., Weiderpass E., Mishra GD. Age at natural menopause and risk of incident cardiovascular disease：a pooled analysis of individual patient data. Lancet Public Health. 2019; 4（11）：e553-e564.

14) Zhu D., Chung H.F., Pandeya N., Dobson A.J., Hardy R., Kuh D., Brunner E.J., Bruinsma F., Giles G.G., Demakakos P., Lee J.S., Mizunuma H., Hayashi K., Adami H.O., Weiderpass E., Mishra G.D. Premenopausal cardiovascular disease and age at natural menopause：a pooled analysis of over 170,000 women. Eur J Epidemiol. 2019; 34（3）：235-246.

15) Irahara M., Maejima Y., Shinbo N., Yamauchi Y., Mizunuma H. Ulipristal acetate for Japanese women with symptomatic uterine fibroids：A double-blind, randomized, phase II dose-finding study. Reprod Med Biol. 2020; 19（1）：65-74.

16) Ota K., Takahashi T., Han A., Damvaeba S., Mizunuma H., Kwak-Kim J. Effects of MTHFR C677T polymorphism on vitamin D, homocysteine and natural killer cell cytotoxicity in women with recurrent pregnancy losses. Hum Reprod. 2020; 35（6）：1276-1287.

17) Takamatsu K., Ogawa M., Higuchi T., Takeda T., Hayashi K., Mizunuma H. Effects of Kamishoyosan, a Traditional Japanese Medicine, on Menopausal Symptoms：A Randomized, Placebo-Controlled, Double-Blind Clinical Trial. Evid Based Complement Alternat Med. 2020; 2020 9285317.

18) Mishra S.R., Chung H.F., Waller M., Dobson A.J., Greenwood D.C., Cade J.E., Giles G.G., Bruinsma F., Simonsen M.K., Hardy R., Kuh D., Gold E.B., Crawford S.L., Derby C.A., Matthews K.A, Demakakos P., Lee J.S., Mizunuma H., Hayashi K., Sievert L.L., Brown D.E., Sandin S., Weiderpass E., Mishra G.D.. Association Between Reproductive Life Span and Incident Nonfatal Cardiovascular Disease：A Pooled Analysis of Individual Patient Data From 12 Studies. JAMA Cardiol. 2020; 5（12）：1410-1418.

19) Kurabayashi T., Mizunuma H., Kubota T., Nagai K., Hayashi K. Low Birth Weight and Prematurity Are Associated with Hypertensive Disorder of Pregnancy in Later Life：A Cross-Sectional Study in Japan. Am J Perinatol. 2021; 38 (10)：1096-1102.

2．症例報告

1) Funamizu A., Fukui A., Fukuhara R., Kobayashi A., Chiba H., Matsumura Y., Ito A., Mizunuma H. A case of bilateral tubal pregnancy. Gynecol Minim Invasive Ther. 2017; 6 (4)：191-192.

2) Ota K., Kwak-Kim J., Takahashi T., and Mizunuma H. Pregnancy complicated with PFAPA (periodic fever, aphthous stomatitis, pharyngitis and cervical adenitis) syndrome：a case report. BMC Pregnancy Childbirth. 2018; 18 (1)：207.

3) Suzuki S., Takahashi T., Ota K., Nishimura K., Fukase M., Watanabe N., Matsukawa J., Matsuo K., Kawagoe J., Mizunuma H., Nagase S. Successful laparoscopic treatment of an abdominal pregnancy implanted in the utero-ovarian ligament：a case report of a rare form of ectopic pregnancy. J Obstet Gynaecol. 2019; 39 (4)：579-580.

4) Furukawa Y., Takahashi T., Suganuma R., Ohara M., Ota K., Kyozuka H., Yamaguchi A., Soeda S., Watanabe T., Komiya H., Mizunuma H., Fujimori K. Successful Planned Pregnancy through Vitrified-Warmed Embryo Transfer in a Woman with Chronic Myeloid Leukemia：Case Report and Literature Review. Mediterr J Hematol Infect Dis. 2020; 12 (1)：e2020005.

5) Matsukawa J., Takahashi T., Hada Y., Kameda W., Ota K., Fukase M., Takahashi K., Matsuo K., Mizunuma H., Nagase S. Successful laparoscopic resection of virilizing ovarian steroid cell tumor, not otherwise specified, in a 22-year-old woman：a case report and evaluation of the steroidogenic pathway. Fukushima J Med Sci. 2020; 65 (3)：133-139.

6) Ota K., Takahashi T., Katagiri M., Matsuoka R., Sekizawa A., Mizunuma H., Yoshida H. Successful monozygotic triplet pregnancy after a single blastocyst transfer following in vitro maturation of oocytes from a woman with polycystic ovary syndrome：a case report. BMC Pregnancy Childbirth. 2020; 20 (1)：57.

7) Takahashi T., Ota K., Jimbo M., Mizunuma H. Spontaneous unscarred uterine rupture and surgical repair at 11 weeks of gestation in a twin pregnancy. J Obstet Gynaecol Res. 2020; 46 (9)：1911-1915.

8) Toba N., Takahashi T., Ota K., Takanashi A., Iizawa Y., Endo Y., Furukawa S., Soeda S., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K., Takeichi K. Malignant transformation arising from mature cystic teratoma of the ovary presenting as ovarian torsion：a case report and literature review. Fukushima J Med Sci. 2020; 66 (1)：44-52.

3．総説

該当無し

4．著書

該当無し

II. 和文

1．原著

1） 岡垣 竜吾, 加藤 久美子, 島田 誠, 高橋 悟, 竹村 昌彦, 成本 一隆, 古谷 健一, 水沼 英樹, 古山 将康, 日本女性骨盤底医学会・日本骨盤臓器脱手術学会「経腟メッシュ手術安全管理等に関する委員会」. 本邦における骨盤臓器脱に対する経腟メッシュ手術合併症調査報告. 日本女性骨盤底医学会誌. 2016; 13 (1)：87-92.

2） 船水 文乃, 福井 淳史, 淵之上 康平, 鴨井 舞衣, 福原 理恵, 水沼 英樹. 子宮内膜症に対するLEP製剤投与によるNK細胞の変化. 日本エンドメトリオーシス学会会誌. 2016; 37 96-101.

3） 中田 真木, 古山 将康, 高橋 悟, 水沼 英樹, 高松 潔, 若槻 明彦.【骨盤臓器脱と排尿障害Up to Date】わが国における骨盤臓器脱手術の現状 日本産科婦人科学会女性ヘルスケア委員会によるアンケート調査より. 産科と婦人科. 2016; 83 (8)：896-903.

4） 中田 真木, 古山 将康, 高橋 悟, 水沼 英樹, 高松 潔, 若槻 明彦, 日本産科婦人科学会女性ヘルスケア委員会. 本邦の骨盤臓器脱に対する手術療法の実勢調査. 日本女性骨盤底医学会誌. 2016; 13 (1)：80-86.

5） 片野田 耕太, 野田 光彦, 後藤 温, 水沼 英樹, 李 廷秀, 林 邦彦. 女性における思春期の低体重と成人発症糖尿病との関連 日本ナースヘルス研究. 日本女性医学学会雑誌. 2021; 28 (2)：236-241.

2．症例報告

1） 加茂 矩士, 髙橋 俊文, 鈴木 聡, 菅沼 亮太, 大原 美希, 小宮 ひろみ, 水沼 英樹, 藤森 敬也. ラトケ嚢胞が原因と考えられる低ゴナドトロピン性性腺機能低下症および成人成長ホルモン分泌低下症を合併した不妊症女性に対して凍結融解胚移植治療を行い妊娠・出産した1例. 福島医学. 2018; 68 (2)：97-104.

2） 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 遠藤 雄大, 平岩 幹, 野村 真司, 小島 学, 経塚 標, 鈴木 聡, 添田 周, 渡辺 尚文, 水沼 英樹, 藤森 敬也. 子宮動脈塞栓術後の晩期合併症により腹腔鏡下子宮全摘術を施行した3症例. 福島医学. 2018; 68 (3)：177-183.

3．総説

1） 髙橋 俊文, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 子宮内膜症と心血管系疾患の関係について教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2016; 23 (4)：357-358.

2） 小宮 ひろみ, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 更年期障害におけるホルモン補充療法と漢方療法の使い分けを教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2016; 23 (4)：359-360.

3） 水沼 英樹.【Women’s Health】更年期障害. 日本医師会雑誌. 2016; 145 (1)：45-47.

4) 福井 淳史, 水沼 英樹.【知りたい最新情報がすぐわかる！-不妊・不育症診療パーフェクトガイド】不妊症の検査・診断《女性因子》頸管粘液検査の実施法と判定法. 臨床婦人科産科. 2016; 70 (4)：74-78.
5) 福原 理恵, 福井 淳史, 水沼 英樹.【知りたい最新情報がすぐわかる！-不妊・不育症診療パーフェクトガイド】一般不妊治療：手術療法（Q7）PCOSに対する腹腔鏡下卵巣多孔術後は自然排卵はどのくらいの周期期待できるとインフォームド・コンセントすべきでしょうか？臨床婦人科産科. 2016; 70 (4)：181-182.
6) 福原 理恵, 福井 淳史, 水沼 英樹.【知りたい最新情報がすぐわかる！-不妊・不育症診療パーフェクトガイド】一般不妊治療：手術療法 PCOSに対する腹腔鏡下卵巣多孔術の適応と実際. 臨床婦人科産科. 2016; 70 (4)：170-173.
7) 林 邦彦, 久保田 俊郎, 水沼 英樹.【産婦人科臨床研究最前線】女性医学領域 日本ナースヘルス研究 Japan Nurses' Health Study. 産科と婦人科. 2016; 83 (10)：1196-1200.
8) 水沼 英樹.【QOL向上のための内分泌療法】ホルモン補充療法ガイドラインの改訂. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2017; 24 (4)：255-259.
9) 水沼 英樹.【女性の将来の健康のために-疾患・病態相互の関連における新しい知見】女性医療における予防医学の意義. 産科と婦人科. 2017; 84 (8)：901-905.
10) 水沼 英樹.【ホルモン補充療法（HRT）の変遷と現状】ホルモン補充療法の現状. 日本医事新報. 2017 (4865)：26-30.
11) 鈴木 大輔, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A HRTを長期間施行する場合のポイントについて教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2017; 24 (4)：319-320.
12) 鈴木 大輔, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 60歳以上の症例に対するHRTの新規投与はなぜ慎重投与なのですか？HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2017; 24 (4)：318-319.
13) 水沼 英樹. 更年期医療から女性医学へ その歩みと今後の展望. 日本女性医学学会雑誌. 2018; 25 (2)：175-178.
14) 安田 俊, 水沼 英樹.【妊娠・授乳と骨・カルシウム代謝】妊娠・授乳と骨・カルシウム代謝. Clinical Calcium. 2018; 29 (1)：19-26.
15) 山口 明子, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A HRTを使用する場合、併用するプロゲステロン製剤の種類の違いについて教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2018; 25 (4)：328-330.
16) 小宮 ひろみ, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 更年期障害への漢方療法の有効性について教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2018; 25 (4)：330-331.
17) 小宮 ひろみ, 水沼 英樹.【月経を診る-患者満足の外来診療のために】更年期の不正出血の診断と治療. 産科と婦人科. 2018; 85 (11)：1337-1342.
18) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 神保 正利, 水沼 英樹.【周産期医療の進歩と今】不育症（習慣流産）予後改善のために何に注意すべきか. White. 2018; 6 (2)：111-114.
19) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【Preconception Care-健やかな母子となるための最新トピックス-】子宮内膜 ビタミンDと子宮内膜機能. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2018; 25 (4)：297-301.
20) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹. 卵巣組織凍結・移植の現状と未来. 日本がん・生殖医療学会誌. 2018; 1 (1)：23-26.
21) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【女性のアンチエイジング-老化のメカニズムから予防・対処法まで】部位別 老化のメカニズムと予防・対処法　骨の老化. 臨床婦人科産科. 2018; 72 (12)：1214-1219.
22) 山口 明子, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 自律神経失調症の既往とGnRHアゴニストの副作用の関係を教

えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2019; 26 (4)：316-317.

23) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【新時代に入ったがん・生殖医療】がん・生殖医療の現状と今後の展望 がん・生殖医療のための生殖補助医療技術の進歩. 産科と婦人科. 2019; 86 (4)：431-437.

24) 太田 邦明, 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【AGEsと女性医療】AGEsと不育症. White. 2019; 7 (2)：137-142.

25) 太田 邦明, 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【“いつかはママに…”を応援する プレコンセプションケア】栄養代謝とプレコンセプションケア. 産婦人科の実際. 2019; 68 (10)：1215-1221.

26) 髙橋 俊文, 太田 邦明, 水沼 英樹.【若年女性診療の「こんなとき」どうする?-多彩でデリケートな健康課題への処方箋】月経異常管理の実際 性分化・性染色体異常を疑ったら? 臨床婦人科産科. 2020; 74 (7)：646-653.

27) 山田 仁, 大滝 遙, 風間 順一郎, 水沼 英樹, 紺野 愼一.【骨粗鬆症と骨粗鬆症関連骨折に対する診断と治療】リエゾンサービス Project F始めました. 別冊整形外科. 2020 (78)：221-225.

4. 著書

1) 水沼 英樹 (共著). HRT. 改訂6版骨粗鬆症診療ハンドブック. 中村 利孝, 松本 俊夫編. 医薬ジャーナル社 (大阪). 2016, 310-314.

2) 水沼 英樹 (共著). 女性医学と骨粗鬆診療. 産婦人科医のための骨粗鬆症診療実践ハンドブック. 寺内 公一・太田 邦明編. 中外医学社 (東京). 2019, 15-18.

3) 太田 邦明, 水沼 英樹 (共著). 閉経後骨粗鬆症. 産婦人科医のための骨粗鬆症診療実践ハンドブック. 寺内 公一・太田 邦明編. 中外医学社 (東京). 2019, 89-99.

4) 水沼 英樹 (単著). 基礎から学ぶ女性医学. 診断と治療社 (東京). 2020.

公的助成金獲得

1. 研究代表者

1) 科学研究費補助金　基盤研究 (C)　2017年4月1日～ 2020年3月31日 (課題番号17K11287)「子宮内膜症女性の心血管系疾患発症に対する先制医療の可能性－臨床疫学的アプローチ」(研究代表者：水沼 英樹、研究分担者：髙橋 俊文)

2. 研究分担者

該当無し

髙橋　俊文 (2016年4月～)

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

該当無し

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

1) 髙橋 俊文. 思春期悪性腫瘍への対応 ヘルスケアの立場から (生涯研修プログラム). 第70回日本産科婦人科学会, 仙台; 2018年5月
2) 髙橋 俊文. 卵子の加齢と卵子の質の低下の分子機構 卵子の質は改善できるのか？ (教育講演). 第72回日本産科婦人科学会, Web開催; 2020年4月23-28日
3) 髙橋 俊文. オンコファーティリティとオンコヘルスケア. 小児・AYAがんサバイバー女性のヘルスケア (オンコウィメンズヘルス) (シンポジウム). 第35回日本女性医学学会, hybrid開催 (東京); 2020年11月21-22日
4) 髙橋 俊文. 卵子の加齢とミトコンドリア (教育講演). 第16回日本A－PART学術講演会, Web開催; 2021年3月19-25日

Ⅰ-2. 国内の地方会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

該当無し

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

1) 髙橋 俊文. 生殖医療における患者と医療者のヘルスリテラシー. 第147回東北連合産婦人科学会, 山形; 2019年6月15日

II. 海外学会

1) Amita M., Takahashi T., Saito H. Ubiquitin-proteasome pathway is involved in the decrease of estrogen receptor-α by clomiphene citrate in human endometrial cells. ASRM 2016 Scientific Congress & Expo, Salt Lake City, USA; 15-19 Oct 2016
2) Igarashi H., Takahshi T., Abe H., Nakano H., Nakajima O., Nagase S., Kyono K. Mitochondrial transfer from somatic cells is not sufficient for rejuvenation of postovulatory in vivo-aged mouse oocytes. The 7th Congress of the Asia Pacific Initiative on Reproduction, Kuala Lumpur, Malaysia, 30 March-2 April 2017
3) Suzuki D., Suzuki S., Soeda S., Endo Y., Kojima M., Nomura S., Takahashi T., Mizunuma H.,

Fujimori K. Three cases of total laparoscopic hysterectomy due to late-onset complications of uterine artery embolization. 18th Annual Congress of the Asia pacific Association for Gynecologic Endoscopy and Minimally Invasive Therapy, Okayama, Japan, 7-9 Sept 2017

4) Takahashi T., Takehara I., Ota K., Mizunuma H., Nagase S. Predictive factors for dizygotic twin pregnancies after single embryo transfer：a retrospective analysis of a large-scale nationwide database study. 35th Annual Meeting ESHRE, Vienna, Austria, 23-26 June 2019

5) Ota K., Takahashi T., Muzunuma H., Kawk-Kim J. Impact of MTHFR C677T polymorphism on the levels of vitamin D and homocysteine and NK cell cytotoxicity in women with recurrent pregnancy losses. 35th Annual Meeting ESHRE, Vienna, Austria, 23-26 June 2019

6) Takahashi T., Ota K. Predictive factors for oocyte retrieval failure in treatment cycles with assisted reproductive technology：a retrospective cohort study using the nation-wide ART registry of Japan. ASRM 2019 Scientific Congress & Expo, Philadelphia, USA, 12-16 Oct 2019

7) Ota K., Takahashi T, Kwak-Kim J. Vitamin D insufficiency is the risk factor for hyperhomocysteinemia derived from MTHFR C677T gene polymorphism in women with recurrent pregnancy losses. ASRM 2019 Scientific Congress & Expo, Philadelphia, USA, 12-16 Oct 2019

8) Takahashi T., Ota K., Mizunuma H. Prevalence and predictive factors for complete fertilization failure in in vitro fertilization treatment cycles：a retrospective analysis of a large-scale nationwide database study. 36th Virtual Annual Meeting ESHRE, 5-8 July 2020

9) Takahashi T., Ota K. Predictive factors for dizygotic twin pregnancies after single embryo transfer：a retrospective analysis of a large-scale nationwide database study. ASRM 2020 Scientific Congress & Expo, Virtual Congress, USA, 17-21 Oct 2020

論　文

Ⅰ. 英文

1．原著

1) Amita M., Takahashi T., Igarashi H., Nagase S. Clomiphene citrate down-regulates estrogen receptor-α through the ubiquitin-proteasome pathway in a human endometrial cancer cell line. Mol Cell Endocrinol. 2016; 428：142-147.
2) Igarashi H., Takahashi T., Abe H., Nakano H., Nakajima O., Nagase S. Poor embryo development in post-ovulatory in vivo-aged mouse oocytes is associated with mitochondrial dysfunction, but mitochondrial transfer from somatic cells is not sufficient for rejuvenation. Hum Reprod. 2016; 31（10）：2331-2338.
3) Kurosawa H., Utsunomiya H., Shiga N., Takahashi A., Ihara M., Ishibashi M., Nishimoto M., Watanabe Z., Abe H., Kumagai J., Terada Y., Igarashi H., Takahashi T., Fukui A., Suganuma R., Tachibana M., and Yaegashi N. Development of a new clinically applicable device for embryo evaluation which measures embryo oxygen consumption. Hum Reprod. 2016; 31（10）：2321-2330.
4) Matsumura S., Ohta T., Yamanouchi K., Liu Z., Sudo T., Kojimahara T., Seino M., Narumi M., Tsutsumi S., Takahashi T., Takahashi K., Kurachi H., Nagase S. Activation of estrogen receptor alpha by estradiol and cisplatin induces platinum-resistance in ovarian cancer cells. Cancer Biol Ther. 2017; 18（9）：730-739.
5) Takahashi T., Hasegawa A., Igarashi H., Amita M., Matsukawa J., Takehara I., Suzuki S., Nagase S. Prognostic factors for patients undergoing vitrified-warmed human embryo transfer cycles：a retrospective cohort study. Hum Fertil（Camb）. 2017; 20（2）：140-146.
6) Ota K., Takahashi T., Shiraishi S., Mizunuma H. Combination of microwave endometrial ablation and postoperative dienogest administration is effective for treating symptomatic adenomyosis. J Obstet Gynaecol Res. 2018; 44（9）：1787-1792.
7) Narumi M., Takahashi K., Yamatani H., Seino M., Yamanouchi K., Ohta T., Takahashi T., Kurachi H., Nagase S. Oxidative Stress in the Visceral Fat Is Elevated in Postmenopausal Women with Gynecologic Cancer. J Womens Health（Larchmt）. 2018; 27（1）：99-106.
8) Soeda S., Hiraiwa T., Takata M., Kamo N., Sekino H., Nomura S., Kojima M., Kyozuka H., Ozeki T., Ishii S., Tameda T., Asano K., Miyazaki M., Takahashi T., Watanabe T., Taki Y., Fujimori K. Unique Learning System for Uterine Artery Embolization for Symptomatic Myoma and Adenomyosis for Obstetrician- Gynecologists in Cooperation with Interventional Radiologists：Evaluation of UAE From the Point of View of Gynecologists Who Perform UAE. J Minim Invasive Gynecol. 2018; 25（1）：84-92.
9) Ota K., Sato K., Ogasawara J., Takahashi T., Mizunuma H., Tanaka M. Safe and easy technique for the laparoscopic application of Seprafilm? in gynecologic surgery. Asian J Endosc Surg. 2019; 19（2）：242-245.
10) Soeda S., Watanabe T., Nomura S., Kojima M., Furukawa S., Endo H., Saze Z., Ozeki T.,

Nishiyama H., Kenjo A., Takahashi T., Yamaga H., Fujimori K. Surgical management of recurrent gynecological cancer：Complete resection is the key to longer survival. European Journal of Gynaecological Oncology. 2019; 40（1）：28-35.

11) Soeda S., Furukawa S., Sato T., Ueda M., Kamo N., Endo Y., Kojima M., Nomura S., Kataoka M., Fujita S., Endo H., Takahashi T., Watanabe T., Yamada H., Fujimori K. Pelvic Exenteration as Potential Cure and Symptom Relief in Advanced and Recurrent Gynaecological Cancer. Anticancer Res. 2019; 39（10）：5631-5637.

12) Soeda S., Kyozuka H., Kato A., Fukuda T., Isogami H., Wada M., Murata T., Hiraiwa T., Yasuda S., Suzuki D., Yamaguchi A., Hasegawa O., Nomura Y., Jimbo M., Takahashi T., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K. Establishing a Treatment Algorithm for Puerperal Genital Hematoma Based on the Clinical Findings. Tohoku J Exp Med. 2019; 249（2）：135-142.

13) Kwak-Kim J., Ota K., Sung N., Huang C., Alsubki L., Lee S., Han J.W., Han A., Yang X., Saab W., Derbala Y., Wang W. J., He Q., Liao A., Takahashi T., Cavalcante M.B., Barini R., Bao S., Fukui A., Ledee N., Coulam C. COVID-19 and immunomodulation treatment for women with reproductive failures. J Reprod Immunol. 2020; 141：103168.

14) Ota K., Takahashi T., Han A., Damvaeba S., Mizunuma H., Kwak-Kim J. Effects of MTHFR C677T polymorphism on vitamin D, homocysteine and natural killer cell cytotoxicity in women with recurrent pregnancy losses. Hum Reprod. 2020; 35（6）：1276-1287.

15) Isobe M., Kataoka Y., Chikazawa K., Nishigori H., Takahashi T., .Enomoto T. The number of overall hysterectomies per population with the perimenopausal status is increasing in Japan：A national representative cohort study. J Obstet Gynaecol Res 2020; 46（12）：2561-2661.

16) Yamashita S., Ikemoto Y., Ochiai A., Yamada S., Kato K., Ohno M., Segawa T., Nakaoka Y., Toya M., Kawachiya S., Sato Y., Takahashi T., Takeuchi S., Nomiyama M., Tabata C., Fujiwara T., Okamoto S., Kawamura T., Kawagoe J., Yamada M., Sato Y., Marumo G., Sugiyama R., Kuroda K. Analysis of 122 triplet and one quadruplet pregnancies after single embryo transfer in Japan. Reprod Biomed Online. 2020; 40（3）：374-380.

17) Isobe M., Kataoka Y., Chikazawa K., Hada T., Nishigori H., Takahashi T. Enomoto, T. Correlation between the number of laparoscopy-qualified gynecologists and the proportion of laparoscopic surgeries for benign gynecological diseases in Japan：An ecological study. J Obstet Gynaecol Res. 2021; 47（1）：329-336.

2．症例報告

1) Ota K., Kwak-Kim J., Takahashi T., Mizunuma H. Pregnancy complicated with PFAPA（periodic fever, aphthous stomatitis, pharyngitis and cervical adenitis）syndrome：a case report. BMC Pregnancy Childbirth. 2018; 18（1）：207.

2) Suzuki S., Takahashi T., Ota K., Nishimura K., Fukase M., Watanabe N., Matsukawa J., Matsuo K., Kawagoe J., Mizunuma H., Nagase S. Successful laparoscopic treatment of an abdominal pregnancy implanted in the utero-ovarian ligament：a case report of a rare form of ectopic pregnancy. J Obstet Gynaecol. 2019; 39（4）：579-580.

3) Takehara I., Takahashi T., Ota K., Ohta N., Mizunuma H., Nagase S. Trichorionic triamniotic triplets after single embryo transfer：A case series and literature review. INTERNATIONAL JOURNAL OF WOMEN'S HEALTH AND REPRODUCTION SCIENCES. 2019; 7 (3)：408-411.
4) Furukawa Y., Takahashi T., Suganuma R., Ohara M., Ota K., Kyozuka H., Yamaguchi A., Soeda S., Watanabe T., Komiya H., Mizunuma H., Fujimori K. Successful Planned Pregnancy through Vitrified-Warmed Embryo Transfer in a Woman with Chronic Myeloid Leukemia：Case Report and Literature Review. Mediterr J Hematol Infect Dis. 2020; 12 (1)：e2020005.
5) Endo Y., Takahashi T., Matsumiya T., Fukuda K., Ueda M., Owada A., Nomura S., Ota K., Hashimoto S., Soeda S., Nomura Y., Fujimori K., Tanaka M. Successful management of preoperatively diagnosed torsion of a subserosal uterine fibroid by pneumoperitoneum laparoscopic single-port surgery. Fukushima J Med Sci. 2020; 65 (3)：128-132.
6) Matsukawa J., Takahashi T., Hada Y., Kameda W., Ota K., Fukase M., Takahashi K., Matsuo K., Mizunuma H., Nagase S. Successful laparoscopic resection of virilizing ovarian steroid cell tumor, not otherwise specified, in a 22-year-old woman：a case report and evaluation of the steroidogenic pathway. Fukushima J Med Sci. 2020; 65 (3)：133-139.
7) Omoto T., Takahashi T., Fujimori K., Kin S. Prenatal diagnosis of fetal microhydranencephaly：a case report and literature review. BMC Pregnancy Childbirth. 2020; 20 (1)：668.
8) Ota K., Takahashi T., Kamo N., Endo Y., Furukawa S., Soeda S. Successful management of a submucosal fibroid using a hysteroscopic morcellator system in a patient with a history of total proctocolectomy：A case report. J Obstet Gynaecol Res. 2020; 46 (11)：2450-2453.
9) Ota K., Takahashi T., Katagiri M., Matsuoka R., Sekizawa A., Mizunuma H., Yoshida H. Successful monozygotic triplet pregnancy after a single blastocyst transfer following in vitro maturation of oocytes from a woman with polycystic ovary syndrome：a case report. BMC Pregnancy Childbirth. 2020; 20 (1)：57.
10) Ota Y., Ota K., Takahashi T., Suzki S., Sano R., Ota I., Moriya T., Shiota M. Primary endometrioid carcinoma of the uterosacral ligament arising from deep infiltrating endometriosis 6 years after bilateral salpingo-oophorectomy due to atypical proliferative endometrioid tumor of the ovary：a rare case report. World J Surg Oncol. 2020; 18 (1)：329.
11) Ota Y., Ota K., Takahashi T., Suzuki S., Sano R., Shiota M. New surgical technique of laparoscopic resection of adenomyosis under real-time intraoperative ultrasound elastography guidance：A case report. Heliyon. 2020; 6 (8)：e 04628.
12) Soeda S., Watanabe T., Kamo N., Sato T., Okabe C., Ueda M., Endo Y., Manabu K., Nomura S., Furukawa S., Nishigori H., Takahashi T., Fujimori K. Successful Management of Platinum-resistant Ovarian Cancer by Weekly Nedaplatin Followed by Olaparib：Three Case Reports. Anticancer Res. 2020; 40 (9)：5263-5270.
13) Takahashi T., Ota K., Jimbo M., Mizunuma H. Spontaneous unscarred uterine rupture and surgical repair at 11 weeks of gestation in a twin pregnancy. J Obstet Gynaecol Res. 2020; 46 (9)：1911-1915.

14) Toba N., Takahashi T., Ota K., Takanashi A., Iizawa Y., Endo Y., Furukawa S., Soeda S., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K., Takeichi K. Malignant transformation arising from mature cystic teratoma of the ovary presenting as ovarian torsion: a case report and literature review. Fukushima J Med Sci. 2020; 22; 66 (1)：44-52.

3．総説

該当無し

4．著書

該当無し

II. 和文

1．原著

1) 寺田 幸弘, 木村 直子, 髙橋 俊文, 柴原 浩章, 齊藤 英和, 新村 末雄, 柳田 薫. 我が国における生殖補助医療胚培養士の現状2015 生殖補助医療胚培養士および管理胚培養士の資格審査結果の解析. 日本卵子学会誌. 2017; 2 (1)：11-17.

2．症例報告

1) 丸山 真弓, 髙橋 俊文, 高橋 一広, 永瀬 智. 13歳女児に発症した卵管留水症による付属器捻転の1例. 日本女性医学学会雑誌. 2016; 23 (2)：148-153.
2) 安藤 麗, 髙橋 俊文, 松川 淳, 堤 誠司, 永瀬 智. 帝王切開術後に広範型肺血栓塞栓症を発症し救命した1例. 当科における褥婦の静脈血栓塞栓症予防プロトコールの見直し. 山形医学. 2016; 34 (2)：114-120.
3) 加茂 矩士, 髙橋 俊文, 鈴木 聡, 菅沼 亮太, 大原 美希, 小宮 ひろみ, 水沼 英樹, 藤森 敬也. ラトケ嚢胞が原因と考えられる低ゴナドトロピン性性腺機能低下症および成人成長ホルモン分泌低下症を合併した不妊症女性に対して凍結融解胚移植治療を行い妊娠・出産した1例. 福島医学. 2018; 68 (2)：97-104.
4) 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 遠藤 雄大, 平岩 幹, 野村 真司, 小島 学, 経塚 標, 鈴木 聡, 添田 周, 渡辺 尚文, 水沼 英樹, 藤森 敬也. 子宮動脈塞栓術後の晩期合併症により腹腔鏡下子宮全摘術を施行した3症例. 福島医学. 2018; 68 (3)：177-183.

3．総説

1) 髙橋 俊文, 松川 淳, 永瀬 智.【知りたい最新情報がすぐわかる！ -不妊・不育症診療パーフェクトガイド】一般不妊治療： 薬物療法（Q8）レトロゾールはPCOS症例に対しても有効でしょうか？ 臨床婦人科産科. 2016; 70 (4)：153-154.
2) 髙橋 俊文, 松川 淳, 永瀬 智.【知りたい最新情報がすぐわかる！ -不妊・不育症診療パーフェクトガイド】一般不妊治療： 薬物療法 PCOS患者のメトホルミン療法の実施法と有効性. 臨床婦人科産科. 2016; 70 (4)：141-144.
3) 髙橋 俊文, 松川 淳, 永瀬 智.【知りたい最新情報がすぐわかる！ -不妊・不育症診療パーフェクトガイ

ド】一般不妊治療：薬物療法（Q7）メトホルミン療法は,インスリン抵抗性のない痩せたPCOS症例や多嚢胞性卵巣のみのhigh responder症例にも,効果があるのでしょうか？ 臨床婦人科産科. 2016; 70（4）：152-153.
4） 髙橋 俊文, 水沼 英樹. ホルモンQ＆A 子宮内膜症と心血管系疾患の関係について教えてください. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2016; 23（4）：357-358.
5） 髙橋 俊文.【性ステロイドホルモン研究の最前線と臨床応用】臨床各論 使い方の実際 月経随伴症状. 臨床婦人科産科. 2016; 71（1）：67-73.
6） 髙橋 俊文.【女性ホルモン関連薬剤の現在】総論-女性ホルモン関連薬剤とは 選択的エストロゲン受容体調節薬,選択的プロゲステロン受容体調節薬の薬理作用. ホルモンと臨床 2017;63（5）：11-16.
7） 髙橋 俊文. 思春期悪性腫瘍への対応 ヘルスケアの立場から. 第70回日本産科婦人科学会・学術講演会・生涯研修プログラム1. 日本産科婦人科学会雑誌. 2018; 70（11）：2194-2198.
8） 髙橋 俊文.【産婦人科外来パーフェクトガイド】不妊・不育 一般治療 メトホルミン療法. 臨床婦人科産科. 2018; 72（4）：149-151.
9） 太田 邦明, 髙橋 俊文, 神保 正利, 水沼 英樹. 周産期医療の進歩と今 不育症（習慣流産）予後改善のために何に注意すべきか. White. 2018; 6（2）：111-114.
10） 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼英樹. 卵巣組織凍結・移植の現状と未来. 日本がん・生殖医療学会誌. 2018; 1（1）：23-26.
11） 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【Preconception Care-健やかな母子となるための最新トピックス-】子宮内膜 ビタミンDと子宮内膜機能. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2018; 25（4）：41-45.
12） 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【女性のアンチエイジング-老化のメカニズムから予防・対処法まで】部位別 老化のメカニズムと予防・対処法 骨の老化. 臨床婦人科産科. 2018; 72（12）：1214-1219.
13） 髙橋 俊文.【不妊治療とプレシジョンメディシン】調節卵巣刺激の個別化. Precision Medicine. 2019; 12（14）：22-25.
14） 髙橋 俊文.【基本手術手技の習得・指導ガイダンス-専攻医修了要件をどのように満たすか？】生殖医療関連手技 子宮卵管造影, 子宮鏡, 採卵・胚移植. 臨床婦人科産科. 2019; 73（11）：1144-1152.
15） 髙橋 俊文.【卵巣刺激・排卵誘発のすべて どんな症例にどのように行うのか】無排卵・機能性不妊に対する卵巣刺激 クロミフェン・メトホルミン. 臨床婦人科産科. 2019; 73（7）：637-642
16） 太田 邦明, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【新世代に入ったがん・生殖医療】がん・生殖医療の現状と今後の展望 がん・生殖医療のための生殖補助医療技術の進歩. 産科と婦人科. 2019; 4（25）：431-437.
17） 太田 邦明, 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【AGEsと女性医療】AGEsと不育症. White. 2019; 7（2）：137-142.
18） 太田 邦明, 鈴木 大輔, 髙橋 俊文, 水沼 英樹.【“いつかはママに…”を応援する プレコンセプションケア】栄養代謝とプレコンセプションケア. 産婦人科の実際. 2019; 68（10）：1215-1221.
19） 髙橋 俊文.【思春期を再考する】思春期発来機序. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2020; 27（3）：11-16.
20） 髙橋 俊文. ホルモンQ＆A 原発性無月経患者に行う初期検査について教えて下さい. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2020; 27（4）：299-300.
21） 髙橋 俊文. ホルモンQ＆A OC・LEP処方前の検査で体重測定を行う意義について教えて下さい. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2020; 27（4）：300-301.

22）髙橋俊文，太田 邦明，水沼 英樹．【若年女性診療の「こんなとき」どうする?-多彩でデリケートな健康課題への処方箋】月経異常管理の実際 性分化・性染色体異常を疑ったら？ 臨床婦人科産科．2020; 74（7）：646-653.

23）髙橋 俊文．卵子の加齢と卵子の質の低下の分子機構 卵子の質は改善できるのか ？ 日本産科婦人科学会雑誌．2020; 72（10）：1145-1150.

24）太田 邦明，福田 雄介，片桐 由紀子，髙橋 俊文，森田 峰人．【着床環境の改善はどこまで可能か?-エキスパートに聞く最新研究と具体的対処法】子宮内免疫 ビタミンDは着床に影響するか? 臨床婦人科産科．2020; 74（12）：1259-1266.

25）太田 邦明，福田 雄介，片桐 由紀子，髙橋 俊文，森田 峰人．【生殖医療の基礎知識アップデート-患者説明に役立つ最新エビデンス・最新データ】一般不妊治療 プレコンセプションケア サプリメント摂取と妊孕性 葉酸，ビタミンDの有用性．臨床婦人科産科．2021; 75（1）：14-23.

26）成味 恵，高橋 一広，山谷 日鶴，清野 学，山内 敬子，太田 剛，髙橋 俊文，倉智 博久，永瀬 智．閉経後女性の内臓脂肪における脂肪細胞サイズと酸化ストレス．日本女性医学学会雑誌．2021; 28（2）：242-248.

4．著書

1） 髙橋 俊文（共著）．甲状腺機能検査．不妊・不育症診療指針．柴原 浩章編．中外医学社（東京）．2016, 98-100.

2） 髙橋 俊文（共著）．生殖医療の必修知識2017. 日本生殖医学会編．日本生殖医学会．2017.

3） 髙橋 俊文（共著）．chapter 3 生殖の病態（不妊症）1不妊症概論 新不妊ケアABC. 鈴木 秋悦，久保 春海編．医歯薬出版株式会社（東京）．2019, 63-68.

4） 髙橋 俊文（共著）．高プロラクチン血症．不妊症・不育症診療その伝承とエビデンス．柴原 浩章編．中外医学社（東京）．2019, 157-161.

5） 髙橋 俊文（共著）．症例への対応：生殖内分泌編子宮鏡に必要な生殖医療知識．子宮鏡 新常識を極める．日本子宮鏡研究会編，メジカルビュー（東京）．2019, 198-201.

6） 髙橋 俊文（共著）．子宮鏡専門医の育成 生殖医療専門医が子宮鏡専門医を取得する意義と実際．子宮鏡新常識を極める．日本子宮鏡研究会編，メジカルビュー（東京）．2019, 282-284.

7） 髙橋 俊文（共著）．第4章 高度生殖技術が周産期予後に及ぼす影響 精子異常およびICSIの影響 生殖と周産期のリエゾン．池田 智明，苛原 稔，吉村 泰典編．診断と治療社（東京）．2020, 91-96.

8） 太田 邦明，髙橋 俊文（共著）．第4章 がん・生殖医療を支える医療-がん・生殖医療における女性ヘルスケア 新版がん・生殖医療 妊孕性温存の診療 Oncofertility Recent Advances in Fertility Preservation. 鈴木 直，森重 健一郎，髙井 泰，古井 辰郎編．医歯薬出版株式会社（東京）．2020, 359-368.

9） 太田 邦明，髙橋 俊文（共著）．第2章 婦人科の超音波診断（各論）不妊治療の超音波検査．産婦人科エコーパーフェクトマニュアル．長谷川 準一編．日本医事新報社（東京）．2020, 386-396.

公的助成金獲得

1．研究代表者

1）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2016年4月1日～ 2019年3月31日（課題番号16K11080）「ミトコンドリア品質管理を基盤とした加齢による卵の質の低下に対する新規治療法の開発」（研究代表者：髙橋 俊文、研究分担者：菅沼 亮太、堤 誠司、五十嵐 秀樹）

2）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2019年4月1日～ 2022年3月31日（課題番号19K10486）「産婦人科診療における地域格差の定量的検討―医療ビッグデータとGISを用いた解析」（研究代表者：髙橋 俊文、研究分担者：太田 邦明）

2．研究分担者

1）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2017年４月１日～ 2020年３月31日（課題番号17K11287）「子宮内膜症女性の心血管系疾患発症に対する先制医療の可能性－臨床疫学的アプローチ」（研究代表者：水沼 英樹、研究分担者：髙橋 俊文）

2）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2017年４月１日～ 2021年３月31日（課題番号17K11243）「卵細胞質内精子注入法に特化した精子選択法・精子評価法の確立と治療前診断への応用」（研究代表者：菅沼 亮太、研究分担者：髙橋 俊文）

3）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2018年４月１日～ 2021年３月31日（課題番号18K09976）「ビッグデータ解析を用いた不妊患者における臨床決断支援システムの開発」（研究代表者：鈴木 大輔、研究分担者：髙橋 俊文）

4）厚生労働科学研究費補助金　成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業　2018年４月１日～ 2021年３月31日（課題番号：18060672）「配偶子凍結および胚凍結を利用する生殖医療技術の安全性と情報提供体制の拡充に関する研究」（研究代表者：苛原 稔、研究分担者：石原 理、髙橋 俊文、森岡 久尚、竹下 俊行）

5）厚生労働科学研究費補助金　疾病・障害対策研究分野 がん対策推進総合研究　2019年４月１日～ 2022年３月31日（課題番号：19EA1015）「がん・生殖医療連携ネットワークの全国展開と小児・AYA世代がん患者に対する妊孕性温存の診療体制の均てん化にむけた臨床研究／がん医療の充実を志向して」（研究代表者：鈴木 直、研究分担者：石原 理、髙橋 俊文、他18名）

6）科学研究費補助金　基盤研究（C）　2020年４月１日～ 2023年３月31日（課題番号20K10858）「災害時の産科医療教育プログラムと妊産婦行動支援のための情報ツールの開発」（研究代表者：神保 正利、研究分担者：髙橋 俊文、太田 邦明）

横山　浩之 (2016年4月～)

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

1) 横山 浩之. 子ども虐待と支援者による介入・・・ペアレントトレーニング技法を用いて. 第15回日本トラウマティック・ストレス学会 (招待講演) , 仙台市; 2016年5月21日
2) 横山 浩之. 誰でもできる発達障がい児への支援～小児科医だからできること. 第26回日本外来小児科学会 (招待講演) , 高松市; 2016年8月27日
3) 横山 浩之. 愛着障害と発達障害～類似点と相違点、そして介入への手がかり～. 第28回日本嗜虐行動学会仙台大会 (招待講演) , 仙台市; 2017年10月6 - 7日
4) 横山 浩之. 子どもの行動異常を保育・幼児教育で予防しよう. 第24回日本保育保健学会 (招待講演) , 新潟市; 2018年10月13-14日
5) 横山 浩之. 小児発達障害診療の勘所～日常診療における発達障害の見分け方. 第5回日本小児神経学会サテライトセミナー (招待講演) , 2019年6月30日
6) 横山 浩之. 子育て支援から子供の行動異常を予防しよう 子育て支援フォーラム in 千葉 (基調講演) , 千葉市; 2019年9年21日
7) 横山 浩之. 子供の心のケア. 独立行政法人教職員支援機構 令和元年度 健康教育指導者養成研修 (招待講演) , つくば市; 2019年9年19日
8) 横山 浩之. 知的障害. 第49回日本小児神経学会小児神経学セミナー (招待講演) , 幕張市; 2019年11月
9) 横山 浩之. 発達障害と愛着障害. 第11回甘えと間主観性研究会 (特別講演) , 伊豆市; 2019年7月28日

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

1) 横山 浩之. マルトリートメントによる行動異常：愛着障害と発達障がいの見分け方と介入への手がかり. 第59回日本小児神経学会学術大会(招待講演), 大阪市; 2017年6月15-17日

Ⅰ-2. 国内の地方会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

1) 横山 浩之. AD／HDの子どもと家族・保健・教育～システムで子どもをはぐくむ～. 第10回福島県AD／HD治療研究会 (招待講演) , 福島市; 2016年4月21日
2) 横山 浩之. 子どもの行動異常とその予防～小児科医だからできること. 日本小児科学会福島地方会 (特別講演)
3) 横山 浩之. 発達障害児を収束させる介入・教育について. 第8回大阪市大発達障害研究会 (特別講演) , 大阪市; 2016年6月11日
4) 横山 浩之. 発達障害のよりよい診療を目指して. 東京医科歯科大学マンデーセミナー (招待講演) , 東京都文京区; 2016年7月11日

5） 横山 浩之．保育・教育にペアレントトレーニング技法を活かす．平成28年度日本小児科医会群馬地方会（招待講演），前橋市；2016年11月２日
6） 横山 浩之．子どもの行動異常を予防できているか．第９回虐待防止・県北シンポジウム（招待講演），大崎市；2016年11月23日
7） 横山 浩之．小児科医からの提言～子どもを伸ばす関わり方～．2016年度JDDnet 第12回年次大会（招待講演），2016年12月４日
8） 横山 浩之．最近の子どもの行動異常とその対策．第36回東北・北海道小児科医会連合会総会（特別講演），福島市；2017年10月21－22日
9） 横山 浩之．誰でもできる発達障がい児への支援．第12回東海地区小児神経セミナー（招待講演），名古屋市；2018年９月８日
10）横山 浩之．発達障害臨床のピットフォール．第12回みやこ小児神経臨床懇話会（招待講演），京都市；2019年６年15日

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

該当無し

II. 海外学会

該当無し

論　文

Ⅰ. 英文

1．原著

1） Yokoyama H., Tomizawa Y., Sato Y., Kobayashi A., Katsushima Y., and Katsushima F. Team-based parent training by child specialists helps maltreated children. Pediatri Int. 2018; 60（12）：1051-1055.
2） Numata-Uematsu Y., Yokoyama H., Sato H., Endo W., Uematsu M., Nara C., Kure S. Attachment Disorder and Early Media Exposure：Neurobehabioral symptoms mimicking autism spectrum disorder. J Med Invest. 2018; 65（3.4）：208-282.

2．症例報告

該当無し

3．総説

該当無し

4．著書

該当無し

II. 和文

1．原著

該当無し

2．症例報告

1） 横山 浩之．自閉症スペクトラムを疑われた愛着障害の症例について．太田ステージ研究会誌．2016; 26：35-8.

3．総説

1） 横山 浩之．保育でも家庭でも使えるペアレントトレーニング技法について．あきた小児保健．2017; 52：25-45.
2） 横山 浩之．最近の子どもの行動異常とその予防．福島県保健衛生雑誌．2018; 31：2-7.

4．著書

1） 横山 浩之（単著）．まんがでわかるよのなかのルール（ベトナム語版）．小学館（東京）．2019
2） 横山 浩之（単著）．発達障害の臨床．診断と治療社（東京）．2020.

5．その他

1） 横山 浩之．ドクターのお悩み相談室（2016年度連載）小６教育技術、小学館（東京）
2） 横山 浩之．ガミガミしないで優しい子育て（2016年度連載）小学２年生、小学館（東京）
3） 横山 浩之．ドクターのお悩み相談室（2017年度連載）小６教育技術、小学館（東京）
4） 横山 浩之．ドクターのお悩み相談室（2018年度連載）小６教育技術、小学館（東京）
5） 横山 浩之．ドクターのお悩み相談室（2019年度連載）小１小２教育技術、小学館（東京）

公的助成金獲得

1．研究代表者

1） 科学研究費補助金　基盤研究(C)　2014年4月1日～2018年3月31日(課題番号26463404)「軽度発達障害・被虐待による行動異常を早期発見・早期対応する手法の開発」（研究代表者：横山 浩之、研究分担者：小林 淳子、富澤 弥生）
2） 科学研究費補助金　基盤研究(C)　2018年4月1日～2022年3月31日(課題番号18K10470)「発達障害や虐待による行動異常の悪化を予防する、切れ目のない支援を支える手法の開発」（研究代表者：横山 浩之、研究分担者：小林 淳子、富澤 弥生）

2　研究分担者

該当無し

西郡　秀和（2019年4月～）

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

1）　西郡 秀和. わが国における妊婦の葉酸摂取と児の神経管閉鎖障害について－エコチル調査からの知見－. 第43回日本女性栄養・代謝学会学術集会, 2019年9月5日

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

1）　西郡 秀和. 児童虐待を予防する－産婦人科医、小児科医、精神科医のコラボレーション－産科における胎児・児童虐待予防に向けた両親の支援と引継ぎの重要性. 第116回日本精神神経学会学術総会, 2020年9月30日

2）　西郡秀和. 周産期メンタルヘルスにおける大規模コホート研究の構築に向けて 周産期医学の立場からコホート研究に迫る. 第16回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 2019年10月27日

Ⅰ-2. 国内の地方会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

1）　西郡 秀和. 日本の出生コホート研究から得られた最新の知見. 福島県産婦人科医会県北地区講演会, 2020年11月5日

2）　西郡 秀和. 日本の出生コホート研究から得られた知見. 第92回栃木県産科婦人科学会学術講演会, 2020年9月6日

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

1）　西郡 秀和. 産期薬物療法の考え方. 日本病院薬剤師会東北ブロック第10回学術大会, 2020年6月30日

論　文

Ⅰ. 英文

1．原著

1) Ishikawa T., Obara T., Jin K., Nishigori H., Miyakoda K., Akazawa M., Nakasato N., Yaegashi N., Kuriyama S., Mano N. Folic acid prescribed to prenatal and postpartum women who are also prescribed antiepileptic drugs in Japan：Data from a health administrative database. Birth Defects Res. 2020; 112（16）：1224-1233.
2) Ishikawa T., Obara T., Kikuchi S., Kobayashi N., Miyakoda K., Nishigori H., Tomita H., Akazawa M., Yaegashi N., Kuriyama S., Mano N. Antidepressant prescriptions for prenatal and postpartum women in Japan：A health administrative database study. J Affect Disord. 2020; 264 295-303.
3) Iwama N., Sugiyama T., Metoki H., Saito M., Hoshiai T., Watanabe Z., Tanaka K., Sasaki S., Sakurai K., Ishikuro M., Obara T., Tatsuta N., Nishigori H., Kuriyama S.I., Arima T., Nakai K., Yaegashi N., Japan Environment, Children's Study Group. Associations between glycosylated hemoglobin level at less than 24 weeks of gestation and adverse pregnancy outcomes in Japan：The Japan Environment and Children's Study（JECS）. Diabetes Res Clin Pract. 2020; 169 108377.
4) Kikuchi S., Kobayashi N., Watanabe Z., Ono C., Takeda T., Nishigori H., Yaegashi N., Arima T., Nakai K., Tomita H. The delivery of a placenta/fetus with high gonadal steroid production contributes to postpartum depressive symptoms. Depress Anxiety. 2021; 38（4）：422-430.
5) Kuroda Y., Goto A., Koyama Y., Hosoya M., Fujimori K., Yasumura S., Nishigori H., Kuse M., Kyozuka H., Sato A., Ogata Y., Hashimoto K., Japan Environment, Children's Study. Antenatal and postnatal association of maternal bonding and mental health in Fukushima after the Great East Japan Earthquake of 2011：The Japan Environment and Children's Study（JECS）. J Affect Disord. 2021; 278 244-251.
6) Kyozuka H., Fukuda T., Murata T., Yamaguchi A., Kanno A., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Kuse M., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Japan Environment Children's Study Jecs Group. Impact of preconception sodium intake on hypertensive disorders of pregnancy：The Japan Environment and Children's study. Pregnancy Hypertens. 2021; 23 66-72.
7) Kyozuka H., Murata T., Fukuda T., Yamaguchi A., Kanno A., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Kuse M., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Japan Environment, Children's Study Group. Association between pre-pregnancy calcium intake and hypertensive disorders during the first pregnancy：the Japan environment and children's study. BMC Pregnancy Childbirth. 2020; 20（1）：424.
8) Kyozuka H., Murata T., Fukuda T., Yamaguchi A., Kanno A., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Kuse M., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., The Japan Envi-

ronment, Children's Study Jecs Group. Dietary Inflammatory Index during Pregnancy and the Risk of Intrapartum Fetal Asphyxia：The Japan Environment and Children's Study. Nutrients. 2020; 12 (11)：3482.

9) Kyozuka H., Nishigori H., Murata T., Fukuda T., Yamaguchi A., Kanno A., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Kuse M., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Fujimori K, Japan Environment, Children's Study Group. Prepregnancy antiinflammatory diet in pregnant women with endometriosis：The Japan Environment and Children's Study. Nutrition. 2021; 85 111129.

10) Murata T., Kyozuka H., Endo Y., Fukuda T., Yasuda S., Yamaguchi A., Sato A., Ogata Y., Shinoki K., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Children's Study (Jecs) Group. Preterm Deliveries in Women with Uterine Myomas：The Japan Environment and Children's Study. Int J Environ Res Public Health. 2021; 18 (5)：2246.

11) Murata T., Kyozuka H., Fukuda T., Yasuda S., Yamaguchi A., Sato A., Ogata Y., Kuse M., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Japan Environment, Children's Study Group. Risk of adverse obstetric outcomes in Japanese women with systemic lupus erythematosus：The Japan Environment and Children's Study. PLoS One. 2020; 15 (5)：e0233883.

12) Murata T., Kyozuka H., Yamaguchi A., Fukuda T., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Shinoki K., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Japan Environment, Children's Study Group. Maternal pre-pregnancy body mass index and foetal acidosis in vaginal and caesarean deliveries：The Japan Environment and Children's Study. Sci Rep. 2021; 11 (1)：4350.

13) Murata T., Kyozuka H., Yamaguchi A., Fukuda T., Yasuda S., Sato A., Ogata Y., Shinoki K., Hosoya M., Yasumura S., Hashimoto K., Nishigori H., Fujimori K., Japan Environment Children's Study Group. Gestational weight gain and foetal acidosis in vaginal and caesarean deliveries：The Japan Environment and Children's Study. Sci Rep. 2020; 10 (1)：20389.

14) Tanoue K., Nishigori H., Watanabe Z., Tanaka K., Sakurai K., Mizuno S., Ishikuro M., Obara T., Tachibana M., Hoshiai T., Saito M., Sugawara J., Tatsuta N., Fujiwara I., Kuriyama S., Arima T., Nakai K., Yaegashi N., Metoki H. Interannual Changes in the Prevalence of Intimate Partner Violence Against Pregnant Women in Miyagi Prefecture After the Great East Japan Earthquake：The Japan Environment and Children's Study. J Interpers Violence. 2021; 36 (21-22)：10013-10028.

15) Tanoue K., Watanabe Z., Nishigori H., Iwama N., Satoh M., Murakami T., Tanaka K., Sasaki S., Sakurai K., Ishikuro M., Obara T., Saito M., Sugawara J., Tatsuta N., Kuriyama S., Arima T., Nakai K., Yaegashi N., Metoki H., Japan Environment, Children's Study Group. The prevalence of psychological distress during pregnancy in Miyagi Prefecture for 3 years after the Great Eas t Japan Earthquake. Environ Health Prev Med. 2021; 26 (1)：27.

16) Yamaguchi A., Kyozuka H., Kanno A., Murata T., Fukuda T., Yasuda S., Hosoya M., Yasumura S., Kuse M., Sato A., Ogata Y., Hashimoto K., Nishigori H, Fujimori K., Japan Environment, Children's Study Group. Gestational weight gain and risk factors for postpartum depression symptoms from the Japan Environment and Children's Study：a prospective cohort study. J Affect Disord. 2021; 283 223-228.

2．症例報告

該当無し

3．総説

該当無し

4．著書

該当無し

II. 和文

1．原著

該当無し

2．症例報告

該当無し

3．総説

1） 西郡 秀和，菊地 紗耶．【助産師必携 母体・胎児・新生児の生理と病態 早わかり図解】（第VI部）産褥期の生理（第３章）産褥期のメンタルヘルス 産後うつ病／マタニティーブルーズ．ペリネイタルケア．2019（2019夏季増刊）：210-213.

2） 西郡 秀和，菊地 紗耶．【助産師必携 母体・胎児・新生児の生理と病態 早わかり図解】（第VI部）産褥期の生理（第３章）産褥期のメンタルヘルス　心理的変化のメカニズム．ペリネイタルケア．2019（2019夏季増刊）：206-209.

3） 西郡 秀和．【基本手術手技の習得・指導ガイダンス－専攻医修了要件をどのように満たすか?】産科手術関連手技 子宮内容除去術．臨床婦人科産科．2019; 73（11）：1083-1089.

4） 西郡 秀和，渡邉 一代．【周産期の感染症まるわかり 病態生理＆ケア 風疹・梅毒・パルボウイルスetc. 知っておくべき最新トピックス】GBS感染．ペリネイタルケア．2019; 38（８）：767-771.

5） 西郡 秀和，濱田 洋実．妊婦健診での超音波スクリーニングにおける妊婦週数ごとのチェックポイントは？（１）母体、（２）胎児の通常超音波検査、（３）胎児の形態異常にわけて考える．日本医事新報．2019（4975）：47.

6） 鈴木 大輔，西郡 秀和．【産婦人科処方のすべて2020－症例に応じた実践マニュアル】産科編 妊娠関連疾患 B群β溶血性レンサ球菌（GBS）感染症．臨床婦人科産科．2020; 74（４）：293-295.

7） 鈴木 大輔，西郡 秀和．【産婦人科処方のすべて2020－症例に応じた実践マニュアル】産科編 妊娠関連疾患 細菌性膣症．臨床婦人科産科．2020; 74（４）：291-292.

8） 西郡 秀和．【周産期の薬】産科編 基本的薬剤の選び方・使い方・注意点 抗真菌薬．周産期医学．2020; 50（増刊）：77-81.

9） 西郡 秀和．【周産期メンタルヘルスにおける心理社会的支援】父親の産後うつとボンディング障害．精

神科治療学. 2020; 35（10）：1113-1117.
10）西郡 秀和, 鈴木 妙子, 森 美由紀, 渡邊 一代.【産婦人科診療ガイドライン産科編2020エッセンス 助産師のケアはここが変わる！】シーンで活用 妊婦健診”感染症編”. ペリネイタルケア. 2020; 39（6）：615-621.
11）西郡 秀和.【日本の周産期事情update－出生コホート研究からわかったこと－I】妊婦の医薬品・サプリメント使用と子どもの発達. 産婦人科の実際. 2020; 69（1）：19-26.
12）西郡 秀和.【エコチル調査から見えてきた周産期の新たなリスク要因】メンタルヘルス 父親の乳児に対するボンディング障害のリスク因子は何か？ 臨床婦人科産科. 2020; 74（5）：463-468.
13）西郡 秀和.【日本の周産期事情update－出生コホート研究からわかったこと－I】企画者のことば 日本の出生コホート研究. 産婦人科の実際. 2020; 69（1）：1-4.
14）西郡 秀和.【周産期メンタルヘルスにおける心理社会的支援】父親の産後うつとボンディング障害. 精神科治療学. 2020; 35（10）：1113-1117.
15）西郡 秀和, 郷 勇人.【みんなで役立てよう 新生児スクリーニング検査】母児感染症のスクリーニング B群溶血性レンサ球菌. 周産期医学. 2021; 51（2）：240-245.
16）西郡 秀和.【女性の生活習慣病－新たな展開－】生活習慣病からみた女性のメンタルヘルス. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 2021; 28（1）：65-70.

4．著書

1） 西郡 秀和（共著）. 母性看護学②マタニティサイクルにおける母子の健康と看護. 産褥期における異常. 板倉 敦夫, 松﨑 政代, 渡邊 浩子編. メヂカルフレンド社（東京）. 2019, 400-410
2） 西郡 秀和（共著）. 今日の治療指針2020. 前期破水. 福井 次矢, 高木 誠, 小室 一成編. 医学書院（東京）. 2020, 1384.
3） 西郡 秀和（共著）. 産婦人科診療ガイドライン産科編2020. 日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会編. 2020.
4） 西郡秀和（共著）. 精神疾患を合併した、或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイド：総論編. 日本精神神経学会・日本産科婦人科学会編. 2020.
5） 西郡 秀和（共著）. 日本のエコチル調査の概要を教えてください. 早産のすべて基礎から臨床,DOHaDまで. 日本早産学会編. メジカルビュー社（東京）. 2020, 261-263.
6） 西郡 秀和(共著). 母子保健と医療制度. 標準産科婦人科学第５版. 綾部 琢哉, 板倉 敦夫編. 医学書院(東京). 2021, 655-720.
7） 西郡 秀和（共著）. 羊水量の異常. 今日の治療指針2021. 福井 次矢, 高木 誠, 小室 一成編. 医学書院（東京）. 2021, 1398.

5．その他

1） 西郡 秀和. 教えて！ ドクター メンタルヘルスのために妊娠中からママとパパができること. パパと読むたまごクラブ. Benesse（東京）, 2020, 81

公的助成金獲得

1．研究代表者

1）　科学研究費補助金　基盤研究（C）　2019年4月1日～ 2022年3月31日（課題番号26463404）「妊婦の医薬品使用と児の先天奇形発症に関連する環境・遺伝要因の解明」（研究代表者：西郡 秀和、研究分担者：小原 拓、栗山 進一）

2　研究分担者

該当無し

神保　正利（2018年10月～）

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

該当無し

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

該当無し

Ⅰ-2. 国内の地方会

1. 特別講演・招待講演・会長講演等

該当無し

2. シンポジウム・パネルディスカッション・ワークショップ・教育講演等

該当無し

II. 海外学会

該当無し

論　文

Ⅰ. 英文

1. 原著

1) Otsuki K., Ando S., Nishi T., Jimbo M. Transvaginal cervicoisthmic cerclage for patients with extremely high-risk history of preterm delivery. J Obstet Gynaecol Res. 2019; 45 (2)：454-460.
2) Soeda S., Kyozuka H., Kato A., Fukuda T., Isogami H., Wada M., Murata T., Hiraiwa T., Yasuda S., Suzuki D., Yamaguchi A., Hasegawa O., Nomura Y., Jimbo M., Takahashi T., Watanabe T., Mizunuma H., Fujimori K. Establishing a Treatment Algorithm for Puerperal Genital Hematoma Based on the Clinical Findings. Tohoku J Exp Med. 2019; 249 (2)：135-142.

2．症例報告

1) Takahashi T., Ota K., Jimbo M., Mizunuma H. Spontaneous unscarred uterine rupture and surgical repair at 11 weeks of gestation in a twin pregnancy. J Obstet Gynaecol Res. 2020; 46 (9)：1911-1915.

3．総説

該当無し

4．著書

該当無し

II. 和文

1．原著

該当無し

2．症例報告

1) 塩谷 茉智子, 前田 雄岳, 池本 舞, 那須 美智子, 遠武 孝祐, 西 健, 安藤 智, 内山 心美, 神保 正利, 大槻 克文．５回の多重臍帯頸部巻絡を認めた胎児発育不全の１例．東京産科婦人科学会会誌．2018; 67（２）：336-340.
2) 河野 春香, 澤登 幸子, 那須 美智子, 前田 雄岳, 西 健, 安藤 智, 内山 心美, 神保 正利, 大槻 克文．深部静脈血栓症、肺血栓塞栓症と胎児発育不全を併発した潰瘍性大腸炎合併妊娠の１例．日本周産期・新生児医学会雑誌．2018; 54（４）：1110-1114.
3) 那須 美智子, 内山 心美, 神保 正利, 塩谷 茉智子, 小暮 剛太, 遠武 孝祐, 前田 雄岳, 小松 玲奈, 西 健, 安藤 智, 大槻 克文．円錐切除術後の子宮頸管狭窄が一因と考えられた付属器膿瘍に対してCTガイド下穿刺が有用であった１例．東京産科婦人科学会会誌．2019; 68（１）：31-36.
4) 小暮 剛太, 対馬 杏奈, 那須 美智子, 遠武 孝祐, 前田 雄岳, 小松 玲奈, 西 健, 内山 心美, 安藤 智, 神保 正利, 大槻 克文. 子宮内容除去術後に発症した子宮動静脈奇形に対して子宮動脈塞栓術を施行した１例. 東京産科婦人科学会会誌．2019; 68（３）：387-392

3．総説

1) 神保 正利．【分娩期のドクターコール 正常逸脱ケース９ 一次・高次施設別の助産師の対応を押さえる】羊水混濁．ペリネイタルケア．2018; 37（１）：17-23.
2) 太田 邦明, 髙橋 俊文, 神保 正利, 水沼 英樹．【周産期医療の進歩と今】不育症（習慣流産）予後改善のために何に注意すべきか．White. 2018; ６（２）：111-114.
3) 神保 正利.【助産師必携 母体・胎児・新生児の生理と病態 早わかり図解】(第Ⅴ部）分娩の生理（第２章）分娩の３要素 微弱陣痛・過強陣痛．ペリネイタルケア．2019（2019夏季増刊）：167-170.

4） 神保 正利.【助産師必携 母体・胎児・新生児の生理と病態 早わかり図解】(第Ⅴ部)分娩の生理（第２章）分娩の３要素 分娩の３要素のメカニズム. ペリネイタルケア. 2019（2019夏季増刊）：164-166.

5） 神保 正利.【周産期の薬】産科編 疾患に対する薬剤の選び方・使い方・注意点 妊娠中のマイナートラブル 下肢の浮腫み. 周産期医学. 2020; 50（増刊）：266-269.

4．著書

該当無し

公的助成金獲得

1．研究代表者

1） 科学研究費補助金　基盤研究(C)　2020年４月１日～ 2023年３月31日(課題番号20K10858)「災害時の産科医療教育プログラムと妊産婦行動支援のための情報ツールの開発」(研究代表者：神保 正利、研究分担者：髙橋 俊文、太田 邦明)

2．研究分担者

該当無し

南　洋輔（2020年4月～）

講　演

Ⅰ. 国内学会

Ⅰ-1. 国内の全国学会

1. 一般演題

1）南 洋輔, 清水 裕史,高橋 信久,大原 喜裕,小林 正悟,望月 一弘,佐野 秀樹,菊田 敦,田中 秀明. 繰り返す再発に対して集学的治療が奏功した小児縦隔原発悪性胚細胞腫瘍の一例. 第62回日本小児血液・がん学会学術集会, Web開催; 2020年11月20-22日

2）南 洋輔,三森 浩太郎,清水 裕史,鈴木 眞一,田中 秀明. 右副腎原発褐色細胞腫に対して腹腔鏡手術を施行した1小児例. 第33回日本内視鏡外科学会総会, ハイブリッド開催（横浜）; 2021年3月10-13日

Ⅰ-2. 国内の地方学会

1. 一般演題

1）南 洋輔,清水 裕史,金井 祐二,田中 秀明. 巨大臍帯ヘルニアに対する抗菌性創傷被覆保護剤の使用経験. 第9回福島県新生児懇話会; 2020年12月11日

その他

センター教員名簿　（2021 年 11 月現在）

氏　名 （センター役職）	所　属	センター勤務期間 （勤務）	診療科 （専門）	卒業年	卒業大学
吉村　泰典 （スーパーバイザー）		2016年4月～ （非常勤）	産婦人科 （生殖医療）	S50	慶應義塾大
水沼　英樹 （前センター長）		2016年4月～ 2020年7月 （常勤）	産婦人科 （女性医学、生殖内分泌学）	S50	群馬大
髙橋　俊文 （センター長・教授）	医大	2016年4月～ （常勤）	産婦人科 生殖医学、内視鏡下手術	H 2	山形大
横山　浩之 （教授）	医大	2016年4月～ （常勤）	小児科 （小児発達障害、小児神経学）	S62	東北大
西郡　秀和 （教授）	医大	2019年4月～ （常勤）	産婦人科 （周産期医学、遺伝カウンセリング）	H 5	群馬大
神保　正利 （特任教授）	医大	2018年9月～ （常勤）	産婦人科 （周産期医学）	H 4	昭和大
南　洋輔 （特任助教）	医大	2020年4月～ （常勤）	小児外科	H25	京都府立医科大
鈴木　大輔 （特任講師）	太田西ノ内病院	2017年4月～ 2018年3月 （常勤）	産婦人科 （周産期救急、内視鏡下手術）	H13	富山大
太田　邦明 （特任准教授）	東京労災病院	2018年1月～ 2020年10月 （常勤）	産婦人科 （生殖内分泌、生殖外科）	H14	東邦大

センター教員名簿　（2021 年 11 月現在）

氏　名 （センター役職）	所　属	センター勤務期間 （勤務）	診療科 （専門）	卒業年	卒業大学
福島　明宗 （特任教授）	岩手医科大	2016年4月～ （非常勤）	産婦人科 （臨床遺伝学、周産期医学）	S59	岩手医科大
清水　直樹 （特任教授）	聖マリアンナ 医科大	2016年4月～ （非常勤）	小児科 （PICU）	H 2	千葉大
新津　健裕 （特任講師）	埼玉県立小児医療 センター	2016年4月～ （非常勤）	小児科 （PICU）	H 8	山梨大
齊藤　修 （特任講師）	東京都立小児総合 医療センター	2016年4月～ （非常勤）	小児科 （PICU）	H 9	東京医科歯科大
本村　誠 （特任助教）		2017年4月～ 2019年3月 （非常勤）	小児科 （PICU）	H19	福井大
磯部　真倫 （特任講師）	新潟大	2017年9月～ （非常勤）	産婦人科 （婦人科腫瘍、 内視鏡下手術、医学教育）	H14	山形大
秋山　類 （特任助教）		2019年4月～ 2021年3月 （非常勤）	小児科 （PICU）	H18	千葉大
荻原　重俊 （特任助教）	手稲渓仁会病院	2019年4月～ （非常勤）	小児科 （PICU）	H21	東京慈恵会医科大
福井　淳史 （特任教授）	兵庫医科大	2020年4月～ （非常勤）	産婦人科 （生殖医学、内視鏡下手術）	H 7	弘前大

公立大学法人福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター要綱

（平成 28 年４月１日理事長制定）

（趣旨）

第１条　この要綱は、公立大学法人福島県立医科大学組織及び運営規程（平成１８年４月１日基本規程第１号）第５条の８第２項の規定に基づき、ふくしま子ども・女性医療支援センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、妊娠の前段階から妊娠、出産、子どもの成長及び女性の生涯にわたる健康を一貫して支えるという理念のもと、子どもと女性の医療に携わる医師の養成を支援する事業を実施し、県内の子ども・女性医療水準の向上を図るとともに、産婦人科医及び小児科医の県内定着を目指す。

（組織）

第３条　センターは、次に掲げる者をもって組織する。

（1）　センター長

（2）　副センター長

（3）　センター員

２　センター長は、理事長が指名する教員をもって充て、センターの業務を総括する。

３　副センター長は、理事長が指名する教員をもって充て、センター長を補佐する。

４　センター長に事故あるときは、副センター長がその職務を代理する。

５　センター員は、センターの業務を処理する。

（スーパーバイザーの設置）

第４条　センターの業務に助言を与える者として、スーパーバイザーを置く。

２　スーパーバイザーは、理事長が指名する教員若干名をもって充て、必要の都度、センター業務に係る助言や調整を行う。

（事務）

第５条　センターの事務は、教育研修支援課において処理する。

（雑則）

第６条　この要綱に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附　則

この要綱は、平成28年４月１日から施行する。

ふくしま子ども・女性医療支援センターのシンボル・ロゴマークとロゴ

シンボルマーク（左から、春、夏、秋、冬をイメージ）

ロゴマーク（左から、春、夏、秋、冬をイメージ）

ふくしま子ども・
女性医療支援センター

ふくしま子ども・
女性医療支援センター

ふくしま子ども・
女性医療支援センター

ふくしま子ども・
女性医療支援センター

ロゴ日本語

ふくしま子ども・
女性医療支援センター

ロゴ英語

Fukushima
Medical Center
for Children
and Women

編集後記

今回、「ふくしま子ども・女性医療支援センター開設から５年の歩み」の編集を担当した髙橋です。この場を借りて、ふくしま子ども・女性医療支援センターの設立、運営に携わっていただいたすべての方々に感謝いたします。

東日本大震災から５年目の2016年に関係者の尽力により当センターは開設し、震災から10年の節目に当センターは５年目を迎えました。この間、2019年の年末からコロナ感染症のパンデミックが起こり、2020年７月に前センター長の水沼英樹先生がお亡くなりになりました。

水沼先生はその大きな包容力と実行力をもってセンターの土台作りをされました。水沼先生とスーパーバイザーである吉村泰典先生は日本の女性医療、生殖医療、産婦人科全体を牽引してきたリーダーであり、この両先生から教えを乞う機会に恵まれたことは、私にとって大変な幸運でした。

福島県は子どもと女性が幸せに暮らせる地域作りを目指しています。子どもは福島県の未来を担う宝です。福島県で女性が安心して子どもを育む環境作りこそがセンターの役目です。ここまでの５年間をセンターの土台作りの期間とすると、今後の５年間は質的な向上とさらなる発展を目指して行きたいと思います。

今回の記念誌にご寄稿いただいた内堀雅雄 福島県知事、竹之下誠一 理事長、吉村泰典 副学長、菊地臣一 前理事長、阿部正文 福島県病院局病院事業管理者、井出孝利 福島県副知事、細矢光亮 小児科学講座教授、藤森敬也 産科婦人科学講座教授、田中秀明 小児外科教授に深謝いたします。また、産婦人科、小児科（PICUを含む）、小児外科の医師・スタッフ、看護学部母性看護・助産学部門の皆様にはセンター事業の運営にご協力いただき誠にありがとうございました。

最後に、センター開設と運営を裏で支えていただいた、福島県：保健福祉部医療人材対策室（地域医療支援センター）、福島県立医科大学：総務課、企画財務課、教育研修支援課、病院管理課、広報コミュニケーション室、そして、センター内の事務をとりまとめていただいた主事の佐藤千恵子さん、髙野裕美さん、専門員の六角美絵さん、その他のすべての関係者に、もう一度、感謝の意を表したいと思います。

ふくしま子ども・女性医療支援センター
センター長　髙橋俊文

Fukushima
Medical Center
for Children
and Women

公立大学法人
福島県立医科大学

ふくしま子ども・女性医療支援センター
開設から５年の歩み

2016 ～ 2020

2016 ～ 2020 Fukushima Medical Center for Children and Women, Fukushima Medical University

令和４年２月発行

発　行　　公立大学法人福島県立医科大学
ふくしま子ども・女性医療支援センター
〒960-1295　福島県福島市光が丘１番地

印　刷　　株式会社日進堂印刷所
制　作　　株式会社進和クリエイティブセンター

Fukushima
Medical Center
for Children
and Women